

長享二年六月九日

一七六

十七年九月二十一日ノ條ニ、義尚ノ近江出陣ニ從フコト、長享元年九月十二日ノ條
ニ、建仁寺兩足院領加賀鍋谷及ビ保善院領ノ百姓ヲシテ、舊ノ如ク、年貢以下ヲ寺
家代官大西帶刀丞ニ致サシムルコト、同年十月二日ノ條ニ見ユ、

〔參考〕

〔花押彙纂〕

ト之 富樫政親 部

花押



○富樫政親安堵狀 加賀北村市 二氏所藏
文明六年十二月廿四日

〔朝倉始末記〕

二 高田專修寺大谷本願寺開基前後附加劬富樫滅亡事

斯テ兩宗富樫ヲ待請ケレハ、國主ノ裁判ニテ、其優劣ヲ決ントテ、既訴訟ニ及ケル所
ニ、富樫仰ケルハ、宗旨ノ淺深ハ知ラネトモ、開基ノ前後ハ分明ナリ、夫高田ハ往年

政親專修寺
派ヲ親鸞ノ
正流ト判ズ

堀江景用三
千餘騎ヲ率
キテ加賀ニ
到ル

親鸞聖人六角堂救世菩薩ノ告命ニ依テ、坂東修行ニ趣ク時、嘉祿二年下野國芳賀郡大内
庄高田ト云在所ニテ、始テ專修寺ヲ建立セリ、斯テ二十年ノ寒暑ヲ經テ、其後歸洛アツ
テ、弘長二年遷化ナリ、其以後大谷ノ墳墓ヲ改テ、文永九年始テ本願寺ヲ造立ス、此外
□〔述〕谷ノ佛光寺、江州野須郡木部ニ錦織寺、又相劬・常劬ニモ親鸞一派ノ寺アリ、是等廿
四輩ノ^{〔應〕}流ニシテ、正ク聖人開基ノ地ハ、下野高田計トカヤ、乍去何レモ一師同趣ノ眞
宗ナレハ、法ノ淺深ヨモアラシ、自今以後兩宗自法愛染故、毀訾他人法ノ我慢ヲスキト
振り捨ツ、自己ノ修行ヲ克練テ、迭ニ和セヨトアリケレハ、本願寺ノ門類最不安思ヒ、
此上ハカラナシ、富樫殿コソ法敵ナレトテ、長享二年戊申、加賀ハ云ニ不及、能登・越
中其外諸國ノ類葉等ニ廻文約束相極、同年五月下旬ニ、一揆悉加州石川郡ニ打臨、高尾
城ニ推寄テ、晝夜數日火水ニナレト攻ケル程ニ、富樫既討負テ、六月九日遂生害シ給
ヌ、諒ニ窮鼠齧猫ト云ハ、斯ル事ヲヤ申スヘキ、去程ニ越前ノ堀江中務景用ハ、富樫
ト一姓ナリケレハ、加州ノ亂ヲ救シタメ、^{〔親鸞〕}英林ノ舍弟ナル慈親院光玖ニ得其意ヲ、佐野
南保志比笠松ヲ引率シテ、都合其勢三千餘騎、江沼郡マテ打入トイヘテ、富樫既生害ニ
テ、高尾モ落城ト聞ヘケレハ、景用案ニ相違シテ、アキレテ扣シ所ニ、江沼一揆蜂起

長享二年六月九日

一七七

一揆景用ト
橋口ニ戦ヒ
テ敗ル

專修寺派ノ
寺ヲ襲フ
加能越ノ大
門徒ナリ

長享二年六月九日

一七八

シテ、願正入道ヲ大將トシ、敷地・福田ノ諸勢都合五千餘騎ニテ推寄ケル程ニ、景用待
請橋口ニテ大ニ合戦シテ、敵數百人討捕、堀江モ手勢少少討セテ相引ニソシタリケル、
其後一揆ノ健民等、高田ノ寺々へ攻入、宗門ヲ替サセテ、皆本願寺ニソ成シニケル、違
變ニ及寺々ヲハ、佛閣悉燒失シ、漸坊主共ノ命ヲ赦シテ、彼方此方へ追放ス、元來加賀・
能登・越中大半ハ高田門徒ナリケレモ、本願寺ノ門類各志ヲ一ニシテ、凡テ己カ宗旨ニ
攻伏スルノミナラス、剩國主ノ富樫マテヲ漫ニ生害セシメツル大逆ノ程コソ不當ナレ、
然者彼退散ノ坊主共、國々へ行ントテツフヤキコトコソ殊勝ナル、或僧ノ云ケルハ、世
ハ末世ニ及フトテモ、斯ル佛敵法敵ノ漫ニ滔物カハ、國中高田ノ僧俗ヲ撃シエタクフル而
已ナラス、或ハ無數ノ伽藍精舎ヲ俄ニ燒失シ、或ハ無双ノ畫像・木佛ヲ悉水没セシハウ
タテカリケル形勢ナリ、往時敏達天皇ノ御宇十四年、守屋大臣ト云シ者、聖德太子ノ敵
ト成、佛經堂塔僧尼等ヲ焚滅セシ昔ヨリ、九百餘歳カ其間、カ、ル哀ハ聞觸スナト云ケ
レハ、又或僧ハ今度既ニ法ノ淺深、寺ノ本末ナトヲ對決シ、公儀ニテモ負テコソ浮世ノ
恨モ有ヘケレ、斯ル惡行ノ一揆原ニ出相フテ、數代ノ國主富樫殿サへ果給ヌ、抑此富樫
介政親ト申ハ、利仁將軍ノ後胤トシテ、北斗七星ノ化現トカヤ、武勇智謀超世、其隱ナ

政親ハ北
七星ノ化現

キ大將タモ亡ヒ給ヘル時代ナリ、吾々理運ノ上ナレハ、今此段ニ成ルトテモ恨ル所更ニ
ナシ、皆是時刻ト思フヘシ、法華ニハ三界無安、猶如火宅、衆苦充滿、甚可怖畏トモ説
レ、又我宗ノ依經淨土三部ノ妙典ニハ、有田憂田、有宅憂宅、牛馬六畜、奴婢錢財、衣
食什物、復共憂之ト説レテ、八苦充滿ノ娑婆界ナレハ、何ヲカ歎キ申スヘキ、一處不住
ノ身ト成テ、樹下石上ニ生ヲ寄、呼吸ノ息ノ有程ハ一心不亂ニ念佛シテ、頓テ淨土ニ至
ンニハ、何ノ不足ノ有ヘキソヤ、南無阿彌陀佛彌陀佛トテ、足ニ任テ行モアリ、毎日
五人七人宛國ヲ出ヌハ無リケリ、各一揆ニ一味シテ、宗門ヲタニ改ナハ、共ニ安樂ナル
ヘキニ、大伽藍共ヲ打捨テ、栖居馴タル國里ヲ燒野カ原ト見ナシツ、何クニ頼ノ有ト
モナク浮レ出タル心ノ内、實ニ哀ニソ覺ヘケル、傍ノ人ノ語シハ、本ヨリモ思入タル信
淳、己カ寺法ヲ不枉シテ身ヲモ浮世モ捨タルハ、是ソ眞ノ道人ヨ、維摩經ニ深信堅固猶
如金剛ト説レ、親鸞聖人モ亦金剛堅固ノ信心ト宣シモ、此人人ノ支ナルヘシト、譽ル人
モ多カリケリ、去程ニ高田坊主皆散々ニ成ケレハ、加賀一國ハ悉本願寺ノ仕配ニテ、一
揆ノ領トソ成ニケル、依之加弼ノ一揆等、逆威ノ餘荐ニ徒黨ヲ結ツ、一天四海ヲ皆我
宗旨ニ成ントテ、先越中ヲ討平テ、能登國マテ攻從ヘケル程ニ、諸將牢人シ給テ畠山修

一揆能登ヲ
攻メ畠山義

長享二年六月九日

一七九

長享二年六月九日

一八〇

理大夫ハ江州余呉ノ庄ニ立忍ヒ、温井備中守ハ越前堀江館ニ蟄居ナリ、諒ニ僅ノ年月ニ加賀・能登・越中マテ手ニ入レシ、一揆ノ所爲ソ奇怪ナル、尙モ奢ノ餘ニヤ越前國ヲ討ントテ廻文委細ニ認テ、諸國ノ門徒ニソ遣ケル、

〔昔日北華〕 二 富樫與一向宗合戦

長享元年八月、江劔の佐々木六角大膳大輔高頼、將軍家の命に叛キ、征伐の事あり、義尙自ラ旗を進メテ、諸國の軍勢を催促ある、富樫介政親加賀の軍勢を引連、幕下に伺候ス、此次郎政親、身の長六尺勇壯の兵にて、器量群に秀つ、依之若狹の武田與多勢を先陣に手配して、江州へ發向あるに、高頼一戦に打負、甲賀山へ逃入ける、將軍家の猶江劔鈎の里に在陣也、富樫政親近年家督を繼て、奉公始に手柄の程、將軍甚た感せらるゝ、此時政親願けるハ、近年分國土民一向宗に荷擔し、國政を守らす、土貢を遲滯し、やゝもすれハ一揆を企テ、國中動亂之及ふ事度々也、幕下ハ能越兩國の士に御教書を被成下、兩國ハ加勢仕るに於てハ、早速國中の一揆を鎮め、安穩ニ仕度旨願けれハ、早速下國して、一揆等を取鎮め可申也とて、御暇給ハリ、兩國ハ加勢の義を下知有ける、長享二年春四月、雪も漸消ぬれハ、政親野々市の屋形を立退キ、同郡高尾の城へそ籠りける、

富樫家信同
家元同泰行
等
高尾城ニ
入ル

國中の一揆多キ中にも、押野ノ富樫家信・久安ノ富樫家元・山代の富樫泰行、此三家者各手勢を具して籠城ある、泰高一人ハ兼々政親トハ不快の間ゆへ、今度籠城ハせさりける、是ハ國中の土民恐怖して、爰彼へ會合し、兎角屋形へ御侘申にハ如しと、家老の山川參河守に付て、向後屋形様へ對し意背仕間敷候旨、念頃に歎訴しけれ共、政親今度將軍方へ訴、兩國へ加勢之義も有之事なれハ、一國の本願寺派を僧俗ともに攻絶さんと、兼而思ひ計ける故、中々承引なし、是非なく土民共會合し、洲崎和泉入道慶覺・河合藤左衛門尉定久兩人を大將として、加賀四郡の百姓手分してそ相寄ける、爰に加劔讚山の大坊主達と申ハ、木越光徳寺・磯部正安寺・鳥越弘願寺・若松の道場・山田光教寺等也、是等寄合評議の上、富樫介泰高江使者を遣し、今度政親殿の働キ、一國の土民を不殘殺し盡さんとの結構と見へたり、然らハ唇落て齒寒キ道理なれハ、我々も出陣に及ふ也、貴殿當國の守護たれハ、罪なき百姓を皆ころしになして、しらぬ顔も成ましけれハ、一所に出陣有へきや、若亦高尾の城へ一所に御籠り可被成心中候哉、承度と申遣ハす、此時讚山の坊主達の威勢、中々違背も及ましき體なれハ、無是非泰高も出陣也、大坊主衆ハ、讚山と云ハ、越前も讚門徒ト號する大坊あり、今云巡讚院家類ハ、野々市の大乘寺に陣を取、泰高と一所に成、一

長享二年六月九日

一八一

揆の後見とそ聞へたり、河北の者共の、淺野・大衆免に陣取、石川濱手の百姓の、廣岡山王の森に陣取りて、本陣方の指圖を相待所に、六月五日、諸方の一揆申合せて、高尾の城を惣攻にする、白山の衆徒も一揆に荷擔し、百姓原貳千人計引連て出ける、如此國中の者共、一時攻にと揉立しか、越中・能州の加勢を待テとも便なく、宗徒とたのみし士共多く討死し、或は落行ける故、政親妻子の、越中の方へ遣し度旨、光徳寺・正安寺の使者を以頼み遣し、其身は高尾の傍成嶽の城を取籠ける、倉ヶ嶽とて高尾ノ詰城、要害不雙也、此所にし暫ク兩國の加勢を見合さんと、一族郎等貳百騎をすくつて、夜の中に出入をなしければ、寄手始の知さりけるか、河合藤左衛門此事を蜜に聞出し、究竟の若者共六百餘り、慶覺坊を大將として、倉ヶ嶽の搦手より押上ケ、無二無三に攻懸る、城中不意を討れて、俄に門を開キ打て出けるか、一揆付入にして戦とける、終に政親の、水巻新介忠家と兩人馬上に引組て、廓内にある所ノ深キ池へころひ落て、兩人共水底に死したり、此時宗徒家來白崎民部・高尾若狹・同九郎右衛門・額八郎次郎・槻橋入道・内藏太・宇佐美八郎左衛門・山川監物・同小次郎等討死して、嶽の城の落にけり、政親始メ高尾城を出らるゝ時、彼城にて辭世の一首を残ス、

政親嶽ノ城ニ移ルトノ説

水死ストノ説

五蘊本空なりけれの何者か借りて來らん借りて返さん三十一才

此嶽山の池に、馬上ながら政親沈みし故、鞍ヶ嶽と言傳フレとも不審也、此後朱塗の鞍白日に水上にかむ共云、

扱高尾の城の、嶽の城落されて、大將討死のよし聞へけれの、今ハ何をか期すへき、去にても、如此大勢取卷たるゆへ、討て出たりとて、百姓原を相手に討死を遂たりとて、手柄も成まし、人々譜代の者の、切腹して埒明んと評定しけれの、はや寄手より使を以、人々必ス自殺等有へからず、御大將滅亡の上へ、寄手引取申條、勝手次第開城有へし、中にも本郷駿河守の、木越御坊の智音也、早々出城有へしと云越ける、され共譜代の面々の、政親の供せんとて、駿河守を初、八屋入道覺妙・宮永八郎三郎・勝見四郎・福益彌三郎・郡縁・吉田・小河・白崎・進藤・黒川・田入道上院也、何れも自殺して館に火をかけゝる、家老參河守ハ、一揆共大勢取付て、自害を止めけるにより、詮方なく、山ノ内祇陀寺迄落行ぬ、其外一家の人々も、皆出城して落行、終に高尾も落去しぬ、依之嶽の城中水底ハ大將の死體を引揚、菩提所大乘寺に渡しけれの、葬送の儀式を執行ふ、一家の事なれハ、富樫ノ介泰高も葬禮を加里て一首の歌を追悼しぬ、

思ひきや老木の花へのこりツ、若木ノ櫻まつ散んとは
 爰に能州・越中の諸士、將軍家^カ、富樫介政親に加勢すへきのよし、御教書を以下知ありければ、人々打寄評説こ及び、越中礪波郡の人々の蓮沼こ寄合、夫より俱利伽羅山押上る、射水郡の者ともい、放生津に勢揃して、何れも加賀を打て入らんと、五月廿八九日、牟人の頭阿曾孫八郎・小杉新八郎先陣して、竹橋の邊迄來ルころおひ、河北の一揆大勢、山々谷々より發起し、英田^{アガ}光濟寺大將と成、一戰に打勝、くりから山の麓黒坂邊迄追打にして引返す、其後能州^{能登}畠山の家臣共、黒津舟・宮腰邊迄加勢として出張しけるか、高橋新左衛門・笠間兵衛家次一揆の大將と成、濱の手^カ向ひて合戦する所、河北郡の一揆共、湖水を小舟に乘越て、跡を取切んとそ押寄せる、能州勢是に恐れて、終に引返す、亦越前朝倉貞景の家臣堀江中務景用^{始ノ名}、三郎、利仁將軍の後胤にて、富樫との同家也、救すん^ハ有へからすとて、主人に此事を達し、手勢二千餘騎、江沼郡橋迄出張せしに、はや政親討死の事相知ければ、乍殘念軍を引返し、越前を歸らんとする所、一揆とも大勢付したひ、道々合戦してそ引取る、^{○上}
 下略

〔大谷本願寺由緒通鑑〕^二 ツイニ長享二年七月、多勢ノ御門徒金澤へ押寄、手ヒ

能登畠山義
 統部下政
 親ヲ援ケ
 一揆ヲ爲
 ケラル

政親越中ニ
 逃レテ自殺
 ストノ説

政親ノ一跡
 ヲ本願寺ノ
 寺領トナス

朝倉貞景ノ
 臣山崎勝資
 一揆ト戦フ

トク責ケレハ、富樫散々ニ討負、城中ニタマリカネ、越中へ逃落ケル、御門下跡ヲシタヒ追カケ、越中ノ御門下モ牒シ合テ攻ケレハ、終ニ此ニテモタマラレスシテ、同年九月九日、政親自害シテ、一族コトコトク亡ニケル、御門下悦ヒ、天下亂世ナレハ、此富樫カ一跡ヲ、本願寺ノ寺領トナシ、大坊主分頭門徒是ヲ守護シ、蓮如上人ヨリ顯如上人迄四代、長享二年ヨリ天正三年マテ八十八年、本願寺ノ知行所ナリ、^{○上}
 下略

〔大谷本願寺通紀〕^二 歷世宗主傳^二 第八宗主蓮如、諱兼壽、^{○中}是年六月、加越宗徒擊

富樫政親、大敗之、政親自殺、門族悉亡、自是本山多事於北地云、^{○中}有記曰、文明六年以來、屢寇吾門、集衆攻戰凡十四年、至長享二年七月、立安高爲將、急攻金澤、政親亡走越中、九月九日自殺、加州遂爲宗徒領云云、案政親以女配高田主眞慧、乃所以黨助之也、^{○中}

〔續武將感狀記〕^九 山崎長門守勝資與財町圓正坊合戦之事

一山崎長門守勝資ハ、越前國ノ人ナリ、長享二年、加賀・能登・越中ノ一向門徒亂ヲ興シ、加賀ノ國ノ守護富樫介政親ヲ攻テコレヲ殺シ、能登國ヲ襲テ、畠山修理大夫ヲ追出シ、越前國ニ打入ントス、越前ノ國ハ、元來尾張守高經守護ノ國ニシテ、斯波家代々ニ傳ハリ、其家臣朝倉彈正左衛門尉貞景カ父祖相承テ、國務ヲ施行セシカハ、此由ヲ聞ト其マ、舍弟小太郎左衛門教景ニ、前波藤左衛門・緘藤民部丞・上田・中村・

吉川・高間以下一萬八千餘騎ヲ差副テ、九頭龍川ノ岸ニ陣ヲ張、川ヲワタサハ、半涉ヲ討ント待懸タリ、係ル處へ、一向門徒六萬餘リノ大軍ニテ、鯨波ヲ作り、在家へ火ヲ掛燒拂フ、中ニモ財町ノ圓正房ト云大剛ノ荒法師、黒糸威ノ腹卷ニ、釣鏡ノ差物サシ、駱駝ノ馬ノ太ク逞シキニ打ノリ、大長刀ヲ水車ニ廻シ、眞先ニ進ミ、朝倉勢ヲツキ破ラムトス、山崎長門守ハ教景ノ陣ノ左ニアリケルカ、是ヲ見テアラ特々シノ一毅下開シハラノ振舞カナ、是ヲ討テ、味方ノ氣ヲツケハヤト云マ、ニ、三尺アマリノ大双ノ鑓ヲ打フリ、圓正坊ト一交モセス戰タリ、双方聞フル手垂ナレハ、斬モ突モサラニ透間ノアラハコソ、由々シキ見物ナリ、半時ハカリ更ニ雌雄ヲ分サリシカ、如何シケム、圓正坊ノ薙刀、鐔元ヨリ折シカハ、圓正イサ、カ氣後テ見エシ處ヲ、山崎得タリト綿嚙ノ外ヨリ、押付ノ板ノ下マテ突徹ス、痛手ナレハ、ナシカハ少シモ恠ヘキ、馬ヨリ眞逆ニ落ケルヲ起シモ立ス、直ニ首ヲ取、圓正一人討ルレハ、一毅乍ニ裏崩シテ、加賀國へ引返シ、越前國ハ無爲ニ治レリ、然後ニ、山崎カ勳功拔群ナリトテ、六萬貫ノ大莊一所ノ乃貢ヲ、此恩賞ニ引レケリト也、抑コノ亂ノ張本ヲ尋ヌルニ、加賀・能登・越中ノ國々ニハ、高田專修寺ノ眞佛上人ノ門徒多カリシニ、文明ノ頃、蓮如上人

圓正房ヲ討
取ル

北國へ下向アリテ、越前ノ國吉崎ニ、一字ノ道場ヲ建立アリテ、勸化說法繁昌セシカハ、終ニ北國ニ本願寺派・高田派ノ兩門徒ヲ爲セリ、兩派互ニ宗義ヲ讚譚シ、蟲眞ノ法論ヲ起、其終ニハ合戰ニ及フ、是ニ於テ、守護ノ富樫介、高田派ハ古シ、本願寺派ハ新シケレハ、是ヲ停廢スヘシト云、門徒ハ、高田ハ枝葉ナリ、本願寺ハ根本ナリ、何ソ根本ヲ停メテ、枝葉ニ循フヘキヤト云テ、忽ニ怨嫉ノ念ヲ募テ、殺伐ノ鼓ヲ擊、富樫介ヲ冤殺ス、此時天下傾覆シ、朝廷ノ紀綱ユルミ、柳營ノ威嚴行ハレサルハ、論スル處ニアラネトモ、蓮如上人ノ我門徒ヲ教化シテ、コノ不法ヲ行フモノヲ禁セサルハ何ソヤ、上人ノ慈悲廣大ニシテ、末世極重惡人ヲ引導シテ、長時永劫ノ暗ヲ遁レ、三界六道ノ迷苦ヲ離、直ニ無量光明ノ淨刹ニ生ヲ得セシメ玉フ、佛智方便自在ナラハ、何故ニ兩派ノ勝劣ヲ論シテ、寸長分短ヲ爭ハシムルヤ、方便自在ヲ以テ、愚蒙ヲ開キ、迷霧ヲ霽サハ、誰カ甲冑ヲ身ニ纏ヒ、戈矛ヲ手ニ握テ、修羅界ノ徒トナルヘキ、高田門徒ノ祖眞佛上人ハ、親鸞上人ノ直弟ニシテ、親鸞上人開基ノ下野國大内莊柳島ノ御堂高田專修寺ノ事也ヲ相承セラル、時ニ本願寺ノ二世如信上人イマタ誕生ナシ、然ルトキハ、法脉ハ高田ヲ兄トシ、本願寺ヲ弟ト云ヘケレトモ、共ニ是七祖相承ノ易行歸依他力本

願ノ法流ナリ、何故ニ枝葉根本ヲ議スルヤ、旃檀黃沉ノ馨香、大小ニ就テ、臭ヲ異ニスル理ナク、江淮河漢ノ水、源ハ即流ノ本、流ハ即源ノ末ナリ、遠近ニ依テ、コレヲ別ヘケムヤ、然ルトキハ、眞佛上人ノ教化ト、蓮如上人ノ慈誨ト、豈本末ノ優劣ヲ擧テ、其長短ヲ軒輊スヘケンヤ、蓮如上人はヲ諭シテ、兩派和融ノ議ヲ主張セラル、ニ及ストモ、北國ノ民ヲシテ、劔戟ヲ振ヒ、親戚離散シ、憲法ヲ猜テ顧サルニ至ルトキハ、殆宗祖上人ノ罪人ナリ、

〔越登賀三州志〕

雜錄 考五

賀越能三州土寇蠱起富樫氏失社稷

長享二年戊申春、政親高尾城ヲ修ス、高尾城在石川郡高尾村領、今其所ヲ土人御城山ト呼フ、今ハ遺跡不詳、七國志作田江、又作高雄、竝ニ非ナリ、夏四月、野々市ヨリ徙テ兵ヲ講メ、土寇討伐ノ形勢ヲ顯ハス、因テ押野石川郡ノ富樫家信、系圖ニ家信ト云、久安郡、ノ富樫家元、系圖ニ家明・山代郡、ノ富樫泰行、系圖ニ泰信・量、ヲ首メ、世臣恩家信ト云、久安郡、ノ富樫家元、系圖ニ家明・山代郡、ノ富樫泰行、系圖ニ泰信・量、ヲ首メ、世臣恩士弓ヲ攝、槍ヲ荷フテ馳聚ル、獨リ富樫泰高ハ、滿春ノ三男ニシテ、政親ノ祖父ノ説アリ、非ナリ、不和ナレハ之ニ與カラス、略 一書ヲ按スルニ、政親ノ臣八屋藤左衛門入道妙覺、政親ヘ十三條ノ諫言ヲ記シ進ムトイヘ著、來テ奮闘ノ死ト云、愈ヨ破賊ノ軍議斷決シ、既ニ兵制編伍ノ聞ヘアレハ、賊黨已コヲ得ス、險阨ニ憑陵メ、隣國ノ援路ヲ防禦センコヲ要シ、各其方兵ヲ賦リ、五月廿六日首途ス、蓋シ越前

八屋入道妙覺政親二十條ノ諫言ヲ進ム

久安ト高尾城ノ距離二十餘町
木越光德寺
磯部勝願寺
鳥越弘願寺
若松ノ道場
山田光教寺

口ヘハ、安藤九郎ヲ首魁トメ、賊衆二千、敷地・福田竝ニ江沼郡ニ鱗碎ス、越中口ヘハ越智伯耆ヲ首メトメ、賊兵四千、俱利伽羅・松根竝ニ河北郡也、一本ニ俱利伽羅、笠師・松根三所トアルナリ、雲屯ス、又洲崎泉入道慶覺坊、坊間ノ俗本謬妄甚シ、或ハ須崎ト書シ、或ハ和泉守ト書シ、或ハ鏡覺ト書ス、賊魁ノ名更正スルニ足ストイヘ、景周其履歴ヲ挽入ス、慶覺坊モト江州ノ者ニテ、洲崎兵庫ト云、僧蓮如ノ弟子トナル、加州河北郡松根ニ堡ノ住シ、森下・柳橋・小坂・大樋マテ押領地ト云、其事ハ天文十九年ニ記ス、又石川郡米泉ニ住メ、西泉・泉野ノ三泉ヲ領分トシ、御山ノ本源寺ト威權ヲ爭フ、故ニ自カラ泉入道ト僭號ス、夫ヲ後人附會シ、和泉守ト記ス、誤マレリ、高尾城陷ルノ後、一道場ヲ米泉ニ構ヘ、蓮如ヨリ授與セシ行基ノ作ノ彌陀ヲ安置ス、慶覺坊ノ遺墳今猶米泉ニアリ、慶覺坊ハ即チ今ノ金澤百姓町慶覺寺ノ祖也、米泉ノ道場ヲ數十年ノ後寛永年中百姓町ヘ移スト云、同十郎左衛門正季・河合藤左衛門宣久、河合宣久ハモト攝州多田氏ノ族也、後ニ越前ノ朝倉家ニ來住シ、河合藤左衛門ト改名メ、釋賊ノ首魁ヲナス、孫藤左衛門代ニ石川郡坪野村ニ轉居シ、名ヲ才覺ト改ム、今猶坪野ニ才覺第ノ遺號アリト云、其末孫慶長中町人トナリ、金澤ヘ出テ坪野屋源兵衛ト云、木倉町ニ住ス、其後岩谷牛右衛門遺第ノ内、中右衛門百二十二歩ノ所ニ油碓ヲ設ク、金澤ノ油ノ碓元ヲナシ、今ニ至ル、今ノ豎町油屋源兵衛先祖ナリ、石黒孫右衛門、天正ノ初メ賊將石黒土佐守政辰アリ、此族カ、ヲ首魁トメ、河北郡ノ賊衆ヲ集メ、久安今猶遺堡ニ新壘ヲ修メ、久安按スルニ、上文ニ富樫家元久安ニ住セリ、然レハ家元高尾城ヘ保ムヲ以テ、跡アリ、高尾ト久安ノ間相、徒臘月ヨリ明年五月マテ修理スト云、高尾城ニ對ス、距離ト二十餘町、又木越ノ光德寺、今木越村ニ梅一其舊迹ニ據テ賊營ヲ造ルカ、此時賊、高尾ト久安ノ間相、徒臘月ヨリ明年五月マテ修理スト云、高尾城ニ對ス、距離ト二十餘町、又木越ノ光德寺、今木越村ニ梅一相傳僧蓮如梅杖ヲ倒植スル者ヨリ、枝葉生ノ如此ト、殊ニ知ラス、是垂枝梅一種也、又此光德寺ヲ世ノ印本廣德寺ニ作ル、非ナリ、此寺ハ富樫泰家出家ノ後、木越ニ建立、其後永正中高田門徒ノ書ヲ避ケ能州ニ移ル、今能州七尾ニアリ、西流也、又金澤六枚町光德寺ノ祖モ、明德三年、磯部ノ勝願寺、世本正安寺ニ作ル、非也、今越後、鳥越ニ建立也、然レトモ茲ニ云者ハ能州光德寺祖也、磯部ノ勝願寺、高田ニ住ス、西流也、瑞泉寺是也、鳥越ノ弘願寺、弘願寺ハ觀應元年本願寺覺如ノ眞弟玄頓加州ヘ下向、鳥越ニ弘願寺建立、今ハ津幡ニアリ、院家東ニアリ、院家東流也、越加記ニ以上三寺ニ吉藤ノ專光寺ヲ并セテ、之ヲ四郡ノ傳ト此頃稱スト云、專光寺ハ今金澤家東流也、按スルニ、蓮如ノ次男ノ兼領ト云ハ、越中勝興寺ノ住持タリ、然ルニ勝興寺ヲ蓮如ノ四男蓮誓ニ讓リ、加州ノ若松ニ一道場ヲ建テ、之

讚山大坊主
野々市大乘寺

二居テ其法義ヲ弘ム、這兼鎮ノ子ヲ蓮能ト云、此僧江沼郡ノ山田村ニ光教寺ヲ立テ、自カラ開基トナル、若松ノ道場ハ後ニ小立野ニ移シ之ヲ御山ト號スト云、或云、此頃本願寺ヨリ子院ヲ下シ、本源寺ト號シ御山ニ置ト也、然レハ此本源寺、即チ若松ヨリ遷ス者カ、不詳、一説蓮誓天文十六年高木場炎燒ノ後、江沼郡山田村ニ住持シ、光教寺ト號スト、此説ニヨレハ此長享二年ノ頃ニハ、未タ光教寺ハ無ハツ也、然レ共今本文ニ載スルモノハ、舊書ニ姑ク從フ也、世本ニ山田坊主ト此頃ノ記ニアルモ、這光教寺ノノ、ノ讚山大坊主ト號スル大坊アリ、今云、巡禮院家ノ類カ、也、以上木越・磯部・鳥越・若松ノ四所皆河北郡ナリ、

笠間家次
宇津呂備前

野々市大乘寺 按スルニ、大乘寺、寺號ハ、其始弘長三年富樫家尙ノ子、野々市ニ建立アツテ、大乘寺ト號シ、眞言ノ師澄海阿闍梨住持ス、然ルニ正應四年富樫氏大乘寺ヲ改メテ禪院トシ、徹通和尚ノ弟トモ云、世也、八事體朝ス、徹通ノ死ハ延應二年九月十四日、ヲ請ノ開山トス、故ニ徹通ハ寺號ノ開基ニハ在サルコト知ヘシ、其後富樫家善也、五年長化五年ニ當リ、大乘寺ニテ大會アル、明峰和尚ヲ歸依ノ、大乘寺ニ置、是即チ大乘寺ノ三世也、其後此寺ヲ金澤木新保ニ遷地ス、蓋シ高德公ノ時代ト云傳ヘテ、年月不詳、厥後今ノ金澤大乘寺坂邊ニ在シヲ、元祿十年明州和尚ノ時、今ノ寺地山ヘ遷ス、又明智記ニ、越前永平寺ノ三世義介和尚ハ、俗姓藤原ニシテ、利仁將軍ノ孫富樫吉信ノ後胤ニテ、越前足羽郡ニ出生ス、其親族ノ故ヲ以テ、富樫家尙ノ弟トモ云、請待シ、義介即チ永平寺ヨリ賀州ヘ來リ、石川郡ニ會シ、種々商議ヲナシ、富樫泰高ハ同家ナレトモ、政親ト常ニ世貫ノ本支ヲ争ヒ、鴻毛ノ親ナクノ相善カラサレハ、是ヲ僥倖ト勾引ノ、加賀ノ守護ト仰キ諸賊ノ主トス、而ノ諸賊ヲ指麾セシム、又笠間兵衛家次 石川郡ニ笠間郷、又笠間村アリ、賊衆ヲ率テ、野々市ノ馬市ニ屯ス、又宇津呂備前 宇津呂リ、疑クハ此地ニ住セルカ、賊衆ヲ率テ、野々市ノ馬市ニ屯ス、又宇津呂備前 宇津呂良、又宇津尾ニモ作ル、能美郡波佐谷ノ堡主也、相傳備前ノ祖先ハ、御幸塚ノ藤原實定ノ子ヲ養子トシ、是ヲ淡路守定元ト云ヨリ、數世相續、備前ニ至テ釋賊ニ與シ一隊ノ將タリ、備前ノ子ヲ丹波ト口碑ス、賊衆五千ヲ率テ、野々市諏訪ノ樹林ニ屯ス、山本入道圓正 下文ニ財町圓正アリ、是ト同人耶、景周又按スルニ、藝ノ組ニ、六箇總組中ト云名目アリ、然レハ此文ノ六箇ノ賊衆トアルハ、即チ六箇總組ノ事ナルヘシ、其手下ノ賊衆ヲ率テ、山科 石川郡ニ來リ、高橋新左衛門ノ 按スルニ、河北郡木目谷村領ニ城山ト今土人言所アリ、二百年前ニ高橋藤九郎ト云者居住シ、夫ヨリ七左衛門ト云マテ五代此所ニ住ス、七左衛門ノ子ヨリ、此所ノ土民トナルト云、然レハ這新左衛門此

山本圓正
高橋新左衛門

族成、一黨ヲ首メ、六箇ノ賊衆ヲ率テ押野 石川郡ニ雲集ス、又安吉源左衛門家長 今石川郡安吉ヘシ、相傳フ、大窪源左衛門家長築クト云、大窪ハ本姓也、安吉ニ住セルユヘ、此頃安吉源左衛門ト呼シト也、越加記ニ云、家長ハ山城國愛宕郡嵯峨ノ産也、其先源平兵亂ノ時、賀州ニ來ル、而ノ長享ノ頃家長安吉ニ築城ノ賊將タリ、且手取川邊ノ田地四萬石分ヲ領ノ、河原組ニ隊將タリ、故ニ今モ相川村・石立村邊ヲ、四萬石浦ト遺號ス、天文二十年遁世剃髮ノ、淨土寺ヲ海ト號ス、即チ今ノ安吉淨土寺ノ祖也、家長ニ子アリ、兄ヲ了明ト云、是モ出家トナル、其弟大窪忠左衛門安治ト云、一作五郎、即今ノ藩臣大久保伊左衛門祖也、然ルニ今伊左衛門家譜ニハ、此先祖ノ賊魁ナルヲ忌カクシ、吾國初筮仕ノトキ、本國モ參河ト書シ、大窪モ大久保ニ書カヘタルト見ユ、其實ハ本注ニ記スル通り也、此大窪ノミニモ非ス、國初筮仕ノ士ニ此例多シ、家長ノ妻ハ富樫政親ノ家老山川參河守ノ妹也、天文十九年ニ安吉ノ城ヲ家臣窪田大炊允經忠ニ讓ル、經忠實ハ家長ノ姉也、經忠相繼テ又河原組ノ賊將タリ、越加記ノ天正四年八月二日賊將書札ノ連判中ニモ見ユルナリ、河原隊ノ賊衆ヲ率テ、額谷 石川郡ニ屯ス、又石川郡瀬海ノ賊徒ハ、廣岡山王 石川郡ノ林ニ聚ル、又加賀郡ノ賊徒ノ大衆免 免作目非也、在河北郡、或說ニ、今ノ談義所村邊ニ、古ヘ神宮寺ト云アリ、今ノ神宮寺村其邊ナ、談義所トハ、此寺主ノ佛教ノ談義所ナレハナリ、大衆免ハ此寺ノ大衆領ノ田地ニシテ、廷議免許ナレハ大衆免ト其頃呼シヨリ、後世ノ地名トナルト云、二聚ルモアリ、而ノ諸部ノ賊衆大乘寺 上文所謂大、主使ヲ埃、一本此時白山衆徒モ賊ニ與シ、百、斯テ指麾ニ依テ、本月十日諸賊高尾城下ニ蟻聚ノ猛攻ス、城兵防クニ堪ス、鬪死ノ手足所處ヲ異ニシ、或ハ賊ニ降テ頭ヲ繼者數百、然レトモ隣國ノ援軍來ラス、政親以爲ラク、賊徒援路ヲ斷ヌト、即チ松坂八郎信遠ニ援路ヲ披カンコト命ス、因テ信遠十三日 一書作正月十三日、非也、ノ味爽ニ、部下ノ精甲二千ヲ帥ヒ、城ヲ發ノ槻津 今作月津、在江沼郡、ニ到レハ、江沼郡ノ賊黨今江久太郎 今江兵衛ノ、猶子トアリ、ヲ首魁トノ之ヲ圍ム、時ニ信遠力軍中賊ニ内應ノ者強半、却テ倒戈ノ戰フ、

安吉家長

家長ノ妻ハ
山川高藤ノ
妹

隣國ノ援軍
來ラザルニ
依リ政親松
坂信遠ニ援
路ヲ開カシ
ム

信遠切齒スレ_レ當ルニ堪ス、親兵僅カニ三百ト高尾へ退ント、夜ニ紛レ今湊在石川郡、註詳壽永二年ヲ涉リテ、此方へアカルヲ、長屋石川郡ノ村名也、舊文ニハ今湊ヲ涉ラントスルニ、長屋ノ賊追撃ストアリ、然レ_レ長屋ハ能美郡ニ非ス、舊文ノ誤也、故ニ今此ニ改正ス、ノ賊群起メ追撃シ、信遠カ馬ヲ射洞シ、墜鞍苦死ス、痍兵犇北巨河ニ溺死ス、漲波爲ニ赤シ、又山川參河守モ府兵千五百ヲ從カケ、高尾ヲ發シ、宮腰・大野竝石川郡ニ到ル、高松河北ニ聚ル賊徒、浦上九兵衛・馬飼喜八郎ヲ渠魁トメ、五千餘蠡起シ、四面ヨリ齊進夾攻スレハ、參河守防戰ニ疲レ、山路ヲ指テ避ントスルヲ、賊衆銳氣ニ乘シ連撃スレハ、列隊瓦解、癡者キツクノ者、斃倒ノ者、相枕藉スル_一莽ノ如シ、弊兵僅ニ百餘ヲ以テ高尾へ北歸ル、賊衆膽氣益壯ンナリ、即チ又金森玄英入道了然ヲ唱帥トメ、能美・江沼ノ賊二千、越前口へ到ラシメ、若林藤内友澄愚按、天正八年ニ見ユル長門ノ族ナルヘシヲ唱帥トメ、加賀郡ノ賊一千、越中界へ到ラシメ、笠間兵衛・高橋新左衛門ヲ唱帥トメ、賊二千能登界へ到ラシム上文ニ笠間ハ馬市ニ屯シ、高橋ハ押野ニ屯ストアリ、然ルニ今又能登界ニ到ルト、不審、然レトモ姑ク古記ニ從フ、是ヨリ先キ賀州ノ土賊討伐ノ援兵ノ事、將軍義尚公ヨリ越前・越中・能登へ教書下ル、因テ越中四郡ノ代官松原出羽守信次一本之ニ加本間與九郎ヲ、騎卒一千ヲ聚メ、竹本石見守ヲ隊將トメ、放生津射水郡ニ陣セシメ、中郡ノ甲卒八百ニ稻川半太ヲ隊將トメ、吉江ワツサハ此地名未考・曰澤此地ニ陣セシメ、礪浪郡ノ甲卒七百ニ、田原新吾ヲ隊將

トメ、蓮沼礪波郡ニ到ラシメ、五月廿八日一作廿九日、阿曾孫八郎・小杉新八郎這二人ハ加賀浪人トアリ、按ルニ阿曾ハ高尾城陥ルトキ、阿曾孫六ト云者アリ、此族ナラン、小杉ハ永正三年江沼郡ノ賊將ニ小杉ト有テ名ナシ、疑クハ此新八郎ノ族ナラン、銳兵二千ヲ率ノ先鋒タリ、三隊ニ分テ俱利伽羅ヨリ賀州へ亂入ス、時ニ賊將越智伯耆是ヲ逆へ、若林藤内不動嶽按ルニ、俱利伽羅中ノ山名也、詳ナラスヨリ回テ激戰スレハ、越中ノ衆師敗潰シ、清水谷此地名今不詳へ自カラ蹂踐ノ陥ル者大半也、孫八郎馬ヲ釋テ徒行奮撃シ、塔壩ドテニ陟テ暫ク休憩スルヲ、賊將安井源五、其弟長九郎ト俱ニ馳リ來テ斬殺ス、越軍之ヲ見テ險所入カタキヲ知り、海濱へ回ツテ亂入セント、却キ北ルヲ、伯耆追撃ノ首ヲ斬_一若干級也、殘ル越兵大野ニ到ルヲ、英田ノ光濟寺英田ハ河北郡ノ古郷號也、光濟寺ハ今ノ安江木町光濟寺ノ祖、與力ノ士暨ヒ賊黨之ヲ撃、伯耆モ亦越兵ノ大野へ回ルヘキヲ察シ、爰ニ來リ合攻スレハ、越軍瓦崩メ走北ス、復能州畠山義統一本作義元ノ援軍黑津舟河北郡ニ到ル、時ニ賊將笠間兵衛・高橋新左衛門是ヲ逆へ挑戰ス、這卻ニ加賀郡ノ賊黨湖水大野瀉ニ艦ヲ走セテ、其背ヲ遮リ夾撃ス、能州ノ兵卒七慌八亂メ敗亡ス、時ニ六月五日也、茲日高尾城下ノ賊軍愈ヨ雲擾ス、七日ノ明發ニ鳴鑼桴鼓ヲ合セテ一齊ニ堵牆ノ猛進シ、矢石ヲ飛シ吶喊ヲ揚テ雷震ノ暴攻ス、府兵モ利器ヲ列シ嚴警守禦ス、城ノ正門ハ松山左近ヲ將トシ、背門ハ額谷口ト云、森宗三郎ヲ將トス、其他齋藤八郎・安江彌太郎・小早川半彌・

新倉將監・淺井九八等前後ヲ指麾ノ兵ヲ按ス、本郷修理進春親性勇悍ニノ坐カラ守ルニ堪ス、部下ノ甲士ヲ帥ヒ城門ヲ發シ、河合藤左衛門ノ一隊ヘ討テカ、リ健激シ、河合ヲ刺ントスレモ、河合老革ニテ相當ラス、河合カ手下ノ賊將伊藤久内ノ爲ニ擒セラル、春親ノ子松千代丸享年二繼進シ、伊藤ヲ斬殺シ、且木村八郎九郎ト支撐シ、木村ノ爲ニ獲レヌ、ヒルナカ停午ニ至テ互ニ休戦ス、時ニ府兵戦死スル者擧テ數フ可カラス、所謂額丹波・同八郎四郎・林正藏坊・弟六郎二郎・本郷修理進・同松千代丸・高尾若狹・槻橋彌二郎按ルニ文明六年ニミユル豊後ノ後耶、今石川郡ノ月橋村領ニ御藏山ト云所アリ、富樫氏城米ノ倉跡トテ、今モ土中ヨリ焦米出ト云、其代官ヲ槻橋彌四郎ト云傳フ、此彌二郎ナルヘシ、齋藤藤八郎・安江彌太郎・同三郎・宇佐美八郎左衛門・山田彌五郎・廣瀬源左衛門河北郡上山田村領ニ廣瀬伊賀守古城迹アリ、若クハ此耶同又七・德光二郎・松木新五郎・阿曾孫六上文所謂孫七郎族ナラン・霜田伊豆坊・奈良與八郎・松原彦四郎・多田源六・石田帶刀・同二郎三郎・板倉喜内・森勝介・岡豊後・佐々木志摩助・柏原與市・古澤勘七・同朋知阿彌、越前ノ士溝口・一木兄弟等ヲ首メ二百餘員ト云、富樫家譜ヲ按ルニ、此トキ政親素意ノ遂カタキヲ思量シ、光徳寺・勝願寺ニ乞テ政親ノ室ヲ越中へ退ソカシムトアリ、景周疑フ、光徳寺・勝願寺ハ讚山坊主ニノ敵徒也、豈彼ニ囑ムノ理アラランヤ、而ノ恩顧ノ臣五十有七人、其餘ノ府兵若干人散離ス、山川參河守ハ手兵ヲ從ヘ再ヒ城門ヲ發シ、山内註在上文賊黨ノ首魁三池掃部力陣ヘ擊進シ、掃部力隊ノ卻アルヲ見テ、參河守祇陀寺

愚按、石川郡吉野ニ寺町ト云所アリ、古ノ祇陀寺開山ハ大智禪師也、富樫昌家ノ叔父定照居士家ノ此大智ヲ歸依シ、居士隱居スルノトキ、其館ノ吉野ニ在ケルヲ造立ノ祇陀寺ト號シ、大智ヲ住セシム、是延元中ノ事ト云、大智位牌ニハ貞治丙午十二月十日トアリ、大智ノ師明峰此處ニ隱居ス、故ニ明峰ノ遺蹟アリ、嘗テ明峰祇陀寺ニ在ノトキ、其邊ノ十勝ヲ選題ス、所謂大白山・飛龍岸・高月池・鉢頭峯・虎狼山・白布瀑・仙雲峰・高門橋・月影澤・雲龍山是也、其詩ハ傳ラス、惜ムヘシ、大智偈頌一卷及ヒ逸篇一卷今印行ノ本アリ、其卷中鳳山山居八首アリ、即チ大智祇陀寺ニテノ詩ナリ、鳳山トハ即チ祇陀寺ノ山號、鳳凰山ノ略題也、其詩秀逸幽清ニシテ、義堂・絶海モ舍ヲ避ヘシ、景周既ニ是ヲ燕臺風雅中ニ收、故ニ其詩ヲ茲ニ略ス、景周會テ天明三年三月十四日、小松城代成ノ路中、栗生湊ノ二官渡鴻水汜濫艇ス可カラスシテ、此山徑ヲ取テ進ム、羊腸崎嶇、肩輿中ヨリ望ム所ノ九十九溪、蝙蝠橋等ノ風景甚タ古瘦タリ、巖峇翠ヲ疊ンテ、老松間山花隱見ス、即チ先導ヲ求メ、歩ノ祇陀禪閣ノ舊趾ヲ探ルニ、老櫻一株アリ、方俗是ヲ三度櫻ト號ス、此名ヲ得ル者ハ、四月上旬開花シ、下旬ニ至テ猶落花セス、其花壽ノ長キヲ以テトナリ、又大鼓野アリ、踏所響アリ、蓋シ按スルニ、祇陀寺此地ニ創造ノ後、百年所ヲ經テ祝災ニ罹リ、其後越中守山ニ再興アリシヲ、慶長中金澤八坂ニ遷地シ、大安寺ト改號ス、其後故アリテ鶴林寺ト云、今ノ鶴林寺即チ是ナリ、今ノ金澤寺町ノ祇陀寺ハ延寶中大乘寺ノ子院永昌院ヲ改メ、祇陀寺ト號スル者ナリ、へ驅ヌケ、夜ニ至テ翳行ノ南越ノ大野ヘ退ソク、一説高尾城陷ノ時、參河守自害セントスルヲ、賊黨是ヲ止ムトアリ、景周按スルニ、野々市村領ニ今山川館ト云所アリ、此一既ニ上文ニ注ス、富樫系圖ヲ考ルニ、家直ノ弟ニ、山川繁家ト云アリ、疑クハ此參河守ノ祖ナルカ、小河隼人成定ハ寺井豊後力堅陣ヲ衝、寺井ノ子ヲ寺井ハ賊將也、舊記ニ寺井ノ子十四歳トアリフ處ヲ賊徒發箭射洞シ、且首ヲ斬、同八日ニハ賊軍愈ヨ薄ツテ陸城セシカハ、政親奮然トノ自カラ歩騎ノ兵ヲ激マシ、虎怒龍騰血戰、屢群賊ノ膽氣ヲ奪フトイヘトモ、諸兵傷多ク、羸軍彫甲巨張ノ壯賊ニ當ルヲ能ハス、政親城ニ還テ自裁ス、嬖童千代松丸介錯シ、群賊中ヘ馳入搏戦ス、時ニ賊衆城ニ火ヲ縱ツ、千代松丸力疲レ火中ニ入テ焦死ス、因テ宮永八郎三郎宮永氏ハ按スルニ、宮永七郎國員ノ後ナルカ、然レハ林氏ト同族也・勝見與次郎・福光彌三郎・那田・小河・

吉田・白崎・進藤・黒川 那田以下六人ハ姓ノミ存シテ、諸記其名ヲ載セス、 與津屋五郎・谷屋入道徳光・西林坊・金子・田上入道 谷屋以下四人モ舊記其名ヲ闕、 長田三左衛門・宮永左京進・澤井彦八郎・安江和泉守・神戸

七郎・御園筑前守・同五郎・槻橋三左衛門・同近江守・同式部丞・同彌六・同三位坊 上

二槻橋彌二郎アリ、今此五人ヲ併テ六士、皆文明六年ニ見ユル槻橋豊後ノ後裔ナルヘシ、

自割ノ恩ニ報フ、實ニ長享二年六月八日也、富樫叙用ヨリ二十有三世ノ社稷是ニ至テ烏

有トナリ、高尾城焦土トナンヌ、嗚呼哀矣哉、景周、富樫家譜及ヒ官智論等ヲ按スルニ、今年高尾ヲ修ス、政親高尾ニ在テハ全ク利ナキヲ監カミ、竊カニ妻孥ヲ越中ニ送り遣ハシ、鞍嶽ニ築城ノ要害ヲ守リ、能越ノ援ヲ待チ、夜ニ入テ恆ニ出入ヲナス、然ルヲ河合藤左衛門是ヲ知テ、兵子六百ヲ簡ミ、慶覺坊ヲ首魁トシ、鞍嶽ノ搦

手ヨリ急攻ス、城兵守ルニ堪ス、出テ突撃ス、然レ厄政親大終ニ城ヲ乘ル、時ニ政親水卷新介ト馬上ニテ支拂シ、郭内ノ池中ニ墮死ス、因テ富樫ノ宗兵白崎某・高尾若狹・同九郎右衛門・額八郎次郎・槻橋入道・同藏太・早佐神

八郎右衛門・中川監物・同小次郎等戰死ス、本郷駿河守・八屋入道覺妙・宮永八郎・勝見與四郎・福益彌二郎・郡縁・吉田・小河・白崎・近藤・黒川等自殺ストアリ、此説或ハ得ル所アルニ似タリ、世人多クハ高尾・倉嶽ヲ一城ニ

名トス、然ラス、別也、政親居恆ニハ野々市ニ在テ代々ノ通館トス、今年高尾嶽ニノホル者ハ防戦ノ爲也、有澤武貞云、富樫氏代々館村ニ在住メ、事アレハ高尾山城ニコモル也、コノ間一里半許也、此類諸國ニ多シ、信州ノ村上

氏代々坂本ニ居住シ、城ハ葛尾ノ山城也、葛尾ハ堅固ノ地、横吹ノ難所ノ高ミ一里餘坂ヲ上ルト也、此説ニ因トキハ高尾ニ築城明ラカ也、然レ厄景周曾テ陟リ見ルニ、高尾山ニハ今御城山・城谷川等ノ遺名存スルノミニテ、古ノ

城趾タルヘキ地詳ラス、鞍嶽ニハ城門等ノ遺跡依然タリ、誠ニ要害堅固ノ地勢トイヘ厄、狹境嶮峻、其不便ナルヲ劇シ、只加州四郡ヲ目下ニ臨ムコト掌ニ在カ如シ、絶頂ニ大小ノ兩古池アリ、其一ハ深キヲ不測也、土人口碑ニ、是池

中ヘ政親ト水卷新介忠家ト支拂シ、馬ト厄ニ墮死スルユヘ、今モ天爽晴ナレハ鞍形水底ニ隱見スト、景周登山ノ日ハ天雲アリ、故ニ見コトヲ得ストイヘトモ、惟説欺人者ニテ取ニタラス、或云、古ヘ倉嶽ト書シヲ、此時ヨリ自然ト

人々鞍嶽ノ字ニ造ルト云、是ヲ以テ見レハ、此時ノ築城ハ鞍嶽ニテ、高尾ニハアラサルニ似タリ、鞍嶽ハ氣宇村領也、高尾ハ高尾村領也、政親死スルノ際ヨリ、燐火此高尾山間ヨリ出ル、世俗今是ヲ高尾ノ亡主火ト云、政親ノ

亡魂怨結ノ化スル者耶、四百餘年ヲ歴テ、今猶消却セサルヲ哀ムヘシ、又慶覺寺縁起ニハ、高尾城跡ノ邊ニアル御廟谷ト云所、是即チ政親自害ノ地トアリ、又七國志ニハ、此時防戦カナハス、越中ニ退キ、九月九日自害ストアリ、

以上諸説靡襍、正史ナケレハ其眞贋ヲ辨解シカタクシ、又近年印行セル信長記拾遺ニ、以上政親高尾陷城ノ事ヲ、享祿二年五月ニ繫ケ、賊ノ魁將灰原藤大夫・今枝大膳ノ二名ヲ載セ、且政親ノ臣ニ富田九郎左衛門基重等ノ名ヲ顯ス、

其佗無稽ノ説枚擧スヘカラス、是全ク本願門徒ノ妄作ト見ユ、一事トノ引證スヘキコトナキ贋書ノ至也、富樫泰高ハ、政親ノ首ヲ灰燼中ヨリ探リ得テ、

大乘寺ニ送テ葬ス、古記ニ泰高此時政親ヲ哀ム和歌一首ヲ載ス、其歌意甚タ悼タリ、然レ厄景周泰高ノ行狀ヲ蛇足ヲ添ルニ似タレ

ハ、删除ノ載セス、是ヨリ先キ、將軍家ヨリ越前諸將主ヘ、賀州援軍ノ教書下ルトイヘトモ、

賊徒援路ヲ斷ユヘ、越軍首路ヲ疑議スルニ、諸賊既ニ高尾城ヲ急攻スト聞テ、堀江中務丞

景用 越前ノ國主朝倉貞景ノ臣、利仁將軍後胤齋藤ノ末流、富樫トモト同族、 杉若藤左衛門 此子孫九左衛門トテ、瑞龍公ニ仕ヘ二百石ヲ賜 南郷

某 古記關名、ト相與ニ、甲兵若干ヲ帥ヒ、驅馳ノ橋ニ 越ハ江沼郡也、到ル、時ニ賊將安藤九郎・

金森玄英入道群賊ヲ率ヒテ、大聖寺山ヨリ 世俗大正寺・大正持等ニ作ル、竝ニ非ナリ、 却テ之ヲ逆撃スルノミナラ

ス、高尾城モ既ニ陥テ政親自刃スト流聞アレハ、越軍辟易ノ綏ソカントスルヲ、江沼

郡ノ賊衆所々ニ蜂起メ、橋邊ニテ逞戰ス、斯時ヤ賀州ハ舉テ土寇ノ淵藪トナリ賊魁洲崎

入道 慶覺坊、 同十郎左衛門・河合藤左衛門・安吉源左衛門・山本圓正・高橋新左衛門等大坊

主 註上 文、ヘ告テ、國中高田流ノ諸院ヲ毀壞ス、勝願寺等ハ賊ヲ率テ能登ヘ攻入、能州モ

所々本願寺ノ有トナル、又越中勝興寺ハ、今ハ射水郡古國府ニ在リ、其初メ文明四年僧蓮如北國ニ來

長享二年六月九日

一九七

一揆專修寺

派ノ寺ヲ破

壊ス

泰高政親ノ

首ヲ求メテ

大乘寺ニ葬

ル

ヲ構へ説法ス、其比蓮如ノ二男蓮乘ヲ此堂ニ暫置テ住持トス、其後四男蓮誓住職ノ時、寺ヲ同國安養寺村ニ轉ス、其六世顯榮・七世顯幸ノ時亂世ニ遇ヒ、安養寺村ヲ立ハナレ、所々ニ居ヲナス、其後佐々成政ニ乞テ、守山ノ麓今ノ古國府ノ地ヲ得、寺宇ヲ再興ス、越中西流ノ總録・子院今猶四百寺アリ、景周按スルニ、顯榮ハ細川晴元ノ弟也、顯幸ハ朝倉義景ノ弟也、今此ニ勝興寺ト云ハ、住持顯幸ノ時代ナルヘシ、賀州二俣ノ郡、河北

本泉寺 嘉吉元年本願寺巧如ノ三男如乘開基也、且ヲ汲引シ、近郷ノ舊士ヲ趁散シ、礪波半郡ヲノ本寶徳中蓮如三ヶ年居住、其遺跡今猶存ス、

願寺ノ領トス、而ノ賀州ノ山崎山ニ 按スルニ、今云小立野是也、其比ハ田井ノ土民草刈、一寺ヲ造營シ、之ヲ本源寺ト號シ、地勢ヲ固フス、一本ニ若松ノ道場ヲ引移スト云、上文山田光教寺ノ下注ト照見スヘシ、其門徒甚多シ、

土賊是ヲ推尊ノ御山ト稱ス、是ヲ牙城トメ田井ノ堡障ニ 此堡今云寶幢寺舊跡邊ニ在、松田次郎左衛門、源寺ノ家老ト云、加邦録等ニ、其地今奥村河内守第ヨリ、出羽町ヘカケ居城トシ、松山寺邊ニノ郭成瀨内藏助宅邊、三ノ郭搦手ニメ、細長キ繩ニ、今ノ八坂道、其頃ハ馬場也、側ノ堀ハ洗馬ノ爲ニ作ルト云、松田米泉ノ洲崎慶覺坊ト和セス、後ニ洲崎ノ爲ニ謀ラレ、米泉ニテ洲崎酒宴ニ事ヲ託シ松田ヲ害ス、此時松田ノ堡障モ攻屠ラル、松田ニ妻

子アリ、是ヲ松田カ舍人三右衛門携テ越中ニ走り、荒木ト云所ニ隱シ居キ、其子孫荒木六兵衛 右衛門ト云者ニ至テ、高徳公越中發向シ玉ヲトキ、城端城ニテ天正十七年筈仕シ、采地千石ヲ賜フ、即チ今ノ荒木善大夫ノ祖ト云、松田

カ家ニ、聖徳太子ノ古像アリ、之ヲ後ニ石川郡田井村ノ道場ニ安置シ今猶存ス、毎年仲春廿二日ヲ以テ祭ル者即是也、高垣ニ樋口某、高垣ハ今ノ品川主殿宅地邊ト云、樋口ノ名古記ニ見ヘス、石浦ニ石浦主水、石浦ハモト石川郡ノ庄名也、今ノ慈光

門ノ甥也、松田亡フル時、石浦ノ堡障モ放火セルト云、椿原ニ左近將監、古記其姓ヲ闕也、椿原ハ今ノ田井天神社地也、初メ此天満宮石

浦ノ堡障モ放火セルト云、椿原ニ左近將監、古記其姓ヲ闕也、椿原ハ今ノ田井天神社地也、初メ此天満宮石

其後又今ノ地ニ遷宮ト云、蓋シ其頃ハ山頂ニ社アリ、後ニ麓ニ轉、石名塚ニ何某、石名塚ハ今ノ土川除邊也、古記姓名トモ

頃ハ山頂ニ社アリ、後ニ麓ニ轉、石名塚ニ何某、石名塚ハ今ノ土川除邊也、古記姓名トモ

本源寺ヲ衛護ス、又本願寺ヨリ下間筑前ヲ 蓮如ノ代下間丹後ト云ヒ八子ア、下ノ、國務ヲ掌トラ

シム、其佗賊將洲崎慶覺坊ハ泉野ニ在、傳在上文、河合藤左衛門ハ久安ニ在、河合長享元年十一月ヨ

リ久安ニ築城、明年五

本願寺下間
賴善ヲ下シ
テ國務ヲ掌

月マテ居スト、此城跡今ハ耕ノ田、富樫泰高 野々市ニ御館迹ト今云傳ル所アリ、泰高ノ館跡ト云、按スルニ、泰地トナル、泉野・久安並ニ石川郡、高今年マテ御幸塚ニ居シ、政親滅亡ノ後、今年這野々市ノ政親舊館

ト見ユ、守護ノ名ハ有トイヘ、驕賊ノ爲ニ威望ヲ失ナヒ、國務ノ沙汰ニ預カルト能ハス、

〔越登賀三州志〕

故墟考四 倉岳

一作鞍嶽、在林郷内知氣寺邑領、距府治三里八町、地勢峻聳、天然

詳、誠ニ一旦險阻ヲ恃ミ、急害ヲ避ル地ト爲ナラン、其絶頂取高ノ一丘地、十間ニ拾四間、自夫南ニ下テ、拾

ト號ス、表百間餘ニ、延冊五間、山影ヲ倒臨ス、又最高ノ一丘地ヨリ、東ヘ下レハ廿五間ニ拾間ノ所アリ、自

夫阪墜十五間有テ、縱冊五間、横或ハ拾三間、或ハ廿間ノ所アリ、自是又一段下テ、卅六間ニ廿間ノ地有テ、

此所ニ小池アリ、小池ナレハ盛夏ニモ水不涸、富樫政親水卷新介ト馬上ニ搏撃シ、馬ト俱ニ此池底ヘ沈死ヲ郷

談アレハ、孟浪ノ言、不足信、元來至險、騎擊ノ場ニ非ス、又此邊ニ拾四間ニ八間ノ小丘アリ、此南ノ小墜ヨリ

小池ニ通ス、高摩都テ七八段區アリ、東南絶壁、所謂巖城要衝ノ地ナレハ、諸事不便、常居スル、

富樫氏居恆ニハ野々市ニ館シ、土寇起レハ此城ニ保ミ、巖邑ヲ特シテ峻拒スルユヘ、

國俗之ヲ富樫隱居城ト呼ル、然レハ長享二年富樫政親遂ニ釋賊ノ爲ニ這城ニ死シ、城

陷、其事狀ハ詳本記、○下

高尾 在富樫庄高尾岳領山、類聚國史卷第百八十佛道部ニ、承和六年三月庚戌加賀國高尾山寺眞言別院ト載スル

者、思フニ此高尾山中ニ在シ古刹成ヘシ、然レハ高尾ノ山名、其來ルコト既ニ千年ニ垂トス、此高尾ヲ太平記

ニハ作多胡、七國志ニハ作田江、又作高雄、皆此城地也、此故墟今數百年ヲ歴テ、本二三等ノ區別遺狀甄ラカ

ナラサレハ、舊史ニ載スル城地ユヘ、今遺跡ヲ具ニ正ノ記ス、抑此城山ノ通路、山前ハ高尾邑ノ方ヨリ陟ルト

額谷ノ方ヨリ陟ルト二條アリ、背後ハ坪野邑ヘノ山路一條アリ、今ハ皆狹險ノ樵徑、石齒足ヲ齧也、小山ナレ

ハ、城地ノ高サ七十間アリ、之ヲ直立ニ測量スレハ卅三間也、墟中五六尺ノ高低ハアレハ、概ノ平頂ト見テ、

長享二年六月九日

一九九

高尾

倉岳

長享二年六月九日

二〇〇

坤方ヨリ良方マテ、其妻一百餘間、其幅中間ノ廣所ハ二十間、良方ノ狹所ニ至テハ十一間モアリ、其下一二段低ク、八間ニ冊間許ノ平地有テ、夫ヨリ高尾邑へ下ル路ニ通ス、又此城ノ坤首一段高ク、巳ヨリ酉マテ廿四間、巳ヨリ卯マテ十四間、卯ヨリ戌マテ十八間、戌ヨリ酉マテ九間ノ坦地一區アリ、是ヨリ寅方ニ澗池アリ、池邊卑濕、其四面互リ異方ハ十八間、乾方ハ六間、良方ハ七間ノ一區アリ、城背ハ皆斷整綿延タリ、城谷河ノ一流、城背ヨリ墟右へ注出ノ、高尾邑邊ニ至ル、小流ニテモ城水ニハ不便也、凡テ金キ城地ト云可カラス、

足利尾張守高經敗軍、多胡城ニ走入リ、太平記ニ見ユ、這後百五十年ヲ歴テ、長享二年富樫政親此城ヲ修造シ保ム、然レモ同年賊ノ爲ニ焦土トナル、

野々市

野野市

古へ謂布市、景周曾テ讀普家文章、其第一卷ニ昔公祈神到越州詩有テ、其詩中疲曉嘶布水、老僕困綿嶠、一聯見ユ、按ルニ、布水ハ布市河、綿嶠ハ能美郡ノ和田山也、永延中富樫氏七世家國府治ヲ此土ニ奠ヨリ、以布市作野市、辨後續通古名、而即見石川郡三宮古記文和三年、其後誤テ作野野市、是ヨリ戰國不文ノ俗輩臆白ヲ辨セス、其誤ヲ因襲シ來リ至今也、蓋シ野々下ノ野ハ助謂也、相傳富樫氏中古所據ノ遺所ニ、土人其一ヲ呼御館蹟、今既耘ノ化陸田、其一ヲ呼御倉跡、今ハ竹藪也、又政親ノ家幸山川參河守、其子又次郎第迹ハ今云大乘寺開祖徹通墓邊ノ由、

利仁將軍ヨリ七世富樫二郎家國始テ此野市ニ開府有シヨリ、開府ノ辨、詳二十三世ヲ政親マテ、此所ニ五百年餘居館也、平家物語・義經記ニ富樫城・富樫館ト云者、即チ此地也、長享二年政親溼祀後、家謂ニ長享二年笠間兵衛家次賊衆ヲ率テ、野々市ノ馬ニ屯スト云、富樫小

三郎泰高居シ、其養子植泰、其子泰俊相嗣テ居スル處、略○下

〔越登賀三州志〕

韃鑿餘考五 賀越能三州土寇蟲起富樫氏失社稷

今夏五月、文明三年○中 茲ニ富樫小三郎泰高、政親ハ成春ノ子也、身ノ長六尺、力十人ヲ兼ヌ、勇悍拔群ト略 富樫次郎政親ト善ラス、

成春ノ女專修寺ニ嫁ストノ説

云、景周按スルニ、文安四年加賀ノ守護ヲ泰高・成春相爭ヒ、各半國アテ領セシヨリ以來不和ナルナラシ、蓮如ヲ御幸塚ニ迎ヘテ留錫セシメ、且泰高力ノ吉崎道場建立ノ施主ヲモナシ、本願門派ニ左袒ス、政親ハ所縁有ヲ以テ、專修門派ニ左袒ス、一説ニ這事、政親ノ父成春ノ時ニ在リ、成春ノ女ハ高田ノ專修寺ノ妻也、然ルニ本願門黨土賊ヲ勾引シ、不意ニ成春ノ館ヲ圍ム、成春如何トモスルコト能ハス、時ニ同族富樫泰高土賊ニ乞テ、成春ヲノ館ヲ去シム、是ヨリ成春山代江前ニ蟄居ス、或云、越前豐原へ蟄居スト、其後成春ハ山代ニテ卒ス、其子八歳也、是加州守護ノ一人ナレハ、襲封アラシメント、國民是ヲ野々市ノ館へ迎へ、朝倉家ニ因テ將軍へ拜謁ナサシメ、富樫介ニ任ス、是即チ政親也ト云、故ニ本願門徒政親ヲ怨ミ、賀能越ノ門黨へ移牒ノ寇ヲ起ス、

〔附録〕

〔專光寺文書〕

賀○加

〔專光寺御房〕

蓮如

於諸門下、企惡行之由、其聞在之、言語道斷之次第也、所詮向後於如此之致張行之輩者、永可放聖人之御門徒、此趣堅可有成敗者也、謹言、

七月四日

蓮如(花押)

專光寺

〔蓮如兼壽自筆消息〕

○能登光德寺所藏

於諸門下、企惡行之由、其聞在之、言語道斷之次第也、所詮向後於如此之致張行之輩

長享二年六月九日

二〇一

兼壽門徒ノ惡行ヲ誠ム

專光寺

長享二年六月十日

者、永可放聖人之御門徒中、此趣堅可有成敗者也、謹言、

七月四日

蓮如(花押)

光德寺

光德寺門徒中へ

〔蓮如兼壽自筆消息〕

○近江眞念寺所藏

當國中之門徒面々、事外於國中致亂妨候之由申候、言語道斷次第候、早々成敗候て可有停止候、若無承引者、不可爲門徒候、此趣を能々可有披露候、恐々謹言、

十月廿一日

蓮如(花押)

加賀ノ門徒

尙々先その門徒中を能々成敗候へく候、○コノ一行、切張りノ痕アリ、モト本文ノ前ニ在リシヲ、袷襟ノ際切取りテ、此所ニ移シタルモノナラン、木越御房

十日、壬寅是ヨリ先、伏見宮邦高親王、三條西實隆ヲシテ、源氏物語系圖ヲ書寫セシメラル、是日、實隆、之ヲ親王ニ獻ズ、

〔實隆公記〕

二月廿日、乙卯、右大辨宰相來、宗祇法師・玄清法師來、源氏系圖事談

合、大略治定了、留玄清羞晚食、

三月廿五日、己丑、陰、雨時々降、今日月次御連歌也、○中略、正月二十退出之後參伏見殿、

源氏物語系圖申出之、爲中書也、

實隆邦高親王ヨリ源氏物語系圖ヲ拜借ス

肖柏ト相談ス

廿七日、辛卯、雨降、源氏物語系圖直付書入、別人等書加之、遣肖柏了、

四月九日、癸卯、晴、肖柏入來、源氏物語系圖事有相談事、

十二日、丙午、晴、肖柏來、源氏物語系圖事相談之、姉小路・中山等相公來話、移刻、

廿六日、庚申、雨降、肖柏入來、源氏物語系圖事治定落居了、自愛々々、

六月十日、壬寅、晴、○中略源氏物語系圖染筆、令進上竹園伏見了、

○勝仁親王、實隆ヲシテ、源氏物語系圖ヲ書寫セシメラル、コト、便宜左ニ合敘ス、

〔實隆公記〕

七月八日、庚午、御方源氏物語系圖可書進上之由被仰下、料帛

今日被下之、

庚寅、○中略抑源氏物語系圖依親王御方仰此間染筆、今日終其功令進上了、則御

校合無一失、自愛々々、

十一日、癸卯義政、相國寺鹿苑院ニ鈴ヲ徵ス、

〔蔭涼軒日錄〕

六月十一日、天快晴、○中略四鼓前謁東府、○中略又鑄師鑄鈴、調阿以琳公

供台覽、問愚曰、如何、愚云、尤可也、台慮不十分、當院鈴爲本進置之、此鈴相喫台慮

之由、琳公見謂調阿、々々告愚、々云、若此鈴被召置者、可爲面目、相公曰、爲寺家無

勝仁親王實隆ヲシテ源氏物語系圖ヲ書寫セシメラル
御校合アラセラル

長享二年六月十一日

二〇三

二〇二

長享二年六月十一日

二〇四

心之事乎、愚云、吾院鈴也不苦、若見召置、可爲面目、然者留之以新鈴可爲替之由、被命調阿也、當院鈴留御前、

八月廿日、不參、天快晴、○中自調阿方新鑄之鈴一口贈之、蓋當院之鈴適台慮被召置、爲其替賜新鈴、乃請取之由、返章遣之、

○義政、東福寺・崇壽院等ノ洒水器及ビ茶湯器ヲ徴シテ之ヲ見ルコト、及ビ懺法鼓棧ヲ作ラシムルコト、便宜左ニ合敘ス、

〔蔭涼軒日録〕

正月十五日、天降雪、如飛花落絮、○中午時謁東府、○中謁御末、以堀

河殿太阿所打之洒水器・同臺一ヶ、茶湯器・同臺一ヶ、皆鍮錫也、供台覽曰、與以前昏形相同、雖然小也、改昏形、以供台覽、此昏形寸方可然乎、但可爲上意、相公曰、茶湯器托子無葉、洒水器之托子有葉如何、搥而如此之物乎、愚白、不相定者也、然上者、只可爲上意、又曰、茶湯器之絲尻聊爾也、内裏ニ進上之金盃有之、其絲尻之樣仁有之可也、金乎鍮乎之差異耳、何器有勝劣乎、新昏形之寸方可然、自調阿方、太阿仁可命之由、可相傳云々、乃往調阿宅傳台命、調阿歡樂之故、周阿仁傳台命、太阿亦同途、又曰、洒水器并茶湯器之古物、相尋可供台覽之命有之、不可論大小、以其形可被爲本之用

新鑄ノ鈴ヲ
鹿苑院ニ與
フ

禁裏ヘ獻上
ノ金盃

洒水器及ビ
茶湯器ノ古
物ヲ尋ネテ
其形ヲ摸セ
シメントス

也云々、

廿日、天晴、○中晚來謁東府、○中灑水器・茶湯器供台覽、東福茶湯器以之被爲灑水器之本、崇壽灑水器以之被爲茶湯器之本、此分具可命調阿、件々堀川殿御白次云々、

廿四日、天快晴、○中次東福灑水器一ヶ・茶湯器一ヶ返之、茶湯器一ヶ者留以爲御本、

廿七日、不參、天快晴、○中東福寺茶湯器一・崇壽洒水器一・北等持茶湯器一、以上三ヶ遣調阿宅、東福茶湯器一被返之、相公曰、初午懺法涅槃會等可欠事、先可返之、十五

日以後可進上之由、可命之由被仰出由、自調阿方傳之、

廿八日、不參、天晴、○中建仁洒水器三ヶ・托子一ヶ・東福茶湯器一ヶ以契庵主返之、具傳台命、

十一月廿九日、不參、天晴、○中懺法鼓棧七ヶ遣調阿宅、可供台覽云々、

十二月二日、不參、天半陰、○中自東府見返鼓棧七ヶ、又出鼓一ヶ、棧事愚可相計之命有之、丹公往奉之、

三日、天快晴、○中鼓棧召權六命之、

八日、不參、天晴、○中晚來内藤七郎來、有宴、鼓之撥一ヶ新造之、遣調阿宅、可供台

集證懺法鼓
棧ヲ義政ニ
進ム

長享二年六月十一日

二〇五

覽、若相叶台慮者、一双可造之云々、調阿云、已前被仰出趣者、先日所々之撥之内、可相似合者擇之可被爲本云々、供台覽事如何、但可供台覽乎、一左右早々可承云々、

十一日、不參、天晴、略今午以久上司獻鼓之棧二ヶ於東府、於殿中調阿方渡之、乃供台覽、則後所造之棧小也、叶台慮、可令一双造之命有之、又遣二纏於調阿、棧事乃命權六、

十三日、不參、天陰、略東府懺法鼓之棧一双權六造之持來、乃以能椿副一行遣調阿方、返答云、以琳公被仰出、琳公時出京、待彼歸府可供台覽云々、

義政慶雲院ノ鼓棧良カ
ラザルニ依
リ新棧ヲ寄
進ス

廿七日、天晴、積雪盈尺、略懺法鼓棧一双寄進慶雲院、以前諸院之鼓棧自東府被召寄之、慶雲院棧太不好也、故贈之也、當院新棧有之、

晦日、略東府懺法鼓棧一双黒漆塗之、遣調阿方、可供台覽之由命之、

十二日、甲辰嘉樂門院六七日御忌法會ヲ般舟三昧院ニ修セラル、

〔御湯殿上日記〕

○京都御所東山御文庫
記録甲二百三十九所收

六月八日、てんほり三條より御きやう、ひふつ

延臣等寫經
ヲ獻ズ
勝仁親王御
寫經ヲ獻ゼ
ラル

もそひてまいる、よし田の二位・かねむねも御きやうまいらする、みなせしう御とふらひ申さるゝ、上せう院も申さるゝ、宮の御かたより、御きやうあそひしてまいらせら

宮女等御燒
香ニ參ル

るゝ、御むまそふ、

九日、略けさ御きやうとも御寺へいたさるゝ、

十日、ふしみの御寺へ上らふ・新すけ殿・御ちの人御せうかうに御まいり、そくしやうあんによりれん花のはな・きくなとらゝ、御寺へまいらせらるゝ、ゆきかすのあそん御せうかうにまいるよし申、からすまろ冬光御きやう、ひふつそひてらゝ、中内侍殿御うりまい

らせらるゝ、たかつかさの（改平）前くわんはくより御きやうまいる、くわんはくよりもまいる、十二日、れんせい（高徳）の大納言より御きやう、みかきつけのしろきうすやうにつゝみてまいる、藤中納言入たうあみたきやう、ひふつの代百疋そひてまいる、くとくゐんより大し

の御ひつのあいせんしん上あり、けさとくたいはほんこのほと一かう三らいにあそひして、ふしみの御寺へ、かない殿御つかゐにて御くたしあり、六七日にて、御くやう二そん（善空）みん申さるゝ、ふしみ殿・御むろ御せうかうに御くたりあり、ゑんまん院（上尊）の宮よりた

いはほん、御かうてんそひてまいる、大の御かとのちやく御れうによりたいはほんまいる、

〔實隆公記〕

六月十一日、癸卯、天晴、及晩夕立雨降、則屬晴、早旦參伏見般若院、爲

三條西實隆
般舟三昧院
ニ詣ス

一行三禮ノ
宸筆提婆ノ
院ニ般舟三昧
御供養ニ善
空參仕ス
邦高親王御
永親王御燒
香アラセラ

安禪寺觀心
尼モ御參リ
アリ
論義アリ

長享二年六月十三日

二〇八

燒香也、布衣、於彼、寺中著用之、安禪寺宮今日令參給、齋食奉請伴、同參御廟了、寫經助筆、日中讀經結法花第四一卷也、緣、讀誦了有論義、講師壽滿、讀師宗純也、常没凡夫依彌陀願力出離否事也、長老證義等殊勝、移數刻、及晚陰歸京、以量朝臣同道者也、歸路參詣六角堂、眞法寺是也、今朝詣因幡堂平等寺了、

十三日、乙大原法華堂ノ後花園天皇御分骨ヲ分チ、伏見大光明寺ニ納メラレントシ、三條西實隆ニ勅問アラセラル、

〔實隆公記〕

六月十三日、乙巳、天晴、今日當番也、午後參内、抑今夜勅定云、大原

仙骨舊院御骨也

分散之、可被奉納伏見御廟、其間事殿上人一人可參向大原之條可然哉、伏見

事、殿上人一人・公卿一人可參向之分也、如何者、雖非改葬之儀、一人參仕尤可然歟之由言上了、

十四日、丙午、晴、師富朝臣來、彼仙骨事勅問之旨、按察卿傳之、先規難引勘之間、其旨則言上了由相語者也、

七月十日、壬申、雨降、抑後花園院仙骨、伏見大光明寺ニ被納置之分散之内、又分之可被納般舟院御廟下云々、兼日公卿一人・殿上人一人可供奉之由沙汰、教國卿被催之、

大光明寺ヨ
リ分チ般舟
三昧院ニ納
メサセラル

御分骨ノ儀
ハ一向僧侶
メノ沙汰ト
定ム

按察奉書也、雖然依所勞申不可參之由了、新任未拜賀之仁無骨之事也、但今日不能參仕、一向可爲黑衣沙汰之由治定云々、可然事也、其子細猶可尋記之、

○後花園天皇崩御ノコト、文明二年十二月二十七日ノ條ニ、御分骨ヲ大原法華堂ニ藏ムルコト、同三年二月五日ノ條ニ見ユ、

義尙、蔭涼軒集證泉龜ニ中庸ヲ徵ス、

〔蔭涼軒日錄〕

六月十三日、不參、天快晴、齋前自結城越後守方直見爲使傳一行

云、相公御尋中庸、々々本多々相尋可進上、御一見之後乃可被返遣、只今在御前本皆寫本手迹不可也、故被命當軒、乃返章遣之、唐本三本此内新註一本進上之、一本丹公、一本昌、新注者維俊本也、對面直見渡之、

○義尙、集證ニ玉篇・史記・漢書等ヲ徵スルコト、便宜左ニ合敘ス、

〔蔭涼軒日錄〕

八月十日、不參、天快晴、自二階堂山城守方折昏來云、玉篇御用

候、可被進候、乃以玉篇四册、相副返章使者渡之、小者也、廿一日、天快晴、今日自二階堂山城守以使者云、早々可赴鉤之御陣、可見持史記・漢書、蓋相公之命也、返答云、自去年不例不得其減、殊□世上之暑傷嬰之、以故不能拜

義尙所持ノ
本ハ皆寫本
ニシテ手跡
不可ナリ
集證唐本三
本ヲ進ム
新註一本アリ

義尙集證ニ
玉篇ヲ徵ス

史記

漢書

長享二年六月十三日

二〇九

長享二年六月十五日

二一〇

義尚玉篇ヲ返却ス

謁云々、愚亦其趣可得意云々、廿四日、不參、天陰不雨、○中自鉤之御所玉篇四册返賜、二階堂城州折番有之、乃返章遣之、

再ビ玉篇ヲ徴ス

九月廿六日、不參、天快晴、○中齋前自二階堂中務權大輔方折番到來、以前取進之玉篇可有御覽由被仰出、可進上云々、乃玉篇四册相副返章渡來使、○義尚、集證ニ玉篇ヲ徴スルコト、文明十八年十一月十八日ノ見ユ、

條ニ

十五日、丁未、月食、

〔宣秀御教書案〕

月蝕任先例、可令申沙汰給、仍執達如件、

六月七日

左少辨宣秀

(長享二年)
(五社當仲)
藏人中務丞殿

〔御湯殿上日記〕

○京都御所東山御文庫 記録甲二百三十九所收

六月九日、しよくの御なて物すけなう申いたす、(富小巻)

新内いたさるゝ、

十六日、○中月しよくの御なて物返り、すけなうにはかにくわんらくにて、(五社當仲) ぎよくら

曇リテ正現セズ

人しこう、よへいくもりて、しよくのやうみえす、

〔親長卿記〕

六月十五日、雨下、雖爲月蝕不正現、

〔實隆公記〕

六月十五日、丁未、晴、○中今夜月蝕也、天陰之間其體不分明、

〔本朝統曆〕

十一 戊申 二年己未 六大朔癸巳五未、十五望六亥、月蝕二分弱、亥五、亥七、

上乘院、御撫物ニ御祈禱卷數ヲ添ヘテ返進ス、

〔御湯殿上日記〕

○京都御所東山御文庫 記録甲二百三十九所收

六月十五日、○中しもかわら殿より一日の御な

て物、御くわんしゆそひて返り、

○土御門泰清及ビ安祥寺、御撫物ヲ申出スコト、便宜左ニ合敘ス、

〔御湯殿上日記〕

○京都御所東山御文庫 記録甲二十九所收

九月十二日、(七御門) やすきよ御なて物申いたす、

十二月廿七日、○中 あんしやう寺より御なて物申いたさるゝ、御ちの人とりつき、

十七日、己酉、宗祇、越後ニ下り、是日、上杉定昌ノ墓ニ詣ツ、

〔宗祇法師集〕

雜

上杉民部大輔定昌逝去のよし聞て、こしちのはてまで下り、六月十

七日かの墓所に詣て侍しに、いつしか道の草しけくなりしを分暮してかへるさに、

君忍ふ草葉うへそへ歸るさの苔の下にも露けくやみん

長享二年六月十七日

二一一

和歌ヲ詠ズ

土御門泰清御撫物ヲ申出ス安祥寺

長享二年六月十七日

一一二

程なく文月十日比かへり侍し道に、観音のおひします堂にとまりて、かの名號を句のかしらにきて、歌よみ侍し中に、

瀬にかはる世をはや河のみなれ棹さしてむかへよ岸遠くとも
さまくにかたちを分る誓あらうつゝにみする佛もかな

下向ニ當リ
實隆ニ扇歌
ヲ所望ス

〔實隆公記〕五月八日、辛未、天顔快晴、宗祇法師明日可下向越後國云々、扇歌三本、依所望今日書遣之、

〔實隆公記長享二年春夏紙背文書〕 ○五月五日裏

昨夕一番進上申候、相違候いんする所旁々被下候者可畏入候、又此扇三本哥其望候、御筆を御申候て可被下奉憑候、恐々謹言、

五月六日

宗祇(花押)

上洛ス

〔實隆公記〕十月^{○中}日、壬辰、天晴、^{○中}及晚宗祇法師來、一昨日自越前上洛云々、就古今事聊有示旨等、

○定昌、上野白井ニ自殺スルコト、三月二十四日ノ條ニ見ユ、

般舟三昧院
ノ僧ニ扇ヲ
賜フ
廷臣等寫經
ヲ獻ス

十八日、^{庚戌}嘉樂門院盡七日御忌、法會ヲ般舟三昧院ニ修セラル、

〔御湯殿上日記〕

○京都御所東山御文庫
記録甲二百三十九所收

六月十五日、

○^中ふしみの御寺のそなたち、ち

やうらうまで、御あふき一ほんつゝつかはさるゝ、^{○中}四條前中納言くにより御きやうの代とて二百疋らゝ、

十六日、けふの御いわるの物にまんちうをまいる、日野頭^(政孝)辨たいはほんひふつ三そひてまいる、

十七日、あか月より大雨ふる、南との一せう院より、としくの御うり二かまいる、^{○中}ふしみの御寺へ一かつかはさるゝ、^{○中}庭田^(雅行)あすの御きやうくやうのちやくさにて、け

ふよりまいるよし申さるゝ、
十八日、^(教徳)めうほう院よりほつけきやうまいる、四宮の御かたよりもたいわほんまいる、
二條大かうよりも大はほんまいる、^(實氏主)はくの三位御きやうにひふつ一そひてまいる、^(百川忠)みん

部卿^(高)もたせていそきまいる、^(資教)からすまろのしゝう御きやうらゝ、おそなわりて、すくに
まいらするへきよしおほせらるゝ、御きやうくやうの御たうしほうりん院、^(公卿)たいみやう

御經供養ノ
導師法輪院
公範

第四皇子提
婆品ヲ獻セ
ラル

長享二年六月十八日

一一三

著座ノ公卿

曼茶羅供ヲ行ハル

東坊城和長ニ御願文ヲ草シメテ御經ヲ賜フ大慈光院宮ニ保安寺宮ニ賜フ

長享二年六月十八日

二二四

なともそのてしと、南(七)とう院なり、たうとうしゆきかすのあそん、ちやくさ日野一位・庭田大納言・はむろ大納言(伊)なり、御ちさうの御やおなしくあり、御ふせへちにきぬをつゝみていたさるゝ、まんだらくおこなはるゝ、御き中の程、なにのいらむもなく、するくゝとめてたし、ふ行、しさうよりさむしやうもまいる、おとこ兩人も下までしこ(中)う、(奉應)けさしやうれん院殿より御きやうにひふつ三そひてまいる、これも御寺へつかはさるゝ、このほかの御きやう、はうくゝより御寺へすくにまいるよしきこしめす、御かたくゝはしるさす、御寺よりのこる御きやうほつけきやうを、(東坊城和長)かんしゝうに御くわんもんかきまいらするにつきてたふ、(大慈光院)おかとのへあみたきやう、ほうあん寺とのへ大はほんまいらせらるゝ、

〔實隆公記〕

六月十七日、己酉、雨降、入夜殊如降車軸、自源亞相有消息、直衣借用、明日城南御經供養參仕之料云々、則借遣之了、

十八日、庚戌、天陰、今日女院御正日也、五旬御作善之儀結願、黑衣衆行曼陀羅供云々、同於般舟三昧院有御經供養、御導師公範僧正、題名僧二口、尊實・運伊等云々、著座公卿日野一位・帥・源大納言等、殿上人以量朝臣參入云々、院司辨俊名朝臣也、願文和長

清水谷實久御願文ヲ清書ス御持齋

草進、帥卿加署歟、清書(清水谷實久)一條前大納言云々、委旨可尋記、依當番參内、御所中無殊事、公方御持齋也、

〔實隆公記長享二年秋十月紙背文書〕

○七月廿七日至廿九日裏

久不待拜席候、慮外之懈怠候、誠以死罪候、先々近日病事雖不珍恐怖候、天下重事如何、思召給候哉、但御息災之由承及候、珍重候、和長ハ立病とやらん申候様に候し、次先度女院盡七日御諷誦文可有電覽之由、蒙仰候様存候間進入候、無一句之佳章候間、最憚存候、卷堅古内々草候間、他見命之儀難默候上、又馳遲筆候事難儀候間、不顧狼籍則此者可返給候、旁近日一日可參謝候、次又先日送給候承候御様則於今露見候て、はやかれゝに成行ハかりこ、人の見えさせ候、就御内縁可然様々教訓申され候ハ、日比可爲芳恩候、比興々々、和長謹言、

七月廿二日

和長

○安禪寺觀心尼、嘉樂門院中陰ノ法會ヲ修セラル、コト、便宜左ニ合敘ス、

〔御湯殿上日記〕

○京都御所東山御文庫 記録甲二百三十九所收

五月十四日、(中)御ひかすあんせん寺殿にてあ

長享二年六月十八日

二二五

東坊城和長實隆ノ誦文ニ依リ誦誦文ヲ進ム

安禪寺觀心尼嘉樂門院

長享二年六月十八日

二二六

中陰ノ法會
ヲ修セラレ
御結願
齋會ニ召サ
レシ人々

るへきにつきて、ふつたん寺御かりあるへきにとて、御佛事の物五百疋つかはさるゝ、
〔實隆公記〕 六月八日、庚子、天晴、早朝參安禪寺宮、今日女院御中陰結願也、大德

寺春甫(承應)和尚被招請之、齋食可賜之由、兼日示給之間參入、按察・二樂軒・予・姉小路・
山科(言國)・右大辨宰相(通)・江南院(甘藷寺元長)・富就朝臣(和氣)・俊通等祇候、午後退出了、

義尙、三十首續歌ヲ張行ス、

〔常德院集〕 六月十八日、卅首續歌侍しに、彌勒

今そしるたかのゝ山にしむる庵はあけむうきよの夢のやとりと

法花

一えたの花に(和)に心のひらかすは露のなさけもしらすそあらまし

○コノ後、義尙、和歌ヲ詠ズルコト、便宜左ニ合敘ス、

〔常德院集〕 十月三日、夜雨ふりてつれく(長享二年)なりしか(原書)歌よみ侍しに、初冬時雨

きのふけふ神有月の空かけて雲の八重かき時雨きにけり

殘雁

引すてしひたのかけ繩なかきよのかり田の霜に落るかり金

義尙和歌
彌勒

法花

コノ後和歌
ヲ詠ズ
十月三日
初冬時雨

殘雁

山家友

十一月十四
日
窓前雪

古寺雪

山家友

此里は稍のさるにはの鹿それならてたゝともなはゝこそ

十一月十四日、歌よみ侍しに、窓前雪

灯を花の光にさきたてゝまとの白雪春いそくなり

古寺雪

しら雪のふり分かみのつゝあつにあり原寺の跡をしそ思

○飛鳥井雅親、百首續歌ヲ張行スルコト及ビ姉小路基綱第二十首續歌ノコト、便宜

左ニ合敘ス、

〔實隆公記〕 七月五日、丁卯、霽、小雨濺、但不及濕地屬晴、(中)自飛鳥井大納言入

道許、百首續歌題十四首來八日(詠)遣之由有使者、

〔基綱卿詠〕 (宮内廳書 陵部所藏) 若葉

雪氷きゆる澤邊の水かくれにあらはて清きねせりつむ也

紫藤

あかすゝる心千尋の藤波に花のうきせの色そあせゆく

早苗

長享二年六月十八日

二二七

飛鳥井雅親
百首續歌ヲ
張行ス

姉小路基綱
和歌

長享二年六月十八日

二二八

長享二七八續百首
みなとたやうまのはまもをかるあまも同し縁のさなへ取らし

氷室

長享二七八續百首
年さむき常盤のかけの松かさき夏のひむろもりや初けむ

野萩

長享二七八續百首
眞萩原鹿のねさむく露ちりて色にしくるゝのへの秋かせ

叢虫

長享二七八續百首
こぬ人をねになく虫にかこたせてすむか浅ちか宿の露けさ

井水

長享二七八續百首
底ふかき水の煙は長閑にてゐつゝにすかるたるひをそとる

埋火

長享二七八續百首
さゆるよにおとろかさされて埋火をわれもいく度かきおこすらん

見戀

長享二七八續百首
ことかはし手にとる程もなき中のかつゑるにしもそふ思ひ哉

稀戀

長享二七八續百首
そのまゝにさてやかれぬとおもふ人のとたえしうさいとふにまきれぬ

離別

基綱第二十
首續歌

長享二七八續百首
とゝまらむまのうき草よあかたまにさそふ水たになき別路の

懷舊

長享二七八續百首
何かせむ老をとかすゝ忍ふよにたとへはかへるむかしありとも

〔實隆公記〕

十一月十三日、壬申、天晴、今朝基綱卿宅大納言入道招請、可來之由再三示送、尤雖可罷向、咳氣無治術之間、不能其儀、遺恨無極、廿首續歌有之云々、

是ヨリ先、相模守護上杉定正、同顯定ト相模實蔭原ニ戰フ、是日、又、武藏須賀谷ニ戰フ、

〔梅花無盡藏〕

丁未武藏所作

長享^(元年)丁未小春二十又二日、扣品河之岐軒、途中之濱而見六七小舟搬品河之土、蓋爲

塗江戸之城壁也、騷屑之餘殃及舟楫、感嘆無措、作是詩、

潮氣吞濱萬頃連、觸蠻無地不紛然、重城日々勤塗壁、馬上吟看搬土船、

戊申上 武藏所作

正月旦試筆 關左是時兩上杉之兵横行相武之間、八州太半逆波、未決其雌雄、余尙寓武陵無恙而已、

誕戊申重值戊申、殘生六十一閑人、曉鶯未度風塵積、夢裡尋花濃尾春、

文公從余學、前後五六載、相武上之三州畫角紛然、草木悉帶兵氣之腥、旅寓之者太

長享二年六月十八日

二二九

品河ノ土ヲ
搬ビテ江戸
ノ城壁ヲ塗
ル

兩上杉ノ兵
横行ス

旅寓ノ者太
半難ヲ避ク

長享二年六月十八日

一一〇

半東趨西奔、故文公亦捨余鼓歸棹、吁其學爲六鷁乎、

檠花雖瘦久分紅、一別無聊捨是翁、睫不應望寧記舊、飛鴻千里武陵東、

(八月) 十七日、入須賀谷之北平澤山、問太田源六資康之軍營於明王堂畔、二三十騎突出

迎余、今亦深泥之中解鞍、各拜其面、賀資康無恙、余已慙寓去、

明王堂畔問君軍、雨後深泥似度雲、馬足未臨草吹血、細看要作戰場文、六月十八日、須賀谷有兩上杉戰、死者七百餘人

百餘員、馬亦數百疋、○集九、武藏・上野ヲ巡歴シテ、越後ニ赴クコト、十月十三日ノ條ニ見ユ、

社頭月 九月廿五、太田源六於平澤寺鎮守白山之廟詩歌會、與敵壘相對講風雅、吁西俗無此様、

一戰乘勝勢尙加、白山古廟澤南涯、皆知次第有神助、九月如春月自花、

(上杉) 管領顯定就夜遊之座、出白扇需贊、卽席援筆云、

尋常日月々猶暗、眞箇比梅木不香、一柄威風八州定、此中福聚海無量、

〔梅花無盡藏〕四 天府老人值香月翁月甫桂公外記忌齋之辰、在武州須賀谷平澤之軍

旅、營辦佛事、作小偈、余亦久共外記、翱翔于遊戲三昧之場、外記兵死之後、檀度

太田源六資康如失左右乎、漫攀老人之韻云、

熟憶花時共弄紅、無端香月舊房中、娑婆一別日今百、詩代發文傳語風、道灌曾栽梅花數百株、其齋號香月、桂外記寓

集九太田資康ノ軍營ヲ訪フ

兩軍ノ死者七百餘人

資康陣中ニ詩歌會ヲ催ス

顯定集九ニ白扇ニ贊ヲ需ム

相模實時原ノ戰

此在江戸城、文明庚申六月十八日、外記在資康馬前討死、

〔上杉定正與會我氏書〕

(長享二年)

一去年二月五日、相州實時原軍、敵過者當日不及一戰、各地利取籠候間、七澤引出申、

河越納馬外不可有之之處、敵之勢數おも不知、軍延候者德分可出來事不及按量一戰、

然間太以失利、又七澤之城衆、定正馬廻之軍お不見合、不可急所急、御凶事出來故、

勞而無功様成行候、畢竟七澤御刷無曲候也、雖然旗本理運之間、無相違打歸事、不

思議之至此事候、千餘軍張陣之處、纔二百餘騎召連、數百餘里一日一夜打越、及一戰

得大利事候、於向後不可有比類候歟、但二度不可學行也、以小擊大大事也、

一須賀谷原之合戰者、朝良馬廻地之遠近不見知、殊後者下前者高遠懸而、士卒爲飲食

不足而勞故、敵之楯際少令遅々候之處、長尾修理亮・同新五郎彼兩手依有功者、圓石

お深谷に押落様懸、則朝良馬廻失利、敵も爲宗勇兵等有數多事、昨日今日迄合屠淵

底故之間、於勝治陣所、六月七日終夜行之様躰申合候之處、爲一事有不審事無之候、

然間如愚案者、可失利事無疑候、被嗜候共、明日始而之戰被合候之間、大切候、況是

程無嗜候而者、縱孫吳再誕お指副候共、不可叶之由、令覺悟候處、如案無曲候全失利

長享二年六月十八日

一一一

顯定ノ軍勢
シテ功ナシ

定正ノ軍五
分ノ一利ヲ
失フ

長享二年六月十八日

二二三

所、朝良越度歟非思軍過而も、前々過無後悔事侘候、
一敵之様躰者、顯定馬廻能敷戰而失利、勞而無功動也、寄兵之不知備、士卒不隨刷進
過、未戰半成、依亂行列、彼御旗本無正躰様候之間、高地へ馬お打上、殊外輒見成、
指懸候之間、成大利、然而長尾左衛門入道藤田之手撃勝、其手不亂行列、定正仁爲合
力馳來刷專一候也、加様動お社、向後各可嗜道之第一候、
一須賀谷原之軍之事も、御方五分之一失利、然處旗本與左衛門入道此兩手踏師場故、勝
利之譽於八州無其隱歟、

○中略、全文ハ延徳元
年三月二日ノ條ニ收ム、

延徳元年三月二日

修理大夫

定正

曾我豊後守殿

○定正、顯定ト關東ニ戰フコト、元年閏十一月十一日及び本年八月十一日ノ條ニ、
武藏高見原ニ戰フコト、十一月十五日ノ條ニ見ユ、

〔參考〕

〔永享記〕 山内扇谷不和之事

資康甲斐ニ
軍勢ヲ催ス
關東ノ大小
名顯定ニ志
ヲ寄ス

定正足利政
氏ニ助力ヲ
請フ

政氏定正ニ
加勢ス

顯定ノ軍一
千餘騎定正

翌年改元有て長享元年丁未に移る、其比山内顯定・憲房有談合、扇谷修理權大夫定政を
可有退治と聞えける故、道灌か子息太田源六郎甲州へ忍出て、山内殿御下知に隨ひ、軍
勢を催しける、關東八州の大名小名、道灌有し程こそ扇谷殿へ志を寄んに、いつしか扇
谷の柱石を摧ぬ、因何扇谷殿へ可參とて、みな山内殿へ馳參る、定政・朝良ハ、糟谷有
なから、河越に曾我を籠、小田原に大森式部少輔を置、僅に三百騎許にて、八箇國の
大軍を覆さんと、少も不騒氣色なり、定政使者を古河の公方へ參らせ、今度太田入道當
家へ無貳忠功を積、度々の勞勳不可勝計、然とも山内へ對し、企逆意候間、加誅罰候得
者、○定正、太田道灌ヲ殺スコト、文、無程自山内當方退治之企、抑依何事忘一家之好、可討定
政支度難得心、東八ヶ國滅亡の基なり、縦自山内雖有退治當方之企、於御所者、任正
理、當方へ被成御下知、於御旗本可定安否由、盡言被申けれり、古河公方政氏有御納得
而、定政へ爲御加勢、及御動座しかり、上杉譜代之老臣長尾左衛門尉景春入道伊玄、定
政へ馳著ける、是を初として、左右良臣何も勝たる義士有けれり、縦小勢の味かたにて
も、敵何萬騎ありとも不足恐と、案のなかに推量して、氣色かはらすおはしける、長享
二年 戊申 二月五日、山内の軍勢を引具して、顯定・憲房兩大將にて一千餘騎、相州實時

長享二年六月十八日

二二三

ハ二百騎ヲ
率ユ

長享二年六月十八日

二二四

原に出陣す、依之定政僅邊兵二百騎相具して、長途を一日一夜に打越て、填然として少も不擬議、不憚敵を勇銳追かゝりて、関を三度作て、颯と亂て追つ捲つ、半時計戦て、兩陣互に地をかへ、南北に分て、其跡を顧れり、原野染血山林易緑、暫休て、又亂合て縦横無碍戦しか、山内大勢扇谷の小勢に打負て、四方に亂て落行は、定政も以小勝大、喜悅の眉を開つ、凱歌を唱て還りける、

高見原合戦之事

其後所々の糺合止時なく、不分晝夜戦けり、就中長享二年戊申六月八日、山内殿上杉民部大輔顯定・同兵庫頭憲房須賀原へ出陣す、坂東八ヶ國の勢兵、我もくくと馳集て如雲霞、甲冑の光ハ輝わたりて、明残る夜の星の如くして、烏雲の陣をぞ堅めける、扇谷殿上杉修理大夫定政・子息五郎朝良、古河の公方の御動座を申し成し、打立御旗、長尾景春入道參りしか、小勢なれとも、家の安否、身の浮沈、唯此一軍に可定と、各勇進て、敵東西に有とも不思議色也、然とも定政弟ならひに子息五郎朝良若輩にて、今日初の戦なれり、眞先かけ長尾新五郎・同修理亮に掛合、散々に追立られて、顯定・憲房是に横合に掛て、散々に追立て、諸軍機を得て、拔連て掛る所に、定政高處に馬を打揚、追返せと下知し

顯定ノ軍實
蒔原ニ敗ル

定正ノ子朝
良顯定ノ軍
ニ追立テラ

顯定ノ軍復
敗レテ退ク

て懸出し給ふ、左右の軍兵、大將の前に馳抜々々、一度に破亂離と切てかゝる、喚叫に戦ふこゑ、さしも廣き武藏野に、餘許を聞へける、かゝる處に、長尾伊玄入道・藤田〔三郎カ〕□□□□と掛合、追散して其軍勢を其儘横に立直し、山内殿の旗本へ突て懸る、顯定・憲房兩方の敵に追付られて、終に打負引退く、○下略、相州兵亂記異事ナシ、

〔鎌倉管領九代記〕

五成氏 兩上杉相州菅谷原對陣付同國眞卷原軍

去ほとに、江戸・川越の兩城に、軍兵數多入置たりしも、定正すくに太田道灌を誅戮し給ふと聞て、頼もしからぬ有様かな、さしも忠功智謀の名臣を、科なくしてころさるゝ事、魔魅の掌握に落いりて、運命のかたふくしるし成へし、拙なき君の手に屬して、非道の死をいたさんよりいとて、みなとくく城を出て山内にそ屬しける、定正の嫡子朝良か執事會我兵庫頭をは、河越の城主とし、子息豊後守をハ、江戸の城にそ居られける、道灌か家來齋藤加賀守ハ、軍法の故實ありて、武道の正理をしるものなりとて、定正直にめし出して、團を預けて軍奉行となし給ふ、とかくして月日の重なれとも、山内よりは絶て二たひ音つれもなく、長尾を誅せらるへき沙汰も聞えず、修理太輔定正たのかられたりと思ひて、大に鬱憤をさしはさみ、いよく兩上杉確執の色をたて、軍兵をまね

長享二年六月十八日

二二五

實時原及比
須賀谷ノ戰
ハ延徳元年
トノ説

定正ノ軍討
取ル首七十
餘

長享二年六月十八日

二二六

き鏃をみかきければ、或ハ定正の智慮のみしかきをみかきりて、山の内に屬するも有、あるひハ顯定の所行なさけなしとて、扇谷に屬するもあり、兩家立別れ、敵味方又をあらそふ、〔長享元年〕同年十一月三日、兩上杉の大將相州菅谷原に對陣す、長享二年の春、武州松山に出張し、只小責合のかりにて、兩陣相引に退そき歸る、延徳元年二月五日、山内上杉顯定、子息憲房兩將として、一千餘騎を率して、相州の眞卷原に出張す、扇谷上杉定正二百よ騎にてはせ向ひる、軍の勢の多少によらず、たゞ謀の得否にありといふ事、後漢の光武の侮とりし所、敵に味方を見合すれ、中へきにあらすといへとも、定正すこしも機をのまれます、些とも見つくるふ所もなく、相かゝりにむすと攻て、一矢射ちかふるほとこそ有けれ、みな弓矢を弛すて、打物に成て、眞黒にそ懸たりける、顯定の軍兵ともいかゝりしたりけん、心をくれしてすゝむへく見えてすゝます、定正の兵共是に機を得て、曳や聲をいたし、手痛く切まくりしか、顯定の一千よ騎堪すしてつゐにくつれて敗北す、定正もさすかに小勢なりけれ、追すて、引返し、打取所の首七十餘を切懸て、扇か谷にそ歸られける、

長尾景春歸參扇谷殿付菅谷原合戰

顯定父子ハ
二千餘騎定
正ハ七百餘
騎ヲ率ユ

政氏五百餘
騎ヲ率キテ
定正ニ加勢
ス

長尾景春政
氏ノ論ニ依
り定正ニ歸
參ス

同六月十八日顯定・憲房父子、二千餘騎を率して、相州の菅谷原に出張せられしか、關東の諸勢おほく屬して雲霞のとし、定正此よし聞給ひ、軍兵七百よ騎にて、子息五郎朝良と諸友に、軍を備て馳向ひる、古河の御所公方政氏は、修理太輔定正に御心を合せ、五百よ騎にて御出馬あり、日來長尾四郎右衛門尉景春入道伊玄ハ、公方政氏公へめされて、さま／＼仰せふくめられ、つよく諫を加へ給ふ、景春入道理に屈して申入けるハ、山内殿に對し奉りて、一箇の恨を存する事なし、太田入道か所行の悪さに、かくのおもひ立て候、道灌すてに誅せられて候上は、又何をか怨を遺し候ん、但今此亂逆に及ひ、兩上杉牛角の合戰、つゐに一方亡ひすといふ事候まし、入道ハ譜代として、扇か谷の家臣なり、目の前に主君を亡ほして、某何の思出か候へき、いかやうにも歸參の義を、上意にまかせ奉るよし申ければ、政氏公すなわち定正に仰入られ、勘氣をゆるされ、扇か谷にそ歸りける、此度菅谷原に打出しか、山内方にすてに殺さるへき景春か、民部太輔殿に命をたすけをかれ、恩をわすれて定正に歸參せしこそあさましけれといふものもあり、又理を辨まへたるともから、いや／＼武士の一命ハ、義に依て輕き事鴻毛のとしといへり、顯定ハ一旦の命をすくわれし所也、扇谷ハ重代厚恩の主君な

長享二年六月十八日

二二七

り、一旦恨みを晴たる上り、義と忠との重き事太山に過たりと、心さしを感ずる人も有り、去程に、兩陣たかひに時をつくり、一矢射ちかふるかとみえし處に、五郎朝良の二百よ騎、長尾新五郎・同修理亮か百七十騎と寄合、しりし戦かふ處に、朝良立足もなく追立られて引退そく、顯定・憲房父子横合に懸りて、引のく朝良を打とめんとす、定正これを見て、左右の軍兵に下知して、朝良うたすな者共とて、関とおめいて打て懸る、顯定の兵懸くつされて引退そく、長尾入道か二百五十騎、藤田三郎か三百よ騎と懸合て、火花をちらして責たゝかふ、藤田痛手を負て引退しかハ、軍勢みたれて木葉のとくちり／＼になる、長尾機に乗て旛をあけ、味方をすゝめかゝれや／＼と下知しければ、顯定の旗本くつれて我先にと引てゆく、（返せといへとも、只引に引ければ、顯定父子力なく押立られて退そき給ふ、勝に乗て追懸しか共、日すてに暮ければ、長追なせそとて引返し、定正すなへち政氏公に色代して、古河御所に送り入奉り、扇か谷にそ歸られける、

〔鎌倉九代後記〕

成氏

同十八年、

〔文明〕
○中略、定正、太田道灌ヲ殺スコトニカ、亦道灌ヲ誅シテ

以後、顯定心ヲ翻シテ、定正ヲ亡スヘキ企アリ、顯定ニハ關東ノ諸士多ク屬スニヨリ

テ、彌定正ヲ討ヘキ謀ヲ廻ラス、定正ハ古河政氏〔成氏〕ト一味シテ、顯定ヲ亡サン支ヲハカル、

長享二年、兩上杉武州松山ニテ戰フ、

延徳元年二月五日、山内顯定・憲房〔顯定養子〕兩將ト扇谷定正、相州眞卷原ニテ相戰フ、顯

定ハ一千餘騎、定正ハ纔カ二百騎ニ過キス、顯定利ヲ失ヒ敗北ス、

同年六月十八日、顯定・憲房相州須賀谷原へ出陣、關東ノ諸勢悉ク屬ス、定正并子息五郎朝良出張、古河政氏定正カ合力トシテ同ク出馬、長尾景春入道〔定正ト古河政氏一味ノ後、景春定正ニ屬スト云々〕定

正カ陣ニアリ、兩陣相戰フ、朝良一番ニカ、リ、長尾新五郎・同修理亮ニ掛合テ追立ラル、顯定・憲房横合ニ是ヲ追フ、定正左右ノ軍兵ニ下知シテ是ヲ擊ツ、又長尾入道ハ、藤田ト懸合テ追散シ、其勢イニ顯定ノ旗本ヘカ、ル、顯定・憲房利ヲ失ヒ引退ク、

〔鎌倉大日記〕

長享二戊申六月十八日、於武州須賀谷、兩上杉合戰、

〔喜連川判鑑〕

左馬頭從四位下政氏

〔己〕延徳元六月十八日、山ノ内顯定・憲房父子、相州菅谷原ニ出張、扇谷定正・同五郎朝良對陣、政氏扇谷ヘ御合力トノ御出馬、顯定敗北、

〔旅宿問答〕 關東武藏國波羅郡別府郷ニ、彦右衛門云大夫アリ、元ハ是同郡厩尻郷ノ所生也シカ、後土御門先年長享年年中ニ、上杉棟梁山内顯定、同名修理大夫定正ト發波瀾、然ニ將軍左馬頭政氏、顯定爲合力、引牽一萬餘騎、村岡如意輪寺ニ有發向、其時來天動搖ノ萬民是ヲ不立、郡郷一片ノ炎トナル、

〔小田原陣顯正記〕 上 小田原北條系圖家傳事

長氏 伊勢新九郎、(長享)童名小市若 同二年二月五日、上杉顯定兵ヲ率シ、長尾新五郎・同修理等、定正ヲ退治トシテ、相州實蒔原ニ出ツ、定正ハ長尾左衛門入道伊玄ヲ大將トシテ出ツ、古河ノ成氏ヨリ加勢ヲ遣シ、彼原ニテ合戦ス、顯定討負敗北ス、

實蒔原

同年六月八日、同國須賀原ニテ顯定又定正ト軍サス、顯定又負タリ、

〔新編相模風土記稿〕 四十四村里部 大 西富岡村 邇志止美 實蒔原 北方ニ在、今都住郡三 糟屋庄 遠加牟良 此原ハ兩上杉氏ノ古戰場ナレト、土人其事ヲ傳ヘス、テ畑トナリ、僅ニ名ノミ存セリ、但兩家ノ合戦ハ長享二年二月ニシテ、民部大輔顯定・兵庫頭憲房等、多勢ヲ率テ此地ニ出張セシヲ、修理大夫定正僅ノ兵士ヲ以テ是ヲ討、大ニ勝利アリシナリ、○中此邊ニ古塚六七基 此内鐵塚、或ハ丸山ト稱スルハ、高一丈一尺餘、廻リ廿五間餘、上三石ノ觀音アリ、是ハ安永二年地頭戸田氏ノ建ル所ナリ、其餘ハ小塚ナリ、當時戦死ノ者ノ

七澤城蹟

塚ナルニヤ、又西方ニ一基 須藤山ト呼フ、アリ、

〔新編相模風土記稿〕 五十八村里部 愛 七澤村 奈々佐 七澤城蹟 村ノ中程ニアリ、甲郡五 毛利庄 波牟良

○中 其後上杉修理大夫定正ノ持城トナレリ、土人ノ口碑ニ殘レリ、然シテ定正ノ兄刑部少輔朝昌 持朝子ニテ、三浦時高ノ養子トナル、當城ニ住セリ、○中長享二年二月、定正、顯定父子ト合戦ノ時モ、朝昌此城ニ在テ處置宜ヲ失ヒシカト、定正終ニ討勝シ由、定正ノ書翰ニ見エタリ、

十九日、辛御精進解、

〔御湯殿上日記〕 ○京都御所東山御文庫 庫記録甲二百三十九所收 六月十八日、○中よし田の二位御はらゑまいら

する、そのほか折五かう・やなき三かまいらする、あすこれをはまな御いわるはしめにまいるへきなり、

〔御湯殿上日記〕 ○京都御所東山御文庫 庫記録甲二十九所收 六月十九日、けふは御しやうしんとけ、(勝仁親王)宮の御方

よりかひのあわ一折らる、(飛鳥井雅親)かしわ木大納言入たうよりさかひて三をけらる、ひろハシもり光よりすゝき一をり・御ひら一折らる、(義政)ひんかし山殿よりもく六そひて、十色いろたてみにをたひたゝしうらる、(花山院政長)花山より御ひら一折らる、(觀心尼)あんせん寺殿そのゝちはしめて御まいり、御宮けにまき一をり・御うり一かこ・御かわらけの物・やなき一からる、(應神女主)御かつし

吉田兼俱御被及ビ酒饌ヲ獻ズ

勝仁親王虵ヲ獻セラル酒饌ヲ獻ズル人々々々廣橋守光義政花山院政長御參内ノ宮々々安禪寺觀心尼

應善女王
第三皇子仁
尊
第四皇子勝
仁親王
小御所ニテ
賜臣ニ宴ヲ

勝仁親王及
比邦高親王
等ニ物ヲ賜

義尙物ヲ獻

長享二年六月十九日

二二三

き御所もなる、三(上卷)の宮御方もんせきよりひしめてなる、二色一から(上乗院宮)、しもかわら殿もなる、二色一から、宮の御かたもなりて、御ひしくと御いわるあり、けさく御より御さきに、よし田より(實教)る物ともにて、まつ御さか月(等世)ら、小御所にての一こんに、おとこたちもせうくめす、御さかななどして五こんら、くわんしゆ寺より二色一から、からすまろのし(實教)より御ひら一折ら、昨日はんせうけんよりをり三かう・やなき一から、これも御まいりあり、ないし所へ(等世)らへきにて、御まな・御たる一まいらる、御かたの御所多二色ら、ふしみとのへ二いろら、女中の御くはりともせらる、あんせん寺とのへ御所ひめ宮御ふた御所も一色つら、やふ(四社季經)・大内記にもつかはさる、御むろ(道水親王)・中(御宣親)かど・かんろしへもつかはさる、しけなかにひしくみたふ、なかりしよりさき一ら、
夜(夜)る雨ふる、
廿日、むろまち殿よりひふつ十色、もく六そひてら、内侍所一色ら、御かたの御所へもをなしく二色ら、庭田(兼世)へすもしつかはさる、くわんしゆうしの北むきへもつかはさる、女房たちへも御くはり、御ひら・御うり二つ、御くはりせらる、いは千代しこ(兼世)う、をり三かう・御ひら一折・御うりの大かこ・やなき三かまいらす、小御所にて御

宮女御精進
解ノ御銚子
事申沙汰

邦高親王ヲ
召サセラル

三條西實隆
ヲ召サセラ

鮮ヲ賜フ

しやうくわん、宮の御方もなる、御ひしく五こんら、一こんはあすをかやうにしるす、うつゝなし、

廿一日、いは千代しこうけふなるを、昨日にかく、うつゝなし、女中へけふも御くはりせらる、

廿六日、二宮の御方なる、めうれん寺一日の御れるとてまいらる、御宮けに二色一から、女はうたち御しやうしんとけの御てうし事御申さた、御つみてにとて、はんしゆ(白川忠宣)たち、みん部卿・ゆきかすのあそん御てうし(源法輪三條冬子)ら、きう上らふも御まいり、めうれん寺の御さか月にうちつゝきてら、宮の御かたもなる、あんせん寺殿御ふた御所・はんせうも御まいり、ふしみとのへふと御申、やかて御まいり、二の御所よりかみのあわ一折ら、

〔實隆公記〕六月十八日、庚戌、天陰、○中依當番參内、○中今夜兼俱卿内々進御稜云々、十九日、辛亥、朝間雨降、午後晴、○中及晚有召之間參小御所、御精進解小一獻在之、傾數盃退出、

廿一日、癸丑、雨降、○中自禁裏鮮一折拜領之、賞翫畏入之由申入了、

長享二年六月十九日

二二三

長享二年六月二十日

二三四

禁中蟲拂アリ、

〔御湯殿上日記〕

○京都御所東山御文
庫記録甲二十九所收

六月十九日、

〔頭書〕「むしはらゐせらるゝ、」

○本月二十二日、蟲拂ノコト、便宜左ニ合致ス、

〔御湯殿上日記〕

○京都御所東山御文
庫記録甲二十九所收

六月廿二日、

〔頭書〕「むしはらゐあり、」

二十日、子細川政元、近江大津ノ陣ヲ撤シテ、歸洛ス、

〔蔭涼軒日録〕

六月廿日、不參、天快晴、○中細川右京兆今日自大津歸洛、馬上十三

騎、人數四百餘人有之云々、

〔大乘院日記目録〕

四

六月廿日、細川一家悉以引御陣云々、

〔後法興院政家記〕

六月廿七日、己晴、細河右京大夫自大津陣近日上洛、依是種々

有物云々、

○政元、兵ヲ率キテ近江ニ至リ、三井寺ニ陣スルコト、元年九月十六日ノ條ニ、義

尚ニ説キ、陣ヲ坂本ニ移サンコトヲ勸メテ聽カレザルコト、同年十一月是月ノ條ニ、

二十二日ノ
蟲拂

馬上十三騎
人數四百餘

政元ノ上洛
ニヨリ種々
風評アリ

飯尾清房・結城政廣等ノ非行ヲ義尚ニ訴へ、其處罰ヲ請フコト、同年閏十一月是月
ノ條ニ、將士ヲ率キテ鉤ノ陣ニ赴キ、義尚ニ謁スルコト、同年十二月七日ノ條ニ見
ユ、

二十一日、癸音奏・警蹕宣下アリ、

〔御湯殿上日記〕

○京都御所東山御文
庫記録甲二十九所收

六月廿一日、○中をんそ・けいひつのそうあり、

けふよりてたゞく、

〔實隆公記〕

六月廿一日、癸丑、雨降、○中今日音奏・警蹕□事宣下、同本所素服人々除

服事宣下、上卿中御門中納言參陣奉行云々、委旨可尋記、自今日卷御殿之御簾云々、

長門阿彌陀寺ヲシテ、同寺領ヲ安堵セシメ、諸役ヲ免除ス、

〔赤間宮文書〕

○長門

〔續紙ウハ書〕
〔實空上人御房

〔中御門宣秀〕
左少辨〔花押〕

長門國赤間關阿彌陀寺事、久分西山之一派、遠學東土之四宗云々、寺領等事、任代々綸
旨・度々廳宣等旨、諸役免除者也、早全領知、殊抽聖運之懇祈、可專佛法之紹隆者、天
氣如此、悉之、以狀、

上卿中御門
宣胤今日ヨリ御
簾ヲ卷カセ
ラル

長享二年六月二十一日

二三五

長享二年六月二十二日 二十四日

二三六

長享二年六月廿一日

左少辨(花押)

住持實空上人御房

〔宣秀御教書案〕

○繪旨ハ前掲ノ赤間宮文書ニ同ジキヲ以テ略ス、

表書、略住持之二字、實空上人御房、左少辨判也、

此繪旨事、(合川忠宣)民部卿傳仰、二尊院之末寺云々、般舟三昧院住持來申之、禮百疋持參、

二十二日、甲參議綾小路俊量、美濃ノ知行ニ就キ、繪旨ヲ賜ハラシコ

トヲ請ヒ、酒饌ヲ獻ズ、

〔御湯殿上日記〕

○京都御所東山御文庫記錄甲二十九所收

六月廿二日、(綾小路俊量)源宰相みのゝち行のりんし申さるゝ

につきて、御まな二色・やなき一から、御いわみあり、

二十四日、丙三條西實隆ヲシテ、貞觀政要ノ銘ヲ書セシメラル、

〔實隆公記〕

六月廿四日、丙辰、霽、雨時々降、○中自禁裏貞觀政要銘可書進上之由

被仰下之、則染筆進上了、

○コノ後、實隆ヲシテ、年中行事銘・論語外題等ヲ書セシメラル、コト、便宜左ニ

阿彌陀寺ハ二尊院ノ末寺

實隆書シテ進上ス

實隆ヲシテ年中行事銘ヲ書セシメラル、論語外題ヲ書セシメラル

等持寺住持周麟八講ノコトニツキ義政ニ訴フ

義政先例ニ依リ等持寺方丈ニ八講シム

合敘ス、

〔實隆公記〕

九月廿九日、己丑、天晴、○中年中行事上下銘、今朝依仰染筆了、

十二月五日、甲午、天晴、午後雨降、入夜甚、及曉霽、論語外題可書進上之由、女房奉

書到來、則染筆進上了、

足利義教忌辰、幕府、相國寺普廣院ニ佛事ヲ修シ、義政、之ニ臨ム、マタ、等持寺ニ法華八講ヲ行ヒテ、其冥福ニ資ス、

〔蔭涼軒日録〕

五月十八日、天快晴、齋罷謁東府、○中又就等持寺八講之儀、住持一

行將供台覽、相公御會所御成之故、堀河殿預置之、以御機嫌可供台覽云々、件以堀河殿白之、

廿八日、天快晴、○中等持寺景徐翁光臨、有宴、就八講事、等持住持之一行堀河殿供台

覽、寺家訴訟之儀被白之、相公曰、八講事者、自等持院殿御代有之、可見略之事如何、

八講堂者、(足利義持)勝定相公御代初見立之、元於方丈八講有之、任先例拵方丈、後々者八講之儀

在方丈者可然云々、其命昨日以桂子傳等持寺、○中往堀河殿御里、(集禮)愚云、○中等持寺八講

事御披露珍重、仍住持景徐來云、如御意連々拵方丈、可爲八講之場、當年事者難成、先

長享二年六月二十四日

二三七

長享二年六月二十四日

二四〇

要脚未到ニ
依リ等持寺
ノ法華八講
始行延引
ス
結願
始行
參仕ノ人々

廿日、壬子、晴、○中^(兼持寺御九)八講自今日可有始行之處、用脚未到之間[□]延引云々、
廿二日、甲寅、雨降、○中八講自今日始行云々、
廿六日、戊午、天晴、今日等持寺御八講結願也、午後參入、今日參仕人々、冷泉前大納言・
勸修寺大納言・大藏卿・下官・橋本宰相中將、
量朝臣・基春朝臣(時明院)雅俊朝臣(飛鳥井)在數・資敦(鳥丸)・卜部兼致(吉田)・藤原資直等也、
[□]儀今日西上南面ニ冷泉大納言立、仍予以下折南西面立、引[□]列立之儀如例、北上西面也、火舍取兼致也、
布施勸修寺大納言以下公卿二反取之、第一公卿只一度也、先御導師前三重二裏、次證義
前三重一裏、平座二重一裏也、予一座證義前一重、第二前一重、兩度勲之了、秉燭之時
分歸宅、僧名續之、
等持寺御八講

僧名
證義者

(兼圖)證義者
僧正
僧正兼講師、
(公範)權僧正兼講師、

初日

初日

朝座

朝座講師僧正(任圖)

問者 權僧正(公範)

讀師房兼

唄 空覺

散花(光)什(兼圖)

行香咒願僧正(兼圖)

三禮 運伊

暮座講師房兼

問者 房實

讀師空覺

唄 實瑜

散花房伊

第二日

朝座講師(空)覺

問者 實瑜

讀(師)房實

唄 房實

散花運伊

暮座講師房實

問者 房實(兼九)

[□]讀師(實)瑜

唄 空覺

長享二年六月二十四日

二四一

長享二年六月二十四日

〔敬也〕
運伊

第三日

朝座

〔朝座〕
講師實瑜

問者 空覺

〔讀師光〕
什

唄 房實

〔散花運〕
伊

暮座

暮座講師光什

問者 尊範

讀師房伊

唄 實瑜

散花運伊

第四日

朝座

朝座講師尊範

問者 光什

讀師運伊

唄 房兼

散花房伊

暮座

暮座講師房伊

問者 運伊

讀師實瑜

唄 房實

結願日

朝座

散花尊範

結願日

朝座講師運伊

問者 房伊

讀師空覺

唄 實瑜

散花光什

暮座

暮座講師權僧正

問者 僧正

讀師運伊

唄 房實

散花尊範

行香咒願僧正

三禮 運伊

〔實隆公記長享二年春夏紙背文書〕

○六月三日裏

等持寺御八講自來月廿日可被始行之、結願日可令參仕給候由、被仰下候也、恐々謹言、

〔長享二年〕
五月廿九日

〔三條西實隆〕
侍從中納言殿

〔勸修寺〕
教秀

○五月廿八日裏

長享二年六月二十四日

三條西實隆
結願日ノ參
仕ヲ仰付ケ
ラル

長享二年六月二十四日

二四四

先日申候寺八御導師事、綱所に被仰出候哉、内々爲存知令尋申候、〔被力〕懸御意候ハ、返々畏入候、旁可參上之由可被申入候、恐々謹言、

〔長享二年〕
五月廿九日

〔法輪院〕
公範

〔親長卿記〕 六月廿日、晴、〔武家御願〕例年等持寺八講依無用脚延引云々、

廿一日、晴、八講同前、

廿二日、晴、八講自今日始行云々、

〔後法興院政家記〕 六月廿一日、〔西御院〕丑、晴、○中略、昨日等持寺八講延引、自明日可被始行云々、依用途未到如此云々、

廿六日、〔戌〕午、晴、等持寺八講結願云々、

〔雜事要録〕 十一 自處々禮物

六月廿六日、一種一桶、〔西御院〕時顯朝臣、御八講御訪、

〔久守記〕 ○宮内廳書 六月廿一日、晴、〔西御院〕癸、〔陵部所藏〕丑、

一昨日御八講無執行之、今日ヨリノ由候也、御堂作事也、自東庄上人夫二人下、

廿二日、晴、〔甲〕寅、

○中 略、御八講用人夫二人召下候也、

廿三日、雨降、〔卯〕乙、

一御八講、今日本所御參、雜色ワラクツノモノ廿文一本、笠持一人、御輿也、上下著、

御供彦兵衛・彦二郎・彦右衛門・彦四郎・與三郎・いし・千松、人夫一人、御裝束ニ甘

〔元長〕
露寺殿御方、

〔大乘院日記目錄〕 四 六月廿日、等持寺御八講、〔兼通〕東院・〔任通〕東北院・〔宗徳〕喜多院參申、

〔政覺大僧正記〕 十四 六月十八日、〔善〕庚戌、

一御八講衆東院・東北院・〔善〕嘉多院上洛云々、七郷人夫事被申請間、十五人分許可ナリ、

〔等持寺御八講聽聞集〕 ○京都御所東山御文
〔庫記録甲百十九所收〕

長享二年六月廿二日始行之、

奉行傳奏大納言教秀卿

行支辨

長享二年六月二十四日

二四五

長享二年六月二十四日

綱所同前

證義

僧正兼圓

權僧正公範兼

講衆

法印大僧都房兼

法印權大僧都房實

、、、光什

權律師房伊

初日朝座 講師任圓

問、宗家解釋中、此題佛母抄在之、可存知之、明心解脫觀門、見、爾者修第一解脫人中、有離色界之染類耶、

問、見惑迷事、

同夕座 講師房兼

、、、任圓兼

、、、空覺

大僧都實瑜

權大僧都尊範

、、、運伊

問者公範

問者房實

論題

講衆

問、立通教々相事、不爲斷惑證理、爲調機入頓方便可云耶、
問、一家天台意、法花已前諸經中、明一心三觀可云耶、

第二日朝座 講師空覺

問者實瑜

問、不執芥事、

問、花嚴頓漸事、

同夕座 講師房實

問者房兼

問、圓實芥心、與四弘誓願其体一也、將各別法也可云耶、

問、一家意、不修三教方便、自初發心直立圓頓妙行、有開佛知見人可云耶、

第三日朝座 講師實瑜

問者空覺

問、宗家解釋中、判七重二諦相、見、爾者其中釋圓二諦、引何譬、顯何義耶、

問、一家天台意、一世界有二佛竝出之義耶、

同夕座 講師光什

問者尊範

問、摩訶止觀中、判陰入境、舉去丈就尺、去尺就寸譬、見、就分義可云耶、

問、一家天台意、直往圓人、有超登十地義可云耶、

長享二年六月二十四日

長享二年六月二十四日

二四八

第四日朝座 講師尊範 問者光什

問、本門壽量顯本時、九界迷類共顯本耶、

問、於究竟寂光土、有身土別耶、

同夕座 講師房伊 問者運伊

問、於根本法華、有開權顯實可云耶、

問、一家意、圓頓行者開悟得脫時、必用三學修行可云耶、

結願日朝座 講師運伊 問者房伊

問、法花圓經意、有正像末三時不同可云耶、

一家天台意、無明法性俱無始本有法也可云耶、

同夕座 講師公範 問者任圓

問、普賢并來此界時、役無邊色像、有何故耶、

問、一家天台意、釋迦・彌勒爲同時發心、將可云異時發心耶、

御經供養等如例年、無重難、

一如例年六月廿日可有始行之旨、被成請書之間、十八日令上洛候處、御布施用脚未納

經供養例年
ノ如シ
重難無シ

義政ノ願文

之由、有其間之間、率爾被始行、御布施無下行者、可及違亂之上者、京著已後御遂行
可目出之間、傳奏邊申送畢、北嶺同以同篇也、仍廿日始行被延引畢、
一廿日晚ニ御布施用脚京著之旨、問丸申上之間、自廿二日始行畢、
一喜多院手番已後轉敍于法印畢、

〔願文集〕

六 竊以、述而不作者、君子之常也、信而好古者、善人之法也、敬一人則四

夷宓慶、用三老則萬邦飜邪、蓋小長各和順、抑尊卑互寬宥者乎、伏惟、先考一品贈大相

國尊儀、家貫三公、名雄萬夫、率疲散之卒、振炎劉之大功、舉博智之仁、興蒼姬之至德、

內拱撫育之手、導以率土窮民焉、外垂無邪之頭、仰以宇涯靈神矣、或開忠諫之路、或固

賞罰之場、東夷爲之相隨、西戎爲之相應、悲乎、復凶年之順、當災月之變、辭柳營之假

柱、遷蓮臺之本源、朝廷則愍忠議之淳、野趣者戀仁愛之重、爰弟子、繼父祖之芳蹤、分

心於是非之境、極文武之昇進、安身於天地之間、不矜官達之尊、不誇名節之化、蕩々乎

明主惠、巍々乎尊靈恩、方今排恆例之禪扉、迎四十八回之忌辰、企供佛讚經惠業、奉供

養釋迦・文殊・普賢等、奉摸寫法華真文一部、開結・心阿等各一卷并促五日之齋會、令

修十座之講論、鳳鸞之卿相列行香、龍象之闍梨供麻布、施度之捧物者、備天衆之妙要、

四十八回忌
辰

長享二年六月二十四日

二四九

長享二年六月二十六日

所修之諷誦者、具尊靈之良因、廼命權僧正法印和尚位公範爲唱導師、德重宗門、足稱人中獅子、學究教海、靡愧天上麒麟、誠是、法家碩匠、釋苑秀才、觀夫、涼生高竹而澄時々法會心、水浸團荷而洗如々聽聞耳、諸聖定加哀愍、薩埵同作降臨、然則尊靈駕一乘之意車、脫輪回妄境、(註)詫九品之願轂、成證果要津、乃至群生利益平等、敬白、

長享二年六月廿四日

弟子沙彌敬白

諷誦文

入道(義改)准三宮家

請諷誦事

三寶衆僧御布施

右奉仰備、先考尊靈、古其爲十善輔佐之相將、今是爲九品園遶之覺王在于茲、尊在于彼貴孝子之追福滿足、先考得脫無疑、于時暑氣漸退商意稍生、一爐之餘薰、證一代教之化、三磬之逸韻、驚三菩提之聞、凡厥善根所覃功德增進者、奉仰諷誦所修如件、敬白、

長享二年六月廿四日

別當藏人頭正四位上行左中辨藤原朝臣奉

二十六日、戊午南禪寺聽松院靈彥世希寂寂ス、

蔭涼軒集證
靈彥ノ病ヲ
見舞フ
衰老甚シ

〔蔭涼軒日録〕

五月廿二日、天快晴、○中遂往聽松、候彥(靈彦)希聖不例、乃對面、衰老太、

不可過土用中乎、

六月廿六日、不參、天快晴、○中赴方丈齋、○中茶了皆歸、勝智・勝定・永徳・等持・功

叙・主席及愚(集證)在南縁茶話移尅、時自鳳南陽方以靈穩藏主相告云、聽松翁及行、以後爲問

病皆不可有來臨云々、皆推之、聽松翁遠行乎、穩藏主太淚痕、含言不吐也、○中四鼓刻彥

希聖遷化、其曉闍維、々々之儀人皆不識、卅日於仙館、(集證)々々老人話之、

廿七日、天快晴、○中作藏主來語云、聽松希聖和尚今曉遷化云々、

七月二日、天快晴、○中齋罷往方丈、住持同途、○中遂往聽松院、兩人各持香資一緡、置

之眞前、先本尊觀音燒香三拜、次眞前燒香三拜、香藏主答拜揖茶飯、

八月九日、天快晴、○中鹿苑侍衣來云、(集證)蘭坡和尚先日來云、來十五日聽松院營佛事、仍

可任玄賀西堂云々、可爲如何乎、愚云、玄賀西堂事者、去年十一月廿日豐後崇祥寺入寺

公帖御判出、年期末滿者自由出頭有之、皆可逐其例、不可叶由、堅蘭坡方江可被仰付云

々、

十日、不參、天快晴、○中來十五日就聽松院齋引印帟、(集證)丹公亦備其具、

長享二年六月二十六日

集證瑞智聽
松院ヲ弔フ

闍維ノ儀ヲ
人皆知ラス

長享二年六月二十六日

十五日、天快晴、早旦(兼三)小補同途赴聽松院齋、蓋希聖和尚盡七日也、○中遂往聽松、先影前燒香三拜、待半齋、打飯、則皆取坐牌、半齋、靈香藏主燒香、維那靈育藏主、齋主位鹿苑院(備)惟明、賓位勝智院月翁(周錄)、賓對睡足軒錦江(兼文)、主對仙館院蘭坡、齋三汁十四菜、冷麵五果、茶了皆歸、

十月二日、不參、天晴、○中自岩栖院來四日齋之請帳廻、請衆六十二員、其外給仕廿人許有之、

卒哭忌齋會
燒香智風

八十六歲

四日、天晴、齋前剃頭、赴岩栖院齋會、蓋希聖和尚卒哭忌齋也、當日來七日也、半齋、燒香鳳(智恩)南陽藏主、維那靈育首座、主位月翁和尚、賓位蘭坡和尚、主對天隱和尚(龍澤)、賓對(兼三)川和尚、齋三汁菜十四、冷麵七果、茶了皆歸、

〔鹿苑日錄〕

一 長享貳年戊申六月廿六日、聽松村庵希世彦和尚入滅、八十六歲、

〔春浦錄〕

二 追悼 聞聽松和尚訃音敘追悼之懷云

峭峻機鋒萬仞高、牢關一踢慘吾曹、隣居猶記海嘯寺、話聽風松半榻濤、

〔慧鑑明照禪師道行記〕

大矣哉佛祖之道、非自其位中來者、輒成其道難矣、故沒於此出於彼、隱於彼見於此、一佛作多佛、一祖作多祖、直饒英靈底、驀成其道者、亦興

宗熙ノ追悼
ノ詩
龍統作靈彦
道行記

自ラ村菴ト
號ス

正宣ニ師事
ス

六歳ニシテ
就學

得巖靈彦ノ
詩ヲ賞ス

細川滿元ニ
養ハル

足利義持ニ
愛セラル

八歳ノ時義
持ニ伴ハレ
テ仙洞御所
ニ參ス
御前ニ詩ヲ
賦ス

其家不易矣、克紹其道、而昌其家者、勅賜慧鑑明照禪師是也、師諱靈彦、字希世、自號村菴、生有異徵、穎出不群、膽氣老成、祛滌俗習、父母知爲法器、割愛价人、投諸南禪善住庵前淨智斯文、(正宣)々一見爲異、名之以彦、大父寶鑑(兼致)、祖大鑑(正澄)、重徵豐照、可以卜矣、師六歲始就學、所讀之書、不煩再授、過目則誦、如夙所養、強記足以兼數人、口多激辭、自然成章、思出意外、逞々驚人、々皆知其工於詩、雙桂(得慶)惟肖題詩扇上、書其尾曰、彦童語妙天下、來徵拙作、汗顏而已、總管府細川悅道源公聞奇之、延遊私第、不與群兒笑謔、侮玩之氣、遠出其上、悅道得鶯之尤者、豢之既久、一日病斃、惜甚、因試師以嬉戲爲佛事、其略云、可以千金市其骨、時以鳥價翔貴、及此、雙桂哀詞曰、金衣合是堅牢物、一夜西風碎彩雲、桂以爲、師所痛惜邁于我、故曰語老成、師七歲、顯山相公(足利義持)枉駕悅道第、見師太愛、酒酣謂之曰、以我爲父耶、悅道爲父耶、師指悅道、由是鞠以爲之子、師幼離里、以父母無再眷、不自知何許人、不屬于毛不離于裏、視悅道如眞郎罷、悅道亦視師如眞困、所謂螟靈有子、蝶羸負旃者也、師八歲相公存撫之餘、携詣仙洞小松院上皇、々々先登其名、賜讌制試、師輒迅筆云、不意青雲上、揮毫賦楚詩、上皇大驩賞曰、如此兒、豈于古未見于今、唐有劉晏、八歲獻頌、玄宗奇其幼、命張說試之、說曰、國瑞

長享二年六月二十六日

長享二年六月二十六日

二五四

義持靈彦ノ
襪ヲ結ブ

緇素八歲彦
童ト呼ブ
得巖希世ノ
字ヲ與フ

江碧ニ從學
ス

龍派ノ講書
ヲ聽ク

十七歲具足
戒ヲ受ク

也、又叢、李賀七歲以詩有名、韓退之始叢意怪、往爲賦焉、朕意在茲、而無間然、○秃尾
長柄帚
所收慧鑑明照禪師道行記、上ノ八字、時師所著鞮解、相公結之、縉紳衣冠引頸爭觀、皆曰、漢有王
生、使張廷尉結襪、時人賢王生而重廷尉、廷尉尙爾、況相公乎、其器重若斯、從此聲誼天
下、緇素呼曰八歲彥童、双桂命其字以希世、作銘云、自幼嗜吟、五字七字、衝口而發、
肆筆而書、名達相府、及至洞宮、皆召見之、面有所試、不亦偉哉、吁以恆兒視之、希世
寔希世之才也、進學不已、則它日所成、豈啻今日希世而已哉、方斯文提誘師、多辨問靡
所弗至、文以爲夙世契悟、此子當元吾宗、〔元九〕離文太早、依其法之從姪江碧、相公選輦下鴻
納、以禪詩鳴者、靖做罷參偈、悅道陰命師頌、曰、一步闊一步、脚下盡乾坤、踏斷草鞋
耳、元來不出門、鴻納咸駭服云、隔生不忘、顧師一偈、如迦陵之雛、其聲壓衆羽、悅道
請續翠〔龍派〕江西、日々講書授之、悅道亦同聽、私第之與東山、才阻一水、常以日之中爲時、
朝而朝則轉以暮、夕而夕則轉以旦、無日不講、無書不畢、故學之進、日新日夕新者、有
季於此矣、師十七歲、披削稟具、業弗少懈、〔應永二十八年〕辛丑歲師齡十九、悅道緝其新作、々一巨
編、見求續翠筆削、書其末曰、希世卅歲已有能詩聲、〔後小松上懸〕上皇便殿賜坐、東閣寵賚隆至、其
聲耀若此矣、余疏賤何以應命乎、雖然留之數日、玩其藻繪、融液究於鍛鍊之工、而春容

得巖ニ壬寅
藁百首ノ評
點ヲ需ム

滿元ノ死ニ
遇フ
滿元所付ノ
地ヲ以テ其
追善ノ資ニ
充ツ

激昂、則幾於古作者、何其姿貞婉妙、而才氣老蒼也哉、非天地之鍾靈產秀、安能其所爲
臻茲、然余猶有欲言者、古之人寓道於伎、所謂佛祖單傳之祕、發見於日用間、而詩外無
禪、々外無詩、希世昂焉、余將法社中興賀也、此言竟有徵矣、〔應永二十九年〕壬寅歲師齡二十、又就双
桂需其評點、書其末云、聽松閣下以希世壬寅藁一百首見示、今歲才半歲餘耳、此外必有
不登藁者、何其多哉、名章俊語、連珠疊璧、拙目輒可定其價乎、然命弗可拒、頗加批
改、近世劉會孟、闕少陵東坡全集、或批或點、會孟豈出于杜蘇之上耶、但述管見而已、
猗歟、二翁天下二甘露也、其所許可、誰可誣焉、不翅能詩、亦能屬文、其於文也、得之
於天意、恢辭簡旨、深且遠、踐矩循護、一語不浪發矣、在東阜則鶴鳴庵上烟雲霧雨、松
風蘿月之出入者、在南寺則羊角嶺下林丘溪谷、巖花埜鳥之散布者、皆詞筭也、其氣也
完、其神也昌、豈規々於割剗而錦繡者、所能及哉、至若確論古今、品評人物、則雖宗
門遷固、不能多過之、親炙桂翠二翁、裒藁索潤色、夾卷丐講明者、莫加於師矣、應永三
十四年師年二十五、悅道病革、以十月十六日遽然就木、癩心惻々、須臾弗沫、駐世之
軀、未由攀颺馭、感恩之淚、徒欲漲溟波、然於此中、于旭于曠、薌火勤之、分悅道所付
丹陽之田、屬之於本庵善住、飯十六員僧、每日專修冥資、可謂孝於孝也、篤矣、師靖自念

長享二年六月二十六日

二五五

龍派ノ菩提
ヲ弔フ
正澄ノ塔ヲ
創ス
世人正澄ノ
後身ト稱ス

之、天之長其荒、地之久其老、九原不可以作、奚以酬恩爲乎、今之倡道、雖文字失於誕者多矣、倘棄載道之器、以欲弘道、猶厭飡而欣飢、奚以壽惠命哉、不若勵志修身、以酌罔極、勵志者必勉學、々々者必智大、修身者必立言、々々者必理明、故以卽理之智、照破卽智之理、々々者與智、冥必達于道、々々々者必登佛祖域、々々々々者有何難酬乎、繇是手不釋卷、汲々孜孜、寸陰尺璧、繼晷以夜、至不知寒暑、夏則雖紗幘薄似無之中、遮檠背以畫屏、汗之迸如漿、冬則雖炭團如紅金之側、凭淨几而纂雪、手可以凍皸、大率浩徹曙、及困極而假寐焉耳、一夕無吹滅釭矣、凡内外之書、行天下者、一厨所藏、皆有函列于架、以千字文排焉、臻二三百、殆如大藏、無一不翻閱者、其傳習者、深窮廣探、古人疑未決者、悉氷釋矣、其涉獵者、不假註解、理自通曉、如破竹然、永享九年丁巳、師年三十五、双桂瘞履、將謂歲在龍蛇、賢人嗟矣、嘉吉元年、續翠蒞龍阜、將登師後板、敦勸不應、其後左街僧統、胥繼數勸、隄岸甚平、視植拂、猶吾徒視沐櫛、文安三年丙寅、師年四十四、翠趨寂、時無必南之針、弗勝推慕、累七之際、命其徒課禪誦、蓋復酬知也、同四年丁卯、祝融發雲興庵、延及本寺、雲興於是絕矣、後六年、享德二歲癸酉、師五十一、購其地創大鑿塔院、維大鑿滅後一百十五年也、舉世僉曰、希世實大鑿後身也、

塔ヲ聽松ト
名ケ滿元ト
善ノ場トナ
ス

滿元ノ後持
元持之持賢
勝元等モ靈
彦ヲ欽仰ス

扁以聽松、々々乃悅道所嘗號、尋因舊號、籍丹之田附焉、爲悅道追孝場、向之十六員所修徒在茲矣、庶乎悠久不墜、年々十月先忌旦之二日、延請東西刹一時宿艾英雋設齋、以施者六十年矣、以終身莫忘也、加之追崇二鑑一文之道、且又爲百世雲仍之庇、其謀旨哉、悅道之後（細川持元）玉峯・春巒・芳門・仁榮踵而仕朝、同欽師道、不減於悅道在之日、不翅嚴師外衛、亦克不忘先志、誰弗欽艷乎、天下翕然仰之、寔歸然宗門之靈光也、抱寄蘊勝之士、雖求講授、而少肯諾、偶有講則深造桂翠精奧、其餘之說、是者取之、否者捨之、取捨一決於己而出自得之妙、至其義、岐裂支分、沈思細慮、叟覈旨微、發於言則肆辯簸沸、通博無碍、其人雖再生、說盡而俾人服膺、無以踰之、是以內則德齒並貴、端居乎五岳上者、咸膜拜以咨決、如洪鐘在簾而應、外則鉅侯上將、雍容乎三公府者、咸扶轅以驩迎、如孤鸞覽輝而下、其位卑其跡潛、而尊大如斯、自古未之有也、雖鰕生雛道、不求帛而求言、豈可輕得乎、幸而短篇小章、片言隻句、有得之者、如拾卞隋、莫弗寶襲、先是讀東坡經進文集、至第六十卷、書黃子思韻後、而謂言逸邪、詞未足邪、承接有不應前、一日持其卷、過續翠問焉、翠熟視曰、公之言是也、然古人之文儻有如此、既鏤于梓、弗知所辨、師卽休去、翠亡後、師閱皇朝文鑑、值此篇、果有逸詞八十字、遂附入補之、一日諗

長享二年六月二十六日

二五八

予以此支、笑曰、翠尙存、必拊吾頂、於戲此集經御覽以降、讀者母慮幾人、未知有逸、於斯始見、可謂見與坡齊、倘非筆頭具眼、乃可爾乎、東山巖栖悅道所創、推其臘高者、命司院支、應仁中、兵燹毀撤、蕩無一瓦、師退閑于丹、仁榮在京、軍中重建今院、起師居之、蓋以悅道付師、請爲開山、文明十年之春、以院宰囑爪抹之子南陽鳳公、々々廼仁榮所鞠、僉曰、有此父有此子、同十五年、師遷龍阜聽松、々々亦向罹煨燼、兵不止十餘年、待得太平、拾砂礫披蒙幕、再造如故、簷薨鞏飛之美、池亭泉石之勝、倍于前矣、靜養餘息、表裏翛然、無所附麗、物我相忘、鬪體日夜聽松風焉耳、長享二年有微恙、醫不驗、一日告行、平素喜從之徒、咸奔眎焉、退而僉曰、精進幢其摧乎、有尊於幢、遂以二十一日、泊如而逝、如遊園觀、生于應永十年癸未、終于今茲戊申、世壽八十有六、僧臘六十有九、其夕歛全身於寶鑑塔側、(細川政元) 雒下辱道交者、如喪眞師長、(細川政元) 今司馬、亦如失眞伯叔季父、朝廷傳登、勅諡慧鑑明照禪師、○靈彦ニ慧鑑明照禪師ノ諡號ヲ賜フコト、延徳元年六月十三日ノ條ニ見ユ、 位止侍者、賜茲徽號、在常人足以爲榮、在師眼必爲不如無矣、師器質之深厚、識鑑之高遠、輔以學術之精微、其積於中者、浩如江漢之停蓄、其發於外者、爛如星日之輝光、其言文而眞、其行峻而通、其果敢之氣、剛正之節、至晚不衰者、王侯不能屈、威武不能易、端身以律物、勞

勝元岩栖院
ヲ再建シ之
彦ヲシテ之
ムニ起居セシ
靈彦聽松院
ニ遷ル
聽松院再
兵燹ニ罹リ
靈彦再造ス

僧臘六十九
靈致ノ塔側
ニ葬ル
諡號ヲ賜フ
位ハ侍者ニ
止ル

法語ノ作無
シ

龍統ノ贊

己以勵人、但以其不應世、天下爲歎、雖既老而休了、猶有庶幾於萬一者、至其掩光、而潛然失望、無乃厭世溷濁、潔身而去耶、溷濁者牛毛、潔身者麟角、烏虜可哀哉、顧夫、有道不可無學、有學不可無道、々根抵也、學枝葉也、有根抵而枝葉不茂、則其木不長、枝葉雖茂而根抵不深、則其木不存、前身而大鑑、道爲先學爲後深其根抵、後身而惠鑑、學爲表道爲裏茂其枝葉、若不如此、則永元喬木、何以得爲天下蔭涼哉乎、斯固佛祖之隨众生心、名跡不同者也、釋迦之有小釋迦、達磨之有小達磨、五祖之有磨頭、六祖之有跋脚亦是矣、以漚和般若風化一時者、村菴藁行于世、所惜無法語遺于後、然此蓋上士誓虫豸之驗也、南陽曰、翁與公爲師友四十餘年、知之也深、自公先而所不得見者、公之伯父續翠、(龍統) 先靈源季父九淵(龍統) 知之也精、俱有所語而所杳稔矣、庶乎錄其行、予曰、微笑居士作廣智禪師笑隱狀、無相居士作普濟禪師了菴狀、皆以遊其門也、狀固雖門生之職、何敢辱以翫跛之言、南陽曰、公之平生、有一負翁、吾未嘗登焉、今也若以所知而不述、則堙晦無傳、吾恐人之謂、公負翁、若之何、々詞爲懇、逼弗已、謹掇所見登之一二、撰次如右、贊曰、師之存于世、八十有六年、佛心如日、宗鏡如天、平常是道、文字是禪、賢者有所賴而不恐、愚者有所怖而不權、譬如泰山黃河、不費其力、而及物之功出乎自然、今

長享二年六月二十六日

二五九

師之沒也、一時宗匠、無愛而所就、四方衲子、無戴而所處、吾道沒於稻、吾禪失於蟬、愚益愚而得時自肆、賢失時而弗得益賢、譬如一朝壅河於上、半夜失山於前、然此二且聊爾耳、吁師曷日而再覲、望舊廬而悵焉、昨者以其避世遜名、不位乎極品爲惜、今者不堪惜其未逮上壽、天奪之之過、蓋非以予一人私言而惜、天下以乏爲天下師者惜旃而已矣、

○秃尾柄帚所收慧鑑明照禪師道行記ヲ以テ校ス、同書
コノ下ニ「三四百三字」ノ六字アリテ歲次以下ノ文ナシ、

歲次玄默困敦林鐘仲澣

五山之上南禪々寺前住山比丘群玉峯叟龍統謹撰



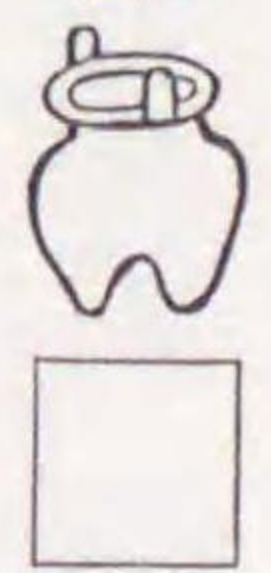
周麟ノ跋文

幼時詩ヲ賦
シテ北野社
ニ賽ストノ
說

是乃靈泉大士所製之村菴老禪行狀也、予借之而看、中有攸缺者、予曾聞、幼歲作詩、獻北野神君、一日題曰、梅花不與乾坤老、五百年來一樣春、投之神君、則寶殿鳴動、狀中缺之、想有心乎退世上小兒走於奇支者也、常菴俾予補之、不獲辭、謹從其命云、

○翰林胡蘆文集所收村庵老師行狀跋異
事ナシ、但シ宜竹以下ノ署名ヲ缺ク、

宜竹老衲某



〔日本名僧傳〕 希世 諱靈彥、號村庵、南禪寺僧、詩之達者也、八歲時初作五言詩、

七歲時參內、賦詩云、不意來天上、揮毫賦野詩、座中皆曰、預賦之、村又言下賦曰、山

詩ノ達者

亦朝來有愁否、須臾變作白頭翁、

〔本朝名僧傳〕 希世 諱靈彥、號村庵、南禪寺僧、詩之達者也、八歲時初作詩五言、

靈彥侍者 字希世、號村庵、有村庵集、

〔蕉窓夜話〕 村庵靈彥 南禪聽松開山、

〔延寶傳燈錄〕 三十三 東山聽松院希世靈彥禪師、別稱村菴、生于鳳城中、童穉英奇、

師善住菴斯文宣公、嗣天 臨濟宗 境致 右京兆源滿元細川氏、養以爲子、年甫八歲、源丞相義持、携朝後小

松上皇、有旨賦詩、師擲管輅成、落句曰、不意青雲上、揮毫賦野詩、上皇歎賞、十七

落髮、從惟肖江西、後創聽松院、不應諸方之請、嘗題富士山曰、富士峰高宇宙間、崔

嵬豈獨冠東關、唯應白日青天好、雪裏看山不識山、題天橋立曰、碧海中央六里松、天橋

勝境是仙蹤、夜深人待龍燈出、月落文殊堂裏鐘、師長享三年逝、壽八十六、賜諡慧鑑明

照禪師、有遺藁、

〔續扶桑禪林僧寶傳〕 二 村菴希世彥禪師傳

禪師諱靈彥、字希世、村菴其自號也、未詳何許人、生有異徵、穎脫不群、總管府細川悅道公見其穎異、鞠而爲子、六歲依南禪善住菴斯文禪師爲弟子、文清拙和尚嗣法孫也、一

長享二年六月二十六日

二六二

見甚器之、授以經書、過目即能背誦、如素所習、不煩再閱、且有淵才雅思、落筆自然成章、又工於詩、逞逞越人意表、雙桂肖禪師目其語句甚推許、八歲相國顯山公愛其才、攜謁光孝上皇于便殿、敕賦詩、立就、上皇悅賜法饌、及長習禪要、每與斯文室中徵詰箇事、靡所不至、文以爲再來云、繼依續翠江西禪師、益增智證、文滅、彥嘗作罷參頌、有踏斷艸鞵耳、元來不出門之語、應永間、彥二十五歲悅道沒、竭資以修冥福、嘉吉元年江西蒞龍阜、擢爲座元、不應、嘗燕居阿蘭若、寂時春秋八十六、長享二年也、門徒奉全身、窆于寶鑑塔側、敕諡曰慧鑑明照禪師、有文集若干卷、

性敬ノ贊

贊曰、彥以父事斯文、以大父事寶鑑、視澄清拙爲會大父、尋常制行峻絕、年踰八旬不肯應世、蓋亦當時僧中龍也、奈自少以詩文鳴而道弗顯、昔寶峰祥和尚、見景淳藏主所作山居詩、諭之曰、此詩不滅灌谿、恐世以伎取子、而道不信於人、今以彥觀之、果然、惜哉、

〔聽松岩栖兩院開祖以來略傳記〕

一聽松院

山城州五山之上大平興國南禪々寺塔頭、

當院由緒者、大鑑禪師創建瑞松菴後、到第四世明照禪師、享德二癸酉歲、購雲興菴之舊地、又引接善住菴之境内、而改稱聽松院、大鑑塔院即古瑞松菴也、所再建也、依之明照禪師以來號聽松院者也、

一岩栖院

山城州五山之上大平興國南禪々寺塔頭、

當院由緒者、細川滿元侯與慧鑑明照禪師、初時被約於父子之緣、既禪師之行狀出、于螟靈（命）有子、螺贏負旂者也、滿元侯於洛東洛西、才阻一水而被設於兩私第、延會於博學多智之宗匠、時々以聞於法要而爲常、自泊垂老、信心益篤矣、於茲東西之私第俱付禪師、改之稱岩栖院、禪師會兼領斯兩刹、會集於四海之雲納、應接無碍、專事化益、應永三十四年滿元侯病革、以十月十六日遽然就木、禪師燒香、號曰岩栖院殿悅道歡公大禪定門、禪師感恩之淚、徒漲溟波、且夕薈火親勤之、前悅道所付師丹陽之田、屬之於本菴善住菴、飯十六員僧、每日專修冥資、可謂孝於孝也篤矣、師後繼師席、住本菴善住菴、斯菴大鑑始祖之道場也、堂宇未全、故購雲興菴之廢地、俱合善住菴廣地、而欲再建大鑑塔院、于時享德二歲癸酉也、即改善住菴、稱聽松院、禪師所再建也、聽松之二字、則在悅道洛西之私第日、自扁號聽松、禪師使悅道之恩謝悠久而莫相忘之一揆也、是故禪師以來東西之岩栖者爲聽松之末院、○下略

滿元東西ノ私第ニ學僧ヲ會シテ法要ヲ聞クス
東西ノ私第ニ付
ス

〔系圖纂要〕

六十五 清和源氏十四 細川

滿元

長享二年六月二十六日

二六三

滿元ノ猶子

〔靈元〕猶子、字希世、大鑑禪師附弟、南禪寺中聽松菴四世、長享二年六月二十六日、惠鑑明照禪師

〔本邦禪林諸師別稱〕 村菴 希世靈彥 南、聽松、

〔東海瑤華集〕七 希世字銘

龍阜彥少年、自幼嗜吟、五字七字、衝口而發、肆筆而書、大有驚人之語、聽松公一見奇之、撫愛甚至、繇此其名達于相府、（是利義持）及至太上皇洞宮、皆召見之、面有所試、嗟異以遣一日、名動天下、不亦偉哉、聽松命予製之字、乃取老坡識此希世彥之句、以希世授焉、吁以恆兒視之、希世寔希世之才也、進學不已、則佗日所成就、豈啻今日希世而已哉、訓以銘文、銘曰、

異才之士、世希逢之、一鄉一國、其目有差、天下所仰、百世所推、甚无僅有、其人曰誰、竺支日域、傳燈諸師、才則天稟、學在自治、成於勤有、廢於荒嬉、居燕望越、邈天之涯、膏車秣馬、六轡如絲、維以不怠、至可指期、繇我望祖、燕越不翅、才已英敏、力學以資、中道不盡、孰曰遠而、吁汝希世、々々多岐、一鄉一國、朱草靈芝、或无或有、何憂喜爲、堂々烈祖、慧命攸支、譬之優鉢、千載一時、闔彼細柳、霸棘猶兒、希世々々、思茲在茲、克圖大者、聽予祝規、○村菴稿所收希世字銘、コノ下ニ「少林惟得得若拜書」ノ八字アリ、

長享二年六月二十六日

二六四

得嚴滿元ノ命ニ依リ靈彦ノ字ヲ制ス
希世彥ノ出典

字銘

同門清啓

岩栖院ノ側ニ一宇ヲ創メ鶴鳴ト扁ス
得嚴龍派ニ學ヲ受ク
龍派ノ評
出世ノ心ナシ

滿元丹波七百貫ノ在所

〔臥雲日件錄拔尤〕 寶德元年八月十日、（元、下同之）建仁清啓首座來、問其師承、則曰、大鑑嗣、大翁諱正淳、住聖福寺而止矣、伯源（源其嗣也）、啓乃伯源嗣、而於俗系則姪也、又問其一門、靈彥侍者、師承則曰宣斯文之嗣也、斯文淨妙前住而止矣、蓋天境眞子、而大鑑の孫也、

〔臥雲日件錄拔尤〕 文安三年十二月十四日、東山聽松軒主彥侍者、持張即之所書劉夢得贈看花君子詩橫軸兩幅、每幅十四字、來見惠曰、典厩出此、以爲某謁贊云々、彥侍者、童年敏捷、受岩栖院殿知遇、於東山岩栖側、創一字、扁鶴鳴、今號聽松、附以莊產、其意深矣、爾來性智（細川持之）・弘源兩院殿禮遇无怠、特今典厩能承先志、待之彌厚、其學源則出於双桂・續翠兩師、可尚也、予記、今年六月廿五日、靈泉翁座上、偶然相逢、翁謂予曰、此公无出世心可恨、予曰、近時皆躁進、獨能謙遜不出、尤協予意、翁一唉耳、翁已往矣、排闥以責公者誰耶、

二十一日、○中 略建仁龍統侍者傳聽松彥侍者和偈來、披而見之、深密有味、時清啓首座同來、亦出和偈、活動出奇、異日一新大鑑叢規者、必此二人也、

〔蔭涼軒日錄〕 長享三年六月九日、天快晴、○中 略聽松翁諱曰彥、有謂大鑿禪師彥也、又七歲參内、扇子贊引筆篇々成之、岩栖院殿以其異人爲養子、丹州七百貫之在所付屬

長享二年六月二十六日

二六五

平僧ナレド
モ會合ノ席
ニハ南禪寺
前住ノ上ニ
座ス

之、于今知行也、嫌出官、終身侍者一級耳、雖爲平僧、於會合席、居南禪前住之上、天下諸尊宿、入其門受指南也、去年六月廿六日、八十五歲遷化、來廿六日、小祥忌之故、相督禪師號訴訟有之云々、

〔村菴稿〕

中 次韵鼓侍者春日偶作

火災ニ遇ヒ
藏書數千卷
ヲ失フ

永享癸丑春正月、吾祖翁善住精舍火、予爪牛廬延及、所藏書數千卷、焚蕩無遺、可歎也、歸臥鶴鳴山、々静晝永、左右無圖籍供目、寂寥度日而已、鼓子最好學、與予同研席十載餘、茲春以事留龍阜不從、頃寄詩數篇來、有心於起予者歟、然而予自遇火恐後、茫洋若有所失、手不把卷、口不吟詩、故雖有佳作、不暇和答、客曰、惜乎子見事遲、夫成壞有時、循環無常、又安能知今日之壞、則它日之成也哉、彼精舍復々可指期而待也、客去、予喜而不寐、鼓勇作氣、賦詩至累篇不勸、筆以答鼓云、
閑居養拙更何妨、吾愛翠微深處房、紅藥初移兼蝶到、青松肯種共人長、〔其力〕 聰明具葉旁行字、日永團蒲繆篆香、門外履痕君不見、雀羅零落一春強、
除却讀書君莫妨、來尋白石舊山房、妙從萬卷破時得、味到三餘足處長、蹤跡泥塗龜曳

但馬ノ寓居
ニ在リ往事
ヲ追懷シテ
詩ヲ賦ス

尾、聲名瓦缶麝藏香、今春聞說杏園裏、光燭燒空二丈強、

火事焚巢勞役妨、漸開戶牖似蜂房、村圍合抱丘山重、茆杞打頭風雨長、春入燒痕多山色、烟薰灰燼作檀香、兒孫勿墜先傳迹、力引千鈞一髮強、

〔翰林五鳳集〕

二十

秋部

〔文明十二年〕

庚子重九、予寓居但之一村寺、無詩酒之可賞、無黃花之可采、

風雨凄然、寂殆不可堪也、往日龍山盛事、紛然于懷、宛爾于目、而不克靡憾、因作是詩、

曩會龍山醉帽斜、可憐流落客天涯、重陽不是重陽否、無酒無詩無菊花、 村庵

去歲庚子重九、予作詩、發黃花有无之歎、今茲辛丑、疎懶衰墮、不記重九、不賞黃

花、午睡到晚而覺、澹然無一事、苟非安貧守靜者、則殆生愁耶、旁有童、誦予前詩、

而督和、因用其韵、記卽事、云爾、

煨芋烟凝山舍斜、杜門懶睡送殘涯、重陽閑却籬邊菊、不問无花耶有花、 同

〔村菴稿〕

上

新居移花

玉應軒新成而諸公來賀、癸未二月十二日也、

小築成時春未深、旋移桃李待新陰、坐中常有此佳客、不負栽花今日心、

〔實隆公記〕

明應四年八月十四日、甲子、天晴、先妣月忌、元修首座來臨、○中 元修雜

玉應軒落成

長享二年六月二十六日

二六八

景三ノ難句
ニ和ス
弟子靈穩

談云、故希世尊宿連來會、口號十五六句之時、故橫川句、北有小堯舜云々、爲麻韵、人々稱難對之由、希世被對、南無大勒迦云々、有興、又穩藏主ト云弟子アリ、道號ヲ於船ト付ラル、船ヨリモ穩ナリト云義也、有興、

〔鹿苑日録〕

五十
居諸集

慶長十七年四月五日、齋了赴于東福月溪和尚蒲室講席矣、南禪歸

雲院梅心和尚物語曰、村庵四歲之時、蒙召詣闕、即席賦詩、不意春雲心〔書〕、揮毫賦野詩、

又山有微雪、賦詩曰、山亦朝來有愁否、須臾變作白翁云々、〔撰後カ〕

〔秃尾長柄帚〕

書聽松讀經進文集挿入逸詞支、

聽松希世、嘗過續翠江西翁之日、持此卷卷六、來、繙此篇、書黃子思詩集後、讀至鹹酸之外、指之曰、

蓋有逸邪、詞不足旨不通、如之何、翁熟視曰、公言是也、然古人之文儻有如此者、既鏤

于梓難解矣、翁沒之後、聽松闕皇朝文鑒、值此篇、果有逸詞八十字、遂書以挿入、於斯

予一日詣聽松、話以此支、予聞而驚焉、烏乎俾翁覽之、拊手必曰、希世文章具眼也、

〔江湖風月集抄〕

一 日本デモ靈彦侍者ハ下炬拈香ヲメサレズ、頌ナンドモ鼠骨ニハ

ツクラレザルト也、○上
下略

〔翰林葫蘆文集〕

九 北野神君詩跋

經進文集ヲ
讀ミテ逸詞
ヲ挿入ス

下炬拈香ヲ
行ハズ頌モ
粗忽ニハ作
ラズ

每歲年初北
野社ニ詣シ
詩ヲ作リテ
之ニ賽ス
四十三首ア
リ

渡唐天神畫
像ニ贊ス

北野神君、登徑塢、叩龍淵〔師範〕、其圖像、盛行于世、村菴師自蚤歲傾心於此神、每歲々初、詣于彼祠、作詩賽之、或復爲人所請而贊之、并幾首哉、其徒某集而謄之於像之三面、使予誌焉、予讀而數之、則四十三首也、一々可感於神矣、抑應仁丁亥〔元年〕、京師喋血、諸山離群、杳而不相聞、於是村菴適入京、橫川寓此、予亦徜徉於二老之間、正月二十五日、村菴訪川翁於寓所、因以賦千里飛梅爲題、各賦一篇、村菴曰、海西遙想帝京梅、待得東風開未開、一段冤心天所感、和根千里爲飛來、凡賦飛梅者、唯言其花、不言其根、此詩記實、筆力拔地、一時絕唱也、四十三首之中闕之、予今書此以足之、觀之則如侍左右聽其幽論、不覺鞠躬而已矣、

〔村菴稿〕

上

贊北野神君參無準畫像并序〔師範〕

近世所繪北野神君像、多作幅巾野服、裏梅一枝之狀、云是神君、嘗入徑山圓照室、而受金縷伽梨時、物色如此、將爲有據焉乎、予拜瞻此像、合十起敬、第不知裏裡春色、乃自此携將而往耶、或自彼帶取而返耶、舉之問如何、神君亦必軒渠而已、姑寫此詩、以爲筆供養云、

徑山菴直老浮圖、北塾詩窮一腐儒、爲問當時參扣夜、傳金欄外有梅無、

長享二年六月二十六日

二六九

義政ノ紅葉
ノ和歌ニ和
シテ詩ヲ賦
ス

靈彦ト細川
氏以後細
川氏歷代同
繪畫像ニ贊
ス

細川勝元靈
彦ヲ夢ム
靈彦春日社
ニ詣ツ

長享二年六月二十六日

〔村菴稿〕 中 奉同大相公詠紅葉和歌

竊承大人相公、遊北苑、題咏池上紅葉、以賜左右、於是諸公奉獻和章、各踏舞以相賀、寔太平盛夏也、(廣全)功叔督余和不已、然而余退老久矣、且以所聽於村野之間、寫成一篇、奉呈功叔座右、伏乞電覽、

爲愛丹楓映碧池、畫船移宴醉歸遲、吾君有樂人皆樂、又數花時與雪時、

〔村菴稿〕 下 細川六侯同繪畫像贊

賴元一、賴元一、滿元一、持元一、持元一、勝元一

天潢疏派、細川同源、賴春奮起、匪躬國存、(賴)享子賴之、武州、整頓乾坤、賴元京兆、爲弟、京兆平反、有二賢子、兄滿元、弟彦德、長嫡滿元、悅道、手天下砥、四海名喧、功伴造化、蒼生霑恩、持元、性智、持之、弘源、亦三弟昆、持賢、二持相繼、勝元厥孫、龍安、孫又生子、政元、共彼朝暉、故家喬木、固蒂深根、侯伯世襲、封爵惟尊、松蘿亮隔、桃李狄門、有觀盛事、無愧贊言、

〔村菴稿〕 上 (文明元年) 己丑春、(細川勝元) 京兆公夢、與余同詣春日社、余手持一紙、公意以爲詩篇也、

如此夢者再矣、余時自丹到京、公以夢告、余詣社、乃薦以一香、而爲公原夢云、感應相期吉夢祥、神前來獻一銖香、太平狂虜全亡後、春日社頭春日長、

細川政國每
春靈彦ヲ招
キテ觀花ノ
詩ヲ賦セシ
ム
前後三十七
年ニ及ブ
寛正四年靈
彦政國第二
花ヲ見ル

政國ニ詩ヲ
贈ル

眞藥等連全
悟景恣等同
席ス

景杲當時ヲ
追懷ス

二七〇

〔補菴京華外集〕 上 (細川政國) 題聽松村菴師於典厩私第見花詩后

典厩源公、每春迎村菴師於私宅見花、必留一詩、自享德壬申至長享戊申、三十七年如一日耳、前十七首爲先芳門君作、后二十首源公命而賦之、吁師今則亡、此詩與此花、有甘棠遺愛哉、景三志、

〔村菴稿〕 上 (寬正四年) 癸未三月七日、與(等德)竺雲老人、過典厩源公第、看花而各賦詩、

看花明日奉呈典厩

爲花昨日許相過、無雨無風詩興多、今夜夢驚五更後、有風有雨奈花何、

〔蔭涼軒日錄〕 寬正四年三月七日、(中)就于細河典厩第有齋、(煎點)以云華館看花之題、共

等持院竺雲・崇壽院竹香・性智院同文・瑞松希聖・靈翰侍者・醫師法眼各作詩評之、齋後小宴、賦和漢數句、可謂希世之勝遊也、

文明十八年二月廿五日、不參、天快晴、(中)午後等持寺來、(景杲)等持語曰、曾於典厩第有

看花會、諸老皆各賦一詩、時雲澤老漢亦其一數也、聽松希聖老師詩云、彌天道價大禪佛、四海威名老主翁、知是此花期此會、春陰無雨又無風、近來之佳作也、

長享二年六月二十六日

二七一

長享二年六月二十六日

二七二

政國靈彦ノ
觀花ノ詩ヲ
屏風ニ張ル

〔村菴稿〕

中

(文明十二年)
庚子二月十四日、

典厩屋前櫻花盛開、予雖赴其招、然以甚雨、不得近遊花下、遙自牆外髣髴望見之耳、頗以為恨矣、公以予每春題花下之詩、盡張于燕座之

一年一首ノ
詩三十首ニ
及ブ

屏上、雖云一年得一首、既及三十首、噫其三十年、只吾一吟頃也、

年々歲々賞花時、寫上屏風多少詩、今日興來天有雨、隔牆窺見半邊枝、

(文明十三年)
典厩公第看花、予老懶不作詩、公見索不輟、春已過後、作此奉呈、

八十三翁春過後、猶償詩債寄君家、幾回得句又忘句、不是花時似有花、

(文明十四年)
壬寅春、賦庭櫻奉呈典厩政國公、々時在攝州、○政國、攝津ニ出陣スルコト、文明十四年三月八日ノ條ニ見ユ、

庭櫻如雪々如絲、洛下名花獨有之、賢主南征相憶否、春風三月慣看時、

(細川成之)
題讚州所畫普化像

源讚州工畫、獨貌遮漢者何、豈有龍眠晚悔畫馬之意邪、

逢人徒振鐸、展手覓分文、汝技止於此、驢鳴不待聞、

(細川政元)
題聰明戲筆山水、六言、

戲筆窓間灑墨、山川林木模糊、天下終歸手裡、早觀輿地成圖、

老懶詩ヲ作
ラス

攝津在陣ノ
政國ニ觀花
ノ詩ヲ贈ル

細川成之ノ
畫キシ普化
像ニ題ス

政元ノ戲筆
山水ニ題ス

交友
内藤景龐居士
コト相識殆
三十年

〔村菴稿〕

上

内藤景龐居士、與余相識殆三十年矣、近喪長男、德叟作詩悼之、余不

覺涕零、和二章以助其哀云、

私情舐犢本憐爺、况有賢名稱克家、生死已雖觀夢幻、傍僧聞訃淚橫斜、
終始存心故人子、尋常見面府君家、幕中猶記最年少、試馬春風街柳斜、

(房朝)
題上杉建幢公舊扇

微雪紛々灑竹寒、鬼灯半白半猶丹、使君置酒園池上、應是當時醉後看、

過常光院堯孝看晚櫻

舊日陪遊司馬第、今朝赴會老堯家、年々有約長如此、兩處同看早晚花、

(細川政國)
紀元盛家看花戲寄福若童

躑躅款冬開映籬、薔薇雖晚紫藤垂、此遊喜有看花福、若不相禁折一枝、

(兼良)
奉和一條相公題瀟湘夜雨圖

公退晝閑黃閣春、題詩看畫想騷人、如何耐得瀟湘夜、雨打紅篷獨宿身、

題久我殿釣月亭

池亭便是釣魚舟、乘月臨流好下鈎、因懷當時清渭水、白頭照影一竿籬、

久我氏ノ釣
月亭ニ題ス

一條兼良ノ
詩ニ和韻ス

紀元盛第ノ
看花ノ詩

常光院堯孝
ヲ訪フ

上杉房朝ノ
舊扇ニ題ス

長享二年六月二十六日

二七三

齋藤妙椿ノ
詩ニ次韻ス

飛鳥井氏ノ
求メニヨリ
畫ニ題ス

畠山政長ノ
求メニヨリ
詩ヲ賦ス

鹽冶政通ノ
求メニヨリ
其齋ニ題ス

伊勢貞宗ノ
畫ニ題ス

武田氏ノ求
メニヨリ維
摩像ニ贊ス

津野之高ノ
詩ニ和韻ス

長享二年六月二十六日

二七四

次韵濃州齋藤善慧所作

江東人物每論思、美譽如君那可涯、賦得梅花心似鏡、也知標格過於詩、

題梅竹禽畫 飛鳥井殿求、二首、

寒梅的皜白分明、瀟灑相依竹數莖、上有珍禽不飛去、料知意味一般清、

畫竹 畠山尾張殿求、

琅玕翠色兩三竿、勁節崢嶸保歲寒、爲有青霄化龍勢、夜來風雨問平安、

〔村菴稿〕

中 牧歸齋

牧歸乃佐々木鹽冶政通所以名其齋也、需詩於予、弗辭而題云、

牧來烟草暗陂塘、盡日陰々倚綠楊、家在前村歸路熟、數聲橫笛送斜陽、

題勢州畫馬圖

龍入天閑凡馬空、太平春日一嘶風、絡頭不受青絲鞵、意在華山芳草中、

長者維摩詰像、武田大綠居士求讚、

法門默處乃藏雷、自在神通亦善哉、三萬二千師子座、盡容方丈室中來、

和津野藤之高詩 土州人、

風流最羨少年遊、君尙青春我素掩、雨露恩袍曾待燕、江湖使節不驚鷗、王書購學雲生紙、白集携歸月滿舟、爲問頃斯詩好否、別來幾字寫蠅頭、

霜松軒詩并序

長祿元年丁丑十月十日、杉原伊賀守賢盛、有獻一枝梅於大相府君、(義改)々々吟賞之餘、偶得一句、以告賢盛、々々應口賡載以呈、君意甚嘉之、輒染台翰、併書一聯、以賜賢盛、々々自謂、優寵蔑加、弗勝感戴、遂裝潢什襲、以爲傳家之寶、文明八年丙申秋冬之交、賢屢見過余村庵、每與公面談及前吏、能知公之當時光華者至矣、就而求所寓之軒名與詩、乃於公賡載之句、而取霜松之語、以爲扁焉、未有詩者、以余老嬾也、然尙督之不已、九年丁酉十一月十一日、逆賊空積年巢穴而退、京師初得收復矣、朝野遐邇、驩聲四合、皆言今日得太平、寔天幸耳、於是余竊觀、國家騷亂以來、衣冠文武之士、其於出處去就之迹、大有可耻者、若夫終始守大節而不變者、猶如霜雪互寒之中不改千年青松之色、豈不概然於心哉、(概カ)蓋自長祿丁丑至今年丁酉、凡二十有一歲也、其詩曰、

天若無霜不可以遂松性、地若無松不可以凌霜威、寧令桓々質、與百卉具腓、聞公獻梅相

長享二年六月二十六日

二七五

霜松軒ノ詩

杉原賢盛屢
靈彦ヲ訪フ
軒名ト詩ヲ
求ム
應仁ノ亂平
定

長享二年六月二十六日

二七六

府賜佳製、賡以霜松台筆揮、君臣千載會如是、忠孝一生心不非、暮年置軒將佚老、凜然素節殆庶幾、相府君調鼎手從袖間出、未及說命論其實、獨於冷蘊中見天地心、十月占得春第一、蒼髯叟老賢盛、有句一日傳萬口、出岳十里聽風聲、不啻時來初驗歲寒操、鬚鬆花是屬太平、

〔村菴稿〕 下 海峯號說

清貞秀ノ求
メニ應ジ海
峯ノ道號ヲ
與フ

泉守清貞秀、法名常通、就予需道號、乃相命以海峯、且諗曰、乾坤之内、宇宙之間、其江河之多、雖言支分派別、混々不已、悉通于海、而海能收之不泄、是故其大叵量、亦於海之中央、一峯巍然聳立、未凌絕頂之先、塊視衆山之小、高哉、不知爲幾踰繕那、所謂海便是昆盧海、峯豈非妙高峯、未審、孰是善財、孰非德雲、儻待別峯相見、猶是隔海在、常通海峯、據其要津、剖判是非、所貴青雲有公論、至祝々々、

華谷號說

内藤宗繁ノ
求メニ應ジ
華谷ノ道號
ヲ與フ

内藤河内公、法名宗繁、就予見索道號、乃今以華谷之號命之、且復以華谷之義告之、吾金僊氏、二千年前、於靈山會上、拈一枝金波羅夷華、普示大衆、當時百萬人天、悉皆罔措、唯金色頭陀一人、破顏微笑、蓋其迅機警轉、頓領會拈華之旨、譬如彼空谷、一聲相

八木宗頼ノ
詩ニ次韻ス

呼則一聲相應、希有希有、河内公、奉君主有忠節、在官無餘暇、(一字脱カ)然於吾禪道佛法有信心、在俗而不俗、此號曰華曰谷、併案微笑相應之時節者矣、至祝々々、

〔翰林五鳳集〕

十二 次八木但州太守春首韵 村菴

雪苦霜辛吟裡賞、詩如梅蘂吐孤芳、唉將在事比凡楚、存亦不存亡不亡、

〔村菴稿〕

上 花前小集、呈江西老人、(龍派)受聖福命、

籬落殘梅挽客留、主人雖老極風流、微官未足鑿霜髯、暫折花枝插滿頭、

次江西見寄韻

龍派ノ詩ニ
次韻ス

坐待河清自有時、驚看鏡裏鬢絲垂、春風吹長無名艸、一樹冬青猶舊枝、

〔續翠詩集〕

上 次韻希世自伊廬歸二首

海上祭神還洛涯、橫汾昔日樂何加、新詩知有百靈助、都下喧聞萬口誇、

同

伊陽神境海之涯、天下江山蔑目加、他日松軒陪綺席、茲遊奇絕聽雄誇、

〔雪巢集〕

乾 (永享九年) 丁巳作

龍派靈彦ノ
大神宮參詣
ヨリ歸ルノ
詩ニ次韻ス

長享二年六月二十六日

二七七

長享二年六月二十六日

二七八

靈彦幼時每夜龍派下聯句ヲ行フ
靈彦ト龍睽龍睽ソノ祖榮西ノ建仁寺興禪護國院ノ塔ヲ拜スルノ詩ニ和韻シソ懐ヲ述ブ

白頭禿句夜煎茶、二十餘年赴壑地、點檢樽前無此老、歲云暮矣有梅花、時江翁隱退、予幼時與江翁每夜坐聯句、

〔村菴稿〕 上 和九淵睽上人拜護國祖塔之韵兼述所懷云、

喬木今誰上冢過、天荒地老石碑磨、英靈知有子孫念、後世嶄然頭角多、少年光景白駒過、家學羨君能講磨、有叔不癡今老矣、高唐聞道善歌多、

〔九淵詩稿〕 〔後カ〕 陸橋殘梅

憶共阿兄吟老梅、昔年花爲好詩開、溪橋再渡彩雲散、無限清香委綠苔、

龍睽龍惺等ト花ヲ觀ル

右江西入滅之後、南禪希世侍者〔龍惺〕瑞巖和尚、同遊十餘輩、赴毘沙門谷賞花、余此時有感于懷、頗憶江翁昔日之春遊、竟有此作、阿兄言江翁也、好詩指江翁舊詩也、委綠苔言江翁成泉下之土也、古人詩云、橋思再渡時、

〔村菴稿〕 中 和答蕭菴正宗見寄并序

去歲夏六月十日、公自江東所賜手書、同冬十月朔、到予京師柳巷寓所、剝封次、方遡數既經一百一十日矣、雖是尋常行程、所不過數日、而丘戈〔兵カ〕以來、道路相梗、當如此耳、然來書一落手後、所恨無復回便、既作報書、相投翻古紙中、有待久矣、今夏一夕、倉卒有告東使者、重檢尋而得之、乃付與于行人去也、蓋是公之書後、所示

靈彦ト龍統龍統近江ヨリ京都ノ靈彦ニ書狀ヲ送ル

靈彦等書中ノ詩ニ和答ス

二詩、予嘗和之、意若未足、更牽率〔景也〕蒞蘭坡〔龍惺〕・澤天隱〔景三〕・三橫川、以其朋舊故、索而和之、兒子翰〔景也〕、亦以辱知故、責而和之、和皆成矣、卷而其束之者也、恐是行路、看作至寶、一啖而已、予所和詩云、

故舊音書托便鴻、問吾安否亂離中、眼昏却恨耳聾未、一十二時松有風、袖中四六江湖疏、囊底三千風月詩、爲我相携來幾度、天涯料得少人知、

次正宗見寄詩韻、二首、

故人蕭庵正宗、避亂居江東、彼此離索、不相見者、于今十年矣、頃聳、嬰脚疾不獲起、甚勞屈伸、然絕微僻遠之地、無習盧術者、故輦而來京師、就善鑿而治焉、其初入京師之日、未赴館舍、先來而見余、々亦往見之、余又袖苦茗過其舍、明日寄詩見謝、輒依其韻、以述鄙臆云、

亂世賓朋別十年、升平有兆亦欣然、黃河幾度清還濁、白月由來缺又圓、極目暮雲千嶂外、經心流水五橋邊、喜君今自遠方至、慰渴令人如飲泉、○詩一首略ス、

〔禿尾長柄帚〕 閑居聯句

〔吳書〕蕭庵所賜聯句詩五十韻、造語使吏皆有妙處、然予耄矣、或有所記、又有所不記也、故不

相見ザルコト十年龍統脚疾ヲ治セントタメ入京ス

靈彦老耄ノ故ヲ以テ龍

長享二年六月二十六日

二七九

統ノ聯句詩
ニ評點ヲ加
ヘズシテ返
ス

靈彦ト周鳳
周鳳靈彦ヲ
訪フ
談得巖龍派
等ノコトニ
及ブ
靈彦ニ香合
ヲ贈ル

靈彦百川學
海ヲ藏ス

少年ノ時得
巖ニ壽星說
ヲ聞ク

長享二年六月二十六日

二八〇

加評點、卷而還之、此放翁之於坡詩、所以不敢受石湖之命也、呵々、甲辰仲夏、村菴拜、時

〔臥雲日件錄拔尤〕

文安三年十二月廿二日、

訪彦侍者、雪中獨坐、門庭蕭然、

聞予來、不具威儀、布衣勃窣出迎、予直入寢室、細話及双桂・江西舊吏、相共潛然、及去、予袖出香合與之曰、予遷鹿苑之日、細川備元管領公所惠也、物貴出處、請珍焉、彦侍者一啖受之、相送之間、謂予曰、往年正月十七日、於双桂座上、勝樂聯句、今已二十二年也、予因憶、應永丙午歲、三十三偶謁双桂、致新歲賀、時江西以下諸老相會、留予陪座、彦侍者時乘筆書句、々兩聯之后、双桂翁、命予續而書之、蓋彦侍者偶病后、恐其勞倦也、今彦侍者謂此也、遂到栖眞而飯、及歸歡喜、

寶德元年九月十八日、周賢天英西堂、持百川學海兩册來見借、此書永享初、來自大明者也、或曰、此書全部未來、蓋三分之一也、不知實爾乎、彦侍者所藏、予住鹿苑院時、借一册來、爾後每々借一兩册看之、

三年四月廿四日、希世侍者來過、話次、及福祿壽之事、希世曰、吾少年聞惟肖說曰、宋眞宗時、王欽若勸封禪、故構諸異事、福祿壽其一也、後又聞、或說曰、此事見于夷堅志

周鳳靈彦ニ
壽星說ヲ作
ランコトヲ
請フ

靈彦周鳳ノ
等連ノ韻ニ
寄スル詩ニ
次韻ス

靈彦ト清播
清播ノ梅枝
ヲ贈ルヲ謝
ス

云々、又舉惟肖題細川備元岩栖院殿扇面壽星詩曰、老人星是太平祥、現則時清主壽昌、丹頂綠毛

千萬歲、比公猶是少年場、予亦舉太岳與周忠予先贊壽星之詩告之、凡壽星像、在々有之、大略

寫予先人所藏也、按應永十三年丙戌、先人居崇壽院、正月廿五日、足利義滿鹿苑院殿請諸老宿於北

山府第、各有多色寵、贈壽星像、乃賜先人之也、故以此爲詩題也、永享丙辰歲、八年寶山

再住相國時、足利義教普廣相公、要看評頌席、時六月二日也、以扇面壽星像爲頌題、普廣相公、

於此頌席始識予、蓋以季瓊藥西堂相告也、其後庚申歲、永享十二年予住相國、與同門一二輩相謀、

創小軒於輪藏東邊、扁之以壽星、蓋有來由也、告希世曰、爲予作壽星說、以令後來者知

有此事可也、希世一啖而已、

〔村菴稿〕

上

次鹿苑周鳳瑞谿見寄雲居等進雲之韻

二甘露作一門春、揖讓畫圖今又新、可喜叢林重複古、傳聞盛事懶閑人、

清播心田老人昨朝見惠梅一枝、今朝又添一枝、賦三絕句奉謝、

早晚梅花開遍時、春風寒暖兩般吹、寄來昨日還今日、知是南枝與北枝、
梨雲低壓擔夫肩、挿向燈檠紙帳邊、曾慣詩翁吟好句、吹香一夜攪孤眠、
繁枝早許寄山家、日々園林風雨斜、何似相酬美人贈、銅餅添水護梅花、

長享二年六月二十六日

二八一

長享二年六月二十六日

二八二

清播靈彦ノ
詩ニ和韻シ
答フ

老人每篇賜和、昨有嘉惠、今亦如之、不勝感荷、重用前韻、各答其意云、
竹間春落已多時、猶覺殘香夢裏吹、有約重尋夕何夕、黃昏月下舊橫枝、答紀前遊
美人換骨拍仙肩、定到羅浮小洞邊、月落參橫殘角曙、欲通幽夢不成眠、答述舊
珍重詩中老作家、吟餘折送數枝斜、夜來影轉孤燈壁、寫出華光落墨花、答書寄梅

〔村菴稿〕

中

嘉隱心田、善續翠老人、迨其戢化之後、屢有詩吊之、寫一篇示余、蓋知

靈彦清播ノ
龍派ヲ申フ
ノ詩ニ次韻
ス

余從老人遊之久、而一旦永訣、若失怙恃者、故相憐而助哀也、然一讀之而不自覺淚
承睫矣、烏乎、機動籟鳴、物之相感、自然如此而已、輒次其韻、作二詩、以述鄙臆
云爾、

兩翁聲譽蚤相親、一老今亡白堊新、海內皆知連壁友、年來卻作斷絃人、淚添第五橋邊
水、夢記貞元花下春、聞說詩情猶似昔、每吟月夕與風晨、

二十年來還還親、交情何比一朝新、吾儕不耻生衰世、相識猶欣得此人、餘論服膺揮塵
夕、曩遊回首聽鶯春、忍將存沒數前輩、落々星稀殘角晨、

〔雪巢集〕

乾

戊申作

和心田韻并敘

清播靈彦ヲ
訪フ
靈彦ノ詩ニ
和韻ス

聽雨叟一日訪余於鶴菴、乃延登竹間亭、四顧以誇臨眺之美、叟亦欣然忘去、凡談間及
聽松源公者十八九矣、明日叟和余言字詩韻、見寄一章、其引曰、敝舊抒懷亦徐墓之劍
也、吁昔客遊於源公之門者、未嘗不與余交、公亦卽世后、風雨互散、音問不接、然愈
親愈厚、不變情態者、冥鴻與叟二人而已、今叟此語、足泚彼就炎去涼之徒之額也、冥
鴻數奇不遇、蓬累而行、不知在何處、一彼一此、嗟嘆之不足、賦詩三章、以奉答叟之
見寄云、

清播靈彦ノ
扇ニ題ス

訪我鶴栖終日言、樂遊此地昔人園、請看多少手栽樹、猶帶當時雨露恩、
尙憶曾陪賓客言、青冥黃壤隔梁園、馬鄉多病逢秋雨、今日來過深謝恩、
冥々鴻遠與誰言、羽檄時危思綺園、好去風塵贈繳外、紫芝可采亦天恩、

〔心田詩藁〕

題希世扇

阿童休執鞭、隨意懶牛眠、舍此將何牧、長堤柳日前、

〔眞愚稿〕

次韻十二歲靈彦杜多扇面白梅雪松畫奉台命二首

水容玉爲骨、獨立避紅芳、除却林君復、無人愛淡粧、
稚松堪雪重、翠自白間濃、願使人々見、蘆襟一照空、

靈彦ト俊承
俊承義持ノ
命ニ依リ靈
彦ノ扇面詩
ニ次韻ス

長享二年六月二十六日

二八三

長享二年六月二十六日

二八四

靈彦ト景三
景三ノ詩會
ニ列ス

〔補菴京華集〕

文明七
年乙未

秋菊佳色

〔岩〕山栖來訪、蘭坡・天隱・益之・龜泉・春陽・景徐同來、崇山佳君執筆、〔常〕

野草姓劉秋已皆、東籬菊色與時乖、天遺一老祇林晚、不啻花佳人亦佳、

初冬遊村寺 會大昌院、岩栖遊頭、

林隈無處不敲扉、十月漫山霜葉飛、城寺人忙村寺靜、袈裟影帶暮鐘歸、

仙山樓館圖 蘭坡會仙館院、岩栖、益之等諸老在座、

海嶠雲開樓館橫、去天咫尺隔人生、僧中太白仙非謫、寺踏蓬萊頂上行、

〔雪樵獨唱集〕

○相國寺長
得院所藏

仙山樓館圖

岩栖與天隱・橫川、益之諸公過予仙館、

架空飛閣眼俱明、道是弱流三萬程、遙識群仙和月降、松風吹落玉簫聲、

〔補菴京華集〕

文明

有佳少年試筆

希世席上、徵字、癸巳

去歲逢春江國東、鷗寒鷺冷不曾融、宮花紅動日邊寺、已喜君詩有父風、

竹籬護笋 希世席上、舊、岩栖有竹間亭、

聞道竹間曾置亭、亂來煙雨幾凋零、一籬護笋今猶古、明日南風吹可青、

惠日東川旭侍者、從予游有年矣、居江則江、居洛則洛、來往只書一束耳、〔文明五年〕癸巳秋、告別回里、與殘暑椒裝于此、與好風來歸于彼、其勢不可挽也、徵予贈言、其可辭乎、

景三詩ヲ賦
シテ東福寺
ノ東川ヲ送
ル

景三靈彦ノ
詩會ニ列ス

靈彦和韻ス

蔭涼軒ノ詩
會

周全ノ養花
軒ノ詩會

靈彦ト景三

雪樵齋ニ題
ス

小詩一首、以餞行色云、

筆硯同窓歲半過、江東故國尚干戈、秋風一錫捨吾去、客舍長安落葉多、

岩栖希世和此詩、書此紙空處、題曰、和橫川老人詩、贈東川侍者、靈彦

老人與我互來過、不向胸中著甲戈、今日送君詩滿棗、明珠薏苡謗應多、

〔補菴京華集〕

文明七
年乙未

陳希夷睡圖

會蔭涼軒、希世遊頭、

五季興亡一枕風、閉門午睡落花紅、建龍賜館今堯舜、猶是華山春夢中、

〔補庵京華後集〕

文明

開窓宜月

會養花功叔之書、戊戌、村菴出題、

秋在月勝春在花、開窓相約是君家、牙籤三萬天如畫、雪盡螢乾小碧紗、

〔村菴稿〕

中

爲蘭坡題雪樵齋有序、

少室立雪之後、曹溪采樵以來、是雪是樵、互相光耀、蓋謂之一花五葉、至于黃梅、

而其衣法、能者得焉、自時厥後、吾宗大振起、兒孫遍寰宇、猗歟盛哉、蘭坡、以雪

樵目其室者、不翅拈出吾家舊公案、亦將有所矜式、必如百衲被、天寒歲晚、乃見其

効耳、〔藏〕蟬閣老人、四句妙偈、規祝所至不鄙、命予贊其末云、

雪中樵客欲歸家、白盡蓑衣山路斜、遙想經過嶺頭處、擔肩薪上插梅花、

〔雪巢集〕

乾

以下壬子作

長享二年六月二十六日

二八五

景龍ノ試筆
ニ和韻ス

景龍景三等
ト龍澤ヲ訪
フ

靈彦ト周麟

周麟靈彦ニ
香語ノ是正
ヲ求ム

靈彦ヲ夢ミ
香語ヲ示ス

夢ニ靈彦ト
語ル

靈彦ノ席上
ニ詩ヲ賦ス

長享二年六月二十六日

和蘭坡年少試筆之句、小葉、蘭坡、
二字作某人、

美人侍見畫簷梅、纔入新年第一開、從此百花春富貴、東風二十四番催、

〔默雲詩藁〕 初冬遊村寺 村菴・蘭坡・
橫川來、

孤村短日報初冬、適伴翁々喚瘦筇、吟興未闌斜照後、烏巾立盡寺樓鐘、

〔鹿苑日錄〕 一 等持寺日件 長享元年閏十一月十五日、○中 略 又往南禪、問聽松翁、夕坐迎、

予袖出寶篋院殿拈香語示之、因求是正、翁再三讀過曰、好々、又問、法語中有杜曲黃昏、
隣家春色一對、改黃昏爲昏黃、以對春色則如何、翁曰、如此法語、聞而便于耳則可也、
只黃昏爲好、

三年五月廿二日、○中 略 靈泉正宗和尚來賀、晤語移刻、因說及去月廿二日夢聽松老師之事、
予夢中以月窓大姉拈香之語、呈上聽松、々々從頭讀之、點頭謂予曰、我和此拈香語之
韻、卒爾舉之聽之、予傾耳、聽松所取之韻語尤妙也、不覺首肯矣、正宗嗟歎不置、

〔鹿苑日錄〕 四 日涉記五 明應八年六月十一日、○中 略 午後依枕而熟睡、夢見村庵老人、相語

而叮嚀、已覺而自思惟、于時安畫贊未成、故夢中意識有懷村庵者也、

〔翰林葫蘆詩集〕 一 千里飛梅 村庵席上

春風千里遠離家、從此飛香渡海涯、時宰忌公々不恨、聖朝棄物有梅花、

靈彦祥洵ノ
詩ニ次韻シ
ル 珠珍ニ贈

靈彦ト大叔
大叔ニ三皇
像ノ贊語ヲ
書送ル

大叔由蘆居
士ノ求メニ
應ジテ雪舟
原圖ノ三皇
贊語ヲ加フ

〔村菴稿〕 中 次月泉和尚韻寄玉浦首座 (詳洵) (珠珍)

去歲六月、前南禪月泉和尚、自勢州來京師、(尼利義教) 遇普廣丞相忌辰、而陞座說法畢、即日
爲靜香玉浦首座、自寫寶偈、賀其轉位、謝其問禪、是乃宗師激勵後學之深慈也、今
茲一日、玉浦以偈軸示予、且求著語于其末、昔吾禪居翁、(正慈) 有示足利象先居士法語、
玉浦乃象先五葉之孫也、然則予雖無似、與玉浦有故也、今之所求、豈可嘿止乎、僭
用尊韻、錄呈山詩一章、以述區々之所懷而已、

除書新被聖朝恩、直得叢林人物存、嘗識梧桐生有種、也驚芝草出無根、問禪舌覆大千
界、轉位身當第二門、豈記看花昔遊事、我今象在括囊坤、

〔蔗軒日錄〕 天 文明十六年五月十八、陰而晴、○中 略 聽松老師八十二、賜手書、三皇像

贊至、

廿四、晴、由蘆居士至、自寫三皇像、(等佛) 雲谷所畫也、 太迫其眞、妙哉、求予之贊語於其上、語乃村庵所
製也、

十一月廿日、快晴、○中 略 防州高橋法眼狀至、謝希世老師所作之三皇圖贊云、

〔村菴稿〕 下 題三皇畫像

長享二年六月二十六日

長享二年六月二十六日

二八八

伏義著莖是撰、神農藥草是嘗、及軒轅之紀鳳曆、整冠冕而垂衣裳、且夫大矣哉、方今於三十餘萬歲之後、有日出處天子御宇、而四彼三皇、是故山楚區々之志、在獻芹曝然、亦每仰望、以祝吾皇睿算無疆者也、

〔蕉軒日錄〕

地

文明十七年十月八日、晴、○中上主至、話及松山詩、且云、正宗和

尚于此軸、謁于聽松老師、々々喜而令正宗誦松山序、老師極口稱好云々、予云、此老四十年顧怜、今稱好之意、猶相顧引之所致、非實然、

十八年正月十八、○中略、整上主狀至、

因知京寺無支、○中諸老宿無恙、聽松八十四、爾康強、

〔竹居清事〕

書

呈聽松翁

十二日、與才上司語、以所諭、渠能頒受如命、未知達否而已、今日又寄尺簡督之、告以老人歡喜之心、諸付面白、

與才藏主

前十二日、候謁縷陳、辱領首肯、聽松老人歡喜無他、不知嘗已能上達之也否、今晨踏五橋上霜者、頗似風流、只是彷彿如夢裡之蝶也耳、呵呵、諸留面布、未間保愛、不備、

〔蔭涼軒日錄〕

文明十七年十月廿四日、○中略、遂往聽松、々々主翁希聖老禪對面、茶話

大叔ノ松山詩軸ノ序ヲ稱讚ス

八十四歳ナホ康強ニ惠風靈彦ニ書ヲ贈ル

集證ト往時ヲ語ル

周鳳靈彦ノ政國第ノ信濃櫻ノ詩ニ次韻ス

靈彦ノ宗湛筆江山畫ノ贊

花鳥畫ノ贊

幼時鳳翔景繕等ト交ル景繕鳳翔ノ死ヲ悼ミテ

一刻、蓋伸去十四辭請之謝也、希聖曰、前年亂中、在城中頻々會合、我一生之榮也、愚

曰、近年諸老之會合、一年一度亦無之、希聖曰、前日往大雲祖堂見之、歎嗟甚起云々、

延德二年三月九日、不參、天陰不雨、○中往典廐私第、○中往下之屋形、絲櫻・信州櫻同

樣盛開、皆坐花下倒茶盃、○中景徐翁語曰、北禪師曾題此信濃櫻、詩云、主人襟宇浩無

涯、四海九州春一家、庭下白櫻千樹雪、洛陽坐看信陽花、蓋見次村庵詩韻也、

三年十月廿四日、不參、天降雨、○中晚來九峯北房來、有商人賣畫軸、自牧翁所筆之江

山畫也、二老與予三人寫其讚詩返軸、詩云、○中江勢遙分南北山、杖藜極目夕陽灣、誰

家突兀好樓閣、沙鳥風帆几案間、村庵靈彦印、

四年三月十八日、不參、天快晴、早旦赴宣阿宅煎點、○中座上有六曲屏、貼花鳥繪、各

贊詩在其上、皆當世之名緇也、予一覽以粗記之、恐有差謬者、占得梅花竹外枝、一双翠

羽立多時、橫斜疎影暗香處、若是詩人合有詩、村庵靈彦印、○以下周鏡・景菴・景三・龍統・龍澤ノ詩アリ、コレヲ略ス、

〔雪巢集〕

乾

庚戌作

予幼見鳳翔與性天游、鳳翔亡、于今一紀矣、庚戌秋八月二十八日、其忌日也、性天賦詩、追思往昔、予讀此淚洒行間、胸臆若堆阜然、猶如將隕之葉俟微風、蓋易爲相

長享二年六月二十六日

二八九

詩ヲ賦ス

長享二年六月二十六日

二九〇

靈彦和韻ス

感矣、乃歎曰、今世之人、朝則握手指天日出肺肝、夕則反眼落陷窞而下石者皆是、豈幽明相隔、日月相積、而又思其人哉、吁、性天何人也、於鳳翔死生、如一它日、吾見其面、而今吾見其心也、重陽後數日、籬菊猶在、挹露香嚼霜葉、把公詩重吟、々之而不置、疊和五篇、所謂同聲相應者歟、

曩叱少小我何知、往事回思今日悲、一笛山陽壯夫淚、雍門休撫鳳鳴枝、世上交情泉下知、十年誰似一朝悲、平生肝膽鑄成劍、掛在徐君墓樹枝、黃壤青冥兩不知、追遊無路向風悲、也疑海上騎鯨去、收拾珊瑚撐月枝、卯狨恩情獨自知、一回相憶一回悲、美人何意種松柏、籬落風霜長醜枝、近來海內絕蒼知、西日東坡只自悲、身似長天獨飛鳥、投林雨葉又風枝、

(永享四年) 壬子作

眞要ノ試筆
ニ次韻ス

(眞要) 文叔以試筆之什、寄示諸友、因援例見索予和、輒次韻奉答之、

春到園林自媚晴、黃鸝紫燕若爲情、閑僧獨坐心如水、聽得人家啾語聲、
蒼邊始暖柳邊晴、寫出無私造物情、却訝人心今日別、風搖松竹亦詩聲、

長祿四年庚辰之作

悟溪ノ爲メ
ニ扇面ニ題
ス

扇面 爲悟溪
年少

周興ヲ招ク

〔村菴稿〕

上 招賀州彦龍上人 (周興)

長生殿裏夜同床、私語願如鴛與鴦、世事浮雲皆變態、野禽相並舊池塘、

誰倒滄浪萬里流、洗吾九十日春愁、美人莫信長年少、雪裏高山亦白頭、

(善玉) 藍英近喪皇考、同社明洲、詩以弔之、余亦次其韻云、

哀詞千字墨痕斑、老幼俱嗟閭巷間、有子最賢吾舊識、人言眉目似翁顏、

(啓聞) 次韻春和試筆

少年瀟洒復能詩、一片襟懷冰雪知、爲問梅邊今夜月、移將疎影入誰池、

次韻月浦試筆

上元前後故宜晴、行樂觀燈傾一城、聞說高居枕馳道、夜深人語雜車聲、

(慈昌) 九華自春之伊易、既夏而未歸、作此呂東、情見于辭、

何處樓臺人倚欄、含風夏簾翠琅玕、去時殘雪春寒裏、留得梅花別後看、

(守濤) 次韻利涉冰水道中作

行李應怜破衲僧、崎嶇險路縋垂藤、半生只慣作詩苦、吟盡梅花一夜冰、

長享二年六月二十六日

二九一

守濤ノ詩ニ
次韻ス

慈昌ニ詩ヲ
贈ル

月浦ノ試筆
ニ次韻ス

啓聞ノ試筆
ニ次韻ス

善玉ノ父ヲ
弔ヘルヲ弔
フ

長享二年六月二十六日

二九二

集樹ノ試筆
ニ次韻ス

次韵龜阜叔試筆

西嵐可愛夕陽時、寫上屏風無郭熙、一自君題新句後、丹旨雖好不如詩、

周禧ノ試筆
ニ次韻ス

次韵龜阜祝江試筆

村巷無灯過上元、御遊不識九重尊、西家花是東家影、月有二天今夕恩、

宗儀靈彦ヲ
訪フ

〔村菴稿〕

中 掃雪開逕

〔宗儀〕
〔靈彦〕
來訪

幽栖地僻接村家、掃雪相通一徑斜、爲待款門人柱駕、夜寒護竹護梅花、

梵桂ノ詩ニ
和韻ス

奉和鹿苑維馨和尚見賀相公遊山詩韵

寺迎台旃謝恩深、人親出遊歡溢襟、秋後楓林紅葉宴、太平春日賞花心、

等實ノ詩ニ
和韻ス

奉和萬松崇山仙伯春初佳什、予雖耄矣、補菴所督、不獲嘿止、只供一莞而已、

傳得少年詩句來、教人數日老懷開、滿門不是無桃李、爭似百花頭上梅、

宗悟ノ詩ニ
和韻ス

和竹圃悟年少試筆奉呈蔭凉老子之座右

老子寬容春日和、少年美句曉鶯歌、故將我有通家好、喜見階庭蘭玉多、

永實ノ詩ニ
和韻ス

奉和南禪慶年老師見示之韵

聞說師來山亦重、臨風足憫我心悠、雲生泰嶽終成雨、水赴滄溟不擇流、憶自兒童曾識

景趣ノ詩ニ
次韻シテ靈
岩寺ノ舊趾
ヲ憶ブ

〔翰林五鳳集〕

三十一

次韵琴叔過靈岩舊趾有感 村菴

路向館娃宮畔尋、春風廢趾易傷心、有花都厄斧斤手、野竹蕭疎地未深、

〔村菴稿〕

上 予戊午正月、作詩最多、自元日至人日、有二十餘篇、今年己未正月、人

永享十年正
月中ノ作詩
二十餘篇ニ
及ブ

日上元過了、其餘無幾、詩纔有一二篇、何其衰甚、友松年少、寄似試筆之作、見督

拙和、予呻吟累日、不成一句、然拒命不可、涉筆寫三篇、自覺出勉強、而無發越、

不滿友松之一笑也、

少年蚤起趁晨鴉、探遍園林到日斜、漸老春寒禁不得、隔簾偷眼小梨花、
歸鶴林昏只有鴉、雪殘籬落玉橫斜、風回傳得幽鶯語、春在上園姚魏花、
夜遊列炬散林鴉、拘束誰堪暮景斜、短髮自羞紗帽上、欲隨年少挿時花、

〔村菴稿〕

中 應制芳野山

芳野山櫻雲又霞、幾人看去幾人誇、聖朝今少遠遊者、上苑春風無限花、

龍田河

應制龍田河

勅命ヲ奉ジ
詠進ノ詩

應制芳野山

長享二年六月二十六日

二九三

長亨二年六月二十六日

二九四

天橋立

湛々龍河上有楓、依稀濯錦蜀江中、此流若接御溝水、霜葉浮來幾片紅、
應制天橋立

碧海中央六里松、天橋勝絕是靈蹤、夜深人待龍燈出、月落文殊堂裡鐘、
○靈彦、勅命ヲ奉ジテ詩ヲ詠進スルコト、文
明十二年八月十
四日ノ條ニ見ユ、

〔百人一首〕 應制天橋立

希世

天橋立ノ詩
景三ノ百人
ラ一首ニ列セ
ル

碧海中央六里松、天橋勝境是仙蹤、夜深人待龍燈出、月落文殊堂裏鐘、

〔花上集〕 臥鐘

村菴

契選ノ花上
集ノ選ニ入
ル

昔時高掛景陽宮、似聽華鯨吼半空、樓閣幾年風雨破、五更聲鎖綠苔中、
詩燈

曹劉摸索暗中來、李杜獨吹光燄回、灞雪驢邊都滅却、不傳妙處冷於灰、

杜鵑花

杜鵑花發杜鵑春、啼血聲中染得新、落日千層紅一色、不催歸去却留人、

長春花

呼作長春豈浪誇、駐顏恰似服丹砂、梅蘭蓮菊四時異、不斷有花唯此花、
○靈彦ノ詩、コノ他
六首アレドモ略ス、

〔牧野文書〕

京○東

和答

小倉將監居士寄

萬年橫川老人詩韵并序

曩在東山之日、率桂林藏主、過四橋而西行數百步、逢一丈夫、傾然美鬚髯、與桂林如舊
(龜山)
識、款話移晷、余不知何人、一揖以退矣、歸途質之於桂林、則曰、護吾祖永源之法、
(元光)
飯山數百衲子、有文有武、詩禪惟嗜者也、於是乃知爲其小倉將監居士也、
(中)
老人、避亂寓江鄉、
(中)
今茲秋、作詩以寄老人、々々出其詩、以需贅韵末、
(中)
聞說仁風化舊鄉、育人和氣似春陽、幕中多暇延僧話、落月鐘殘夜殿床、
(印文天應)

文明五年癸巳臘

默雲龍澤

印

身在江湖鷗鷺鄉、臥龍英氣比南陽、扁舟我欲隨公去、茶竈相兼載筆床、
(印文希世有)

村菴靈彦

印

〔村菴稿〕

下 丹州野村道相廬鑄鐘化疏有序

野村道相廬、無鐘舊矣、應永己丑、法華寺僧祐賢、力募衆緣、而始鑄焉、於是廬有鐘、

長亨二年六月二十六日

二九五

小倉實澄ノ
景三ニ寄ス
ル詩ニ和韻
ス

丹波野村道
相廬鑄鐘化

長享二年六月二十六日

二九六

嘉吉辛酉^(元年)、草賊群聚、擊之破裂、唐又無鐘、其後莫肯重鑄焉、寬正庚辰^(元年)、弟子慶祐喟然而嘆曰、野村封內、凡若千里、雨暘時若、民不饑寒、不疾病者、固吾神之所以庇貺也、豈其可使唐無鐘矣哉、矧亦吾師之志也、輒持短疏、徧告里中父老、若男若女、所冀樂施、成此勝緣、其詞曰、

神宇佛宮、倘無鐘則爲缺典、洪爐大冶、克俾器而盡圓成、寔繇融液之范樞、而獲春容之韻響、盛哉道相三所靈社、鎮此野村一方勝區、凡物宜有而未在焉、吾願不可以窮盡矣、方徵工乎臯氏、要扇囊籥以號風、乃假力於鯨魚、待敵蒲牢而吼月、或有錢流地而泉布、豈無銅崇朝而山堆、^{李白}鐘文、財施兼法施是同、耳聳與心聳奚異、除衆生五百億劫罪業、音聲無邊、警閣浮一十二時晨昏、功德莫大、當知此方教體、摠在今日成功、半夜客船、遙想姑蘇楓橋之泊、九重帝闕、近連長樂花外之天、蟄戶震驚、福田利益、

〔補菴京華別集〕

^(承意) 題梅雲所藏山水圖軸

士之以釣鳴於世者多矣、有呂望于渭濱、有子陵于桐廬、是善鳴者也、而論者或以釣周釣漢而議之、則不在魚、而在名焉耳、吾方外之徒、江湖之上、包笠往來、各相謂曰、某漁父子也、某漁兄弟也、鷗朋鷺侶、與之結社、款乃之歌、一聲兩聲、不在魚不在名、而假

承意所藏ノ山水圖ニ詩ヲ題ス

宗湛筆ニ題ス

春雲ノ求メニ依リ畫軸ニ詩ヲ題ス

竹齋讀書圖ニ詩ヲ題ス

之鳴者也、梅雲友、一日袖小軸來、求係一辭、展而視之、山長水遠、一葉漁舟、舉網絕叫、分魚之市、綠楊成陰、不可見也、岩栖村庵翁、題詩於上、詩畫一意、可想也、嗚呼村菴、學海有源、禪河無底、空鉤々玄、意釣々詩、魚耶名耶、假耶非假耶、梅雲宜自得之可也、漁家傲一首、依村菴韻、塞梅雲請云、江雲漠々日銜山、家在柳陰舟葦間、贏得南宮缺圖像、煙蓑雨笠一漁灣、

〔村菴稿〕

^(上) 題宗湛所畫小景

垂柳陰々蔭野塘、不知山影向斜陽、老牛眠穩章如織、避網遊魚水面涼、

〔村菴稿〕

^(中) 題畫軸

溪居門外兩三松、山寺樓前千萬峰、更欲過橋看瀑布、我無扶老一枝筇、

蘭坡老人之徒熙公上人、字曰春雲、寄此畫軸、而求詩於予、輒題其上、卷而還之、文明十年戊戌之秋、書于丹陽之村庵、

〔竹齋讀書圖〕

○東京國立博物館所藏

面水好山皆可廬、唯多竹處稱吾居、簷門非是厭佳客、日課猶愁欠讀書、

村菴靈彥

印

〔雪舟等楊山寺圖模本〕

○東京國立博物館所藏

長享二年六月二十六日

二九七

長享二年六月二十六日

二九八

等楊筆山寺
圖二題ス

(雙)
印

寺如兜率久知名、境入畫圖傳帝京、吾恨昏花遮老眼、山容樹色(印及楊刻希世)不分明、

右題楊知寶所畫山寺圖 村庵靈彥 時年八十有一

印

印

(印及靈彥)

(繪畫)
「寛文十二年五月廿一日木下右衛門大夫殿懸物也、」

〔山水圖〕

○平瀨龜之
助氏舊藏

(雙)
印

屋頭松偃綠蘿懸、屋外湖晴水學天、雪後橫斜梅處々、風前撩亂柳年々、從林隙出合尖塔、向筆間停嶮尾舩、每使山僮頻掃地、客如不到主人眠、

文明乙巳藤月 村菴靈彥漫題 昨年八十有三

印

○圖ハ楊月筆
ト傳ヘラル、

〔山水圖〕

(雙)
山村日夜常飛雪、埋沒前峰失大牙、銀屑鋪成樵子逕、玉樓湧出野人家、飢鳥似噪依枯樹、凍蝶如知趁落花、憐汝掩窓忍寒苦、一爐柴火一甌茶、

村庵靈彥 (印及希世)

印

〔傳天章周文筆山水圖〕

○溝口宗
博氏所藏

(雙)
野梅疎竹間幽松、欲暮江村烟外鐘、於有釣舩人未去、不知月已上前峰、

靈彦 世希 筆 山水圖

傳天章
周文筆

贊

東京都 溝口宗博氏所藏

原寸
横 〇〇・三三
縦 〇〇・九〇八
米

野梅疎竹 間出松欹暮
江村烟外 鐘磬有釣松
人未去不知月已上前
峰

村養靈彦



〔山水圖〕

○平瀨龜之助氏舊藏

屋頭松偃綠蘿懸、屋外湖晴水學天、雪後橫斜梅處々、風前撩亂柳年々、從林隙出合尖塔、向筆間停嚼尾舩、每使山僮頻掃地、客如不到主人眠、

文明乙巳蔭月 村庵靈彥漫題 吃年八十有三

印

○圖ハ楊月筆ト傳ヘラル、

〔山水圖〕

山村日夜常飛雪、埋沒前峰失大牙、銀屑鋪成樵子逕、玉樓湧出野人家、飢鳥似噪依枯樹、凍蝶如知趁落花、憐汝掩窓忍寒苦、一爐柴火一甌茶、

村庵靈彥

(印文、希世)

印

〔傳天章周文筆山水圖〕

○溝口宗博氏所藏

野梅疎竹間幽松、欲暮江村烟外鐘、於有釣舩人未去、不知月已上前峰、

原寸
縱 〇・九〇八 米
横 〇・三二四



氏所藏

婦人圖ニ題ス

〔本光國師日記〕

十一 慶長十八年

一 同日、朽河州飛脚來、十二月廿五日之狀來、則返書來、

一 女凭凡見書、几上筆墨硯團扇有之、以手支頤圖、○周鳳以下五人ノ贊アリ、略ス、

誰家賢婦勝男兒、就案讀書間暇□、坐久落花春畫永、烏雲彈耳手支頤、

村庵靈彦

右ハ古畫也、

芳春院殿右ヲ繪圖ノ被求贊、

〔墨蹟之寫〕

六元和二丙辰
○筑前崇福寺所藏

肩ノ印、印字不見、但雲ナント云印ノヤウニアリタ、

一 遙指烟蘿行路難、蹇驢暫

欲憩吟鞍、是誰亭館春湖

上、柳影梅香水拍欄、

村庵靈彦

希世有

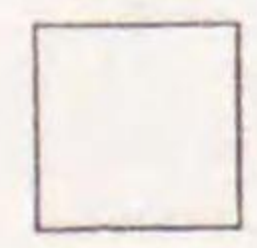
長享二年六月二十六日

村庵靈彦

印

(印文隆刻「希世」)

畫印



○上ノ爐印ノ中ニ「拙宗」ノ二字アリ、

長享二年六月二十六日

三〇〇

一 桮梅開遍柳吹晴、春在吟驢

色畫山寺梅アリ、

緩、行、小釣一虹溪上道、墮

馬上ノ人アリ、

紅殘雪踰鶯聲、

萬里叟清啓

啓清

右四幅與九郎左衛門方來候、但

右ノ二贊一軸ニアリ、二三家アリ、

屏風ノ押物也、○前ニ雪舟筆二幅、

〔墨蹟之寫〕

十六 元和五己未
○筑前崇福寺所藏

一 平湖萬頃水如天、荷葉荷花

占半邊、行欲上樓山更好、香

風留在柳陰船、

右爲

安世東少年題安世、是仙館坡翁之當壁也、予、滅ス、

其所期望不淺矣、至祝々々、

村菴靈彦

此山水之贊、村庵正筆ト見ヘタリ、三月廿八日、於六地藏（小幡歌）小遠州見申候、小野宗左衛

門方來、

〔雪樵獨唱集〕

四序

書村庵桃花詩後

北山去洛僅里許、

故丞相之仁祠也、

予承乏於此者、殆乎三年、祠之北有鷲峰、桂樹成叢、

飄月天香、掩册來而襲衣、

竊詠淮南招隱篇、頗挹其風、不與人交接、偶有客、袖小轡出

示而曰、聽松村庵翁、嘗有於文臺所題之詩、鷲峰孫春岳外史、得之寶之、以謂、歷年觸

物則散爲胡蝶、杜陵飛鳥之字、不可得而知、故裝緝爲軸、請作題辭、其所欲也、言未

卒、展置几案之前、蓋其所物色者、一枝野桃、而村庵題七字於其側、王會稽六角竹扇、

非可倫擬、寔至寶也、欲卷還之、然而桃之於桂也、花中仙友、而桂之於春岳也、故家遺

愛所存也、作序不應其求、則澗愧之林慚之、凡古之士、不得時而將與草木俱腐者、假以

寓其愛者不鮮矣、如楚之太夫愛蘭、（周禮）晉之徵士愛菊、（周禮）濂溪之蓮、（林逋）孤山之梅、是其最也、獨

桃未有之、迄范成大之退居石湖、々之澣別開小塢、題曰范村、環植皆桃也、碧而開者如

霞、紅而落者如雨、日羅琴檜於其間、與衆樂々焉、桃之爲桃者、於是乎顯矣、後有僧重

素、入白□山、就桃花岩、造桃花庵、且刻謫仙桃花流水之詩乎石、示其地非秦花之名、

爲之增重、况夫吾徒、因桃得旨、（興）與乎勤園梨、（志勤）盛乎華維那与芙蓉師兄、由是言之、非翅

野桃ノ圖ニ
題詩ス

長享二年六月二十六日

三〇一

長享二年六月二十六日

三〇二

花宜隱逸、抑復吾宗所系也、苟欲從夏於斯文、則如村庵之言、一春不窺園、而讀書孜孜、有時看花至于狂吟掩卷、則天地吾桃也、萬物吾詩也、離詩無禪、離禪無詩、謂之萬法皈一、且道、一皈何處、試問諸桃花、必發咲而已矣、

〔村菴稿〕下 鳳翔之西遊集序

翱之老人、有西州之行、予折指數日、而待其歸、既歸而後一夕、襲其西遊集而見示、予獲之、以爲不虛所待焉、窓下挑燈、讀而至夜參半、不覺銅盞裏膏乾矣、所恨此集、以保壽惟參翁有求、不肯爲予留之、猶如爲他人被奪、吾櫝中連城之璞、何其不見恕哉、(寬正六年)乙酉人日、村庵某書、

〔雪巢集〕

坤 題正宗藏主祕密藏記後

祕密藏者何、所以名藏書之室也、藏書者何、所以藏先靈源所蓄內外之典也、祕密者何、所以寶舊物而保護不失也、作記者何、所以遺後世而告經始之所由也、予謂、賢哉正宗、爲人之後者、以正宗之志爲志、則一夔足矣、俗諺有之曰、不肖子弟有三變、夕爲蠹魚、鬻書而食、是三變之一也、吁今之世、滔々皆是、豈亦有賢如正宗者乎、於是不惟賀祕密藏之有成、而賀靈源之有後、且志諸記末、寬正六年乙酉六月五、村菴某書、

惠鳳ノ西遊集ニ序ス

龍統ノ祕密藏記ノ後ニ題ス

龍統ノ詩卷ノ後ニ書ス

應仁亂以來日課ノ詩二百餘篇

龍惺ノ蟬閣外藁ニ序ス

詩ヲ以テ四海ニ鳴ル者三龍惺ノ龍惺

書正宗詩卷後

自丁亥兵起以來、予驚懼不平、如茅塞於心、而不能得一詩、甚所愧也、每讀老杜詩集、必有掩卷而歎老矣、子美(杜思)自長安遮安史之亂、去客于秦・蜀・夔・梓之間、身將不暇於奔走、何其處在多篇題哉、今偶得蕭庵正宗所示詩二百餘篇、謂是丁亥亂來日課所作也、於是重爲發予歎云、

蟬閣外藁序

詩者、非吾緇家者徒學而所爲焉、譬如時鳥鳴於春、候蟲吟於秋、謂之出於自然者也、出於自然者必妙、故吾徒之言詩者必工、繇是、唐・宋以降、吾徒之詩盛行、然近來吾徒之詩、無耆者何也、蓋吾有詩無詩、固係乎人也、自予先而所不得見之人、置而不論、予嘗及見前輩、以詩鳴于四海者、龍阜有蕉雪焉、蕉雪在、則吾謂吾徒之有詩矣、蕉雪既亡、則吾徒之無詩矣、然時玉府有續翠焉、又有能詩之聲、不減於蕉雪在之日也、吾謂吾徒之有詩矣、后數年而續翠又歿、則吾謂、吾徒之無詩矣、然時有蟬閣(龍惺)、詩名藉甚、又不減續翠之時也、吾謂吾徒之有詩矣、今而蟬閣亦不存、則吾謂吾徒之真無詩矣、又時無有相繼、而不減於蟬閣之存者、予所以喟焉深嘆也、然於是時、正宗統公、偶攜蟬閣詩藁來、

長享二年六月二十六日

三〇三

長享二年六月二十六日

三〇四

示予曰、吾翁平生禪餘所作、逞々爲人被放去、今攜成編者、僅十二而已、子徒翁而遊舊矣、請序其端、予獲其藁、熟讀玩味、且憫無詩之嘆者居多、因謂曰、蕉雪之詩、俊邁奇逸、如駿馬之□于平川也、續翠之詩、優瞻雅健、如彩鳳之舞于丹霄也、獨蟬閣之詩、簡而不淺□新而不恠僻、能踐續翠兄之規摹、兼挹蕉雪翁之芳潤、而其渾成氣象、如灌□之瓊、疏越之琴、可以用於清廟之上、宜乎、相繼於二老之后、以吾詩之有無、而係□一人之存亡也、其孰曰不然矣、四六數十篇、附于詩藁中、予以爲、其四六之工、亦猶其詩之工也、所謂出自然者、是同焉耳、予鯁生雖不文、姑塞正宗之請、々敢僭序之、

〔雪樵獨唱集〕

三疏
○大東急記念文庫所藏

老坡翁、一生遊戲乎四六駢儷之文、其行于叢林者、於今四十餘年矣、每一篇成、躬自手之而過夸於予、大似不避暗投按劍之盼焉、今既編集、成一鉅帙、俾予著語品評、予以爲、坡翁一生駢儷之文、猶如紀渚子養鬪鷄然、其蚤年之文、所謂方虛憍而恃恣也、中年之文、所謂猶疾視而盛恣也、其暮年之文、所謂望之似木鷄矣、其德全矣、異鷄無敢應者也、然則於駢儷之文、雖一世詞場之士、亦不奈他坡翁何、

文明壬寅重陽後一日、書于聽松之村庵、靈彥、時年滿八十歲、

景菴靈彥
自作ノ四六
文ヲ示ス

靈彥景菴ノ
四六文集ノ
跋ス

〔松蔭吟稿〕

文溪典藏、吾龍阜之舊風流也、從幼有志於斯文、先是十又餘載、居和之

片岡日、諸彥以詩招、々不來矣、今在山陰之遐邦、則屏迹甚遠、而睽離益年舊矣、吁乎星河一天而已、茲春、偶寄詩藁一卷、見徵評、只熟讀玩味、手不釋之矣、予嘗避應仁之亂、羊狂于江左、凡鷗傍鷺側、漁歌樵唱之觸耳目者、綴爲俚語一百餘篇、呈村菴惠鑑師座右、師書篇尾曰、在今世而存古風者、是予華袞之榮也、竊謂、典藏詩藁、頗有古風者耶、蓋村菴平素、一語不濫發、々則如精金美玉、有定價然矣、予竊所言、不知宜當否、高適爲少陵所推、老蘇爲歐陽所許、典藏幸爲老松源（崇德）的裔、飄安三轉語、著得一工夫、則予所言之當不當、豈弗顯然哉、不見道、參詩猶如參禪矣、僭批若干篇、副以一絕、抒眷々云、

落花洛水春風暮、積雪山陰夜月時、視物想人々想我、同聲相感莫如詩、

〔村菴稿〕

下 書琴叔詩卷后

近來時世、有詩人之名者甚夥矣、然而得古作者之風者、未之有也、每益有識之歎而已矣、而今琴叔、自携詩卷來、徵予評點、凡一百有餘篇、句々清新、口之不置、章々俊逸、手之不釋、是謂在今世而存古風者、時有顧况必曰、老夫前言戲之爾、然琴叔所

長享二年六月二十六日

三〇五

景趣詩稿ヲ
送リテ靈彥
ニ評點ヲ求
ム
靈彥景趣ノ
詩卷ニ跋ス

靈彥ノ跋

長亨二年六月二十六日

三〇六

微不已、故僭評者若干篇、卷而還之、文明壬寅(十四年)臘月立春、村庵八十歲漫書、

〔補菴京華別集〕文明十五年癸卯 琴叔趣首座詩藁序

景三ノ序
靈彦一々ニ
加フ

蒼菴林間、有一箇吟佛、龍山風流琴叔是也、琴叔與予相識久矣、一日携其詩卷來、求作
敘冠其首、予以不文辭之、不允、披覽數過、皆近作也、岩栖村菴師、一一加批點著批語、
吁盡美矣、而題其后曰、句々清新、章々俊逸、是謂在今世而存古風者、吁又盡善也、○中略
遂把筆書曰、清新俊逸、在今而存古者、岩栖云、予亦云、歲舍癸卯臘月日、小補景三、

章江景趣兩
人ノ詩卷ノ
後ニ題ス

〔村菴稿〕下 題梅陽琴叔二公詩卷尾

故人梅陽・琴叔二公、頃避亂、居于湖陰里巷、偶相接違徠多暇日、便相與撰題、各賦詩
一百篇、二公之詩、合二百篇、梅陽敘于編端、具道所由矣、琴叔持來京師、命余品評、
余相爲謂曰、二公乃蘭之孫蕙之子也、餘芳襲人者夥矣、余雖老而願其見教耳、豈復有求
於余乎、然余自得此詩、熟讀玩味日久、頗知其規模意態之有家法矣、蓋二人同賦一題、
而二詩共佳、則如其優劣何、譬如一雙白璧、並美而無瑕、則如其輕重何、是余品評所難
矣、二公其圖之、姑倩管城子、一任渠點頭、余在側拱手而已、

顏氏家訓ノ
後ニ書ス

書顏氏家訓後

教子篇中ヨ
リ抜キテ弟
子ヲ教誨ス

予讀顏氏家訓、至其教子篇、掩卷嘆曰、凡爲人之父、而憂其子不肖者、古今一也、釋氏
子人之子、以教以育、然則我實其父也、予社中、有青衿數輩、不好學逆於教誨、溫飽外
絕無所業、恐其爲善日遠、爲惡日稔、而使彼猶鮑之香、傍襲人矣、乃撮教子篇中一二警
策、書之座右、汝克日三省、猶賢於佩韋絃、爾若讀此語、無慚悔之心、非人也、豈不愼
哉、永亨九年八月十七日、彥志、

宗誕ノ五十
詩批點ノ後
ニ書ス

書賀慶甫五十詩批點後

老村昔在弱歲、而屢倍侍于蕉雪翁席次、預聞齒牙餘論、於今爲萬幸而已、每言年及衰
暮、若有以文辭爲請者、難爲酬對、看宋景濂贈梵顛上人序、其意毫髮無差矣、今慶甫以
五十詩、投示老村、以求評點、其所請者、雖非文辭、耄矣之後、如難爲何、它日有暇、
則可看潛溪序、敢不載序中一語、爲令慶甫自看而點頭也、五十清詩、擲地金聲、且應其
命、評點如右、

芳心詩篇ノ
末ニ書ス
山名政豐ノ
第三子

書傳芳心詩篇末山名金吾
第三子

芳心緇郎者、當世候門貴公子、而一時風流美少年也、興來作詩投予、見索評點、凡絕句
一十篇、篇々玉振金聲、皆是老成、似非少作、於今年纔十四五、而猶如此、寧爲學力之

長亨二年六月二十六日

三〇七

長享二年六月二十六日

三〇八

所成歟、將爲天分之所致歟、聊於金玉篇中、強加愚點者數處、姑寓管見、更俟輿論而已、(長享元年)丁未臘月念五、村庵靈彥漫書、

〔補菴京華集〕(內題註記)余號補菴、集名京華、皆岩栖希世所命也、文明四年壬辰、余自江州入

京、樵雲虛寢、居焉、寓筆硯於永德者數月、京華集始於此云、

〔補庵東遊續集〕(後頭註記)岩栖村菴翁句頭并批點、

景三ノ補菴ノ號ヲ與ヘ
其文集ヲ京
華ト名ク
景三ノ東遊
續集ニ句讀
及ビ批點ヲ
加フ

〔補庵京華集新集〕(東京前田育德會所藏)

横川和尚相國入寺法語、焚香一覽、如讀古德語錄、靈彥生衰世而不耻者、在看此法語

耳、

(文明十七年)乙巳閏三月晦

靈彥拜
(正文希世)

印

予袖此卷、求村菴師添削、村庵掩卷、絕嘆莫措、便筆於卷首爲賜、華袞之榮、莫大焉、

書爲語錄序云、

小補景三
(印文横川)

印

〔三體詩絕句鈔〕(聽松和尚抄)

一蓬左文庫所藏

愚按、歸雲院岱仰之、又雲抄トモアル也、或抄云雜抄、(中略)觀中モ唐ニノ詳三體詩ソ、惟肖、

景三ノ相國
寺入寺法語
ヲ添削シコ
レヲ絶歎ス

三體詩絕句
抄

靈彦世撰景三横製相國寺入寺法語題辭

補庵京華集
新集所收

東京都 前田育德會所藏

原本袋綴本 半葉 縱〇・二八一
横〇・二一七

横川和尚相國入寺法語、焚香一覽、如讀古德語錄、靈彥生衰世而不耻者、在看此法語

耳、
(文明十七年)
乙巳閏三月晦

靈彥拜
(印)

景三ノ相國
寺入法語
ヲ添削シコ
レヲ絶歎ス

予袖此卷、求村菴師添削、村庵掩卷、絶嘆莫措、便筆於卷首爲賜、華袞之榮、莫大焉、

書爲語錄序云、

〔三體詩絶句鈔〕聽松和尚抄

小補景三
(印)

愚按、歸雲院岱仰之、又雲抄トモアル也、或抄云雜抄、(中略)觀中モ唐ニノ詳三體詩ノ、惟肖、

抄 三體詩絶句

靈彥世撰景三川製相國寺入寺法語題辭

補庵京華集
新集所收

東京都 前田育徳會所藏

原本袋綴本 半葉 縦〇・二八一 横〇・二一七

後川 和尚相國入寺法語焚香一
覽如後左法語錄 靈彥生
衰世而不耻者在看此法語
耳

乙巳閏三月晦

靈彥拜

予袖此卷求



村菴師添削村庵掩卷絶嘆莫措

便筆於卷首爲賜華袞之榮

莫大焉書爲法語序云

小補景三



後川 和当在國入寺法語焚香一
覽如後左法語錄 靈彦生
衰世而不耻者在看此法語
耳

乙巳閏三月晦

靈彦拜



予袖此卷求

村菴師添削村庵掩卷絕嘆云揚

便筆一書卷首為賜華表之榮

美大書書為法錄序云

山初景三



恕侍者、(清遠)心田ハ觀中ニ聞カル、也、心田ノ義ハ多分觀中ノ義也、(周臣)慈氏抄ハ義堂和尚〇村ハ村庵也、村本ハ老師ノ三體詩也、

〔三體詩絕句鈔〕

聽松和尚抄

蓬左文庫所藏

諸願成就日切畢矣、(功之)維時春王正月晦日、於聽松精舍、鳳作瓘與(隱)諸兒輩圍爐、春寒去却來、而積雪未消也、有花稍遲鶯難玉之難也矣、

村云、建仁澤天隱、(宗元)聞沉南江之講、馬頭初見之詩、一日天隱(通)通村翁、茶話之次、翁問南江之所講、天隱說其儀、翁聞其儀歎美之、(義)○脇本十九郎氏所藏本ヲ以テ校ス、

〔蒲室集抄〕

足利學校遺蹟圖書館所藏

世講蒲疏者、在前輩而亦爲少焉、(南無寺(宗香))龍山香梅屋、屢求講之、予固辭曰、予才之短、學之淺、識之不明、何以塞其責哉、梅請而不止、且曰、師平居有云、吾聞諸(龍院)蕭庵、蕭聞諸村菴、村聞(龍院)續翠之說、唯四篇也、嘗一辯識鼎味、村之謂乎、然則師之所講、諸老之義也、將何辭耶、予輒應其命、(享德三年)始于甲戌五月廿八日、(康正三年)終于丙子二月廿四日、凡三十五回也、學徒前後、或有所聞、或有所不聞、々而全者、梅屋之外、唯河清尔、(龍院)戩子執筆侍側、印章亦粗剽聞、可笑、

靈彦蒲室疏ノ講ヲ龍派ヨリ聞ク

長享二年六月二十六日

三〇九

長享二年六月二十六日

永正十三年二月（壽桂）幻雲志、

予寫幻師之本者、始（二年）于天文癸巳正月十一日、終（二年）于同八月三日、

牧雲子壽藏

「予寫牧雲老師攸秘之本者、起筆于天文（十六年）丁未小春廿有二日、終（天文十七年）于戊申春

王正十三日、

春簀子長洪

「○東福寺靈雲院本、
コノ奥書アリ、

幻師 蒲葉跋

村菴師、應蕭菴翁之求、以講蒲室疏、始（四年）于寬正癸未閏六月十四日、終（元年）于文正丙戌十一月初四日、蓋歷歲者四、其壁全矣、村師每講之、蕭翁隨而抄之、皆以倭字、細釋其義、不必整齊、世所謂聞書是也、翁晚年改倭爲漢、郁乎文哉、因名蒲芽、其義深矣、後以其所親書之倭抄、付小友頑雲公、々珍重爲寶、非啻重其書、又重其筆跡也、而以予與公忘年、密許乙覽、予卒謄寫之、秘于篋底、然考故吏者、訛則正焉、疎則補焉、且非私所增損、而據村師蒲芽也、予竊呼爲蒲葉矣、異日蒲芽行世則蒲葉雖不足取、庶幾倭字易讀、而便于童蒙矣、予曾抽毫于蕭翁蒲席、而不能抄萬一焉、今攤此抄、頗泚額尔、ハ、コノ蒲葉跋ノ部分
跋蒲葉ニ依
リテ校ス、

靈彦龍統ノ
求メニ應ジ
蒲室疏ヲ講
ズ
龍統和字ヲ
以テ抄録ス
靈彦漢文ニ
改メ蒲芽ト
名附ク

蒲芽傳寫本

〔蒲芽〕

○東福寺靈雲院所藏

吾小友河清、借予所鈔謄寫

蕭菴志圃

幻雲子借河清所謄筆云、

明應七年三月初六

吾老漢忠文溪、以一華和尚奥書之本、見寫之、

天正丁亥林鐘十六、遂朱點之功於丹之後州田邊一如禪院、

右以吾師師村庵翁幽論、故借一如主盟英甫和尚本、命金阿彌謄寫焉、

天正丁亥蜡月吉辰 天然子靈三判印

右以聽松玄圃奥書本謄寫焉、

慶長十五（庚戌）九月吉辰功成矣、山窠子正悟

〔東福寺衆雜稿〕慶長十七（壬子）年六月、蒲室講後之詩序（聖德）月溪七、

夫於叢林入寺開堂之日、以駢四儷六之疏、勸請新住持、凡權輿于趙宋、恢弘于元明、其間博學諸老、禪外製疏、則雖人々備其體格、其中傑出而極屬對之妙、無過蒲室疏之前裁、吾徒欲製駢儷者、不可不學此疏也、（相國寺）○中略抑蒲室疏之專行于吾朝、二百年前、萬年山

長享二年六月二十六日

靈彥蒲室疏
ヲ得嚴龍派
ニ受ケ龍統
ニ傳フ

長享二年六月二十六日

三二二

絕海國師南遊之日、傳蒲室疏於季潭老祖、而以歸日域來、其時於五岳之間、博識雄才、遊戲于翰墨場者、翕然隨就國師雖學蒲疏、就中傳受將來次第、自國師傳之惟肖、江西二老、々々傳之村菴、々々傳之正宗、々々傳之月舟、○下

〔勅修百丈清規雲桃抄〕 四

寬正三年歲在壬午八月十日、瑞林之東軒抄畢、蓋雲翁始講於惠日之寶渚、而終卷於鷲峰、從己卯春、迄今前後四更星霜焉、其間或斷或續、而辛巳之歲、一切止之、以饑疾而事繁也、吁、艱險何一至此哉、然臨其席者、皆一時名勝、吾山則益之箴公、月翁匡公、笑溪權公、陽谷杲公、叔鳳逸公、菊英蘆公、龜泉證公、月卿規公、壽春永公、橫川三公、萬里九公、芳湧春公、景徐麟公、龍阜則希聖彥公、利涉溱西堂、蘭坡菴公、東山正宗統公、天岩澤公、桂林昌公、古雲云公、惠峰則大痴和尚、春起和尚、岷江和尚、天覺和尚、了庵桂悟公、季弘淑公、春湖鑑公、萬壽之天祐、西堂與余之所發起也、他日以此人行此書于列刹、未為難矣、所恨皆不全其書、有上卷而終者、有下卷而始者、怠者一二而止、勤者三四而闕、唯當相共補益力行之可而已焉、

〔日本禪林撰述書目〕

著述

村菴集 雪巢集、 希世靈彥
醜華集、

村菴疏

〔扶桑禪林書目〕 文集 詩偈附

村庵集 希世、諱靈彥、 二卷
嗣斯文得宜、

〔村菴文柄〕

聽松希世所製之、

〔雪巢集〕 乾 雪巢集 雪巢集、或
號村菴集、

雪巢集序

日本居大瀛之東、而朝暎晨霞之所輝煥、晴瀾煖漲之所蕩瀟、鍾其空霏噴薄之氣、英材偉器、宜當輩出、然而曠數百年之間、寥々無蒼何也、抑氣運有升降、人物有盛衰、而天地之精、尙闕焉耶、辛丑冬、余屏居江郡、一日龍門少雋希世彥公、自都下緘示一巨篇、且告曰、律詩凡百首、皆近藁也、公適多暇、請潤色之、於虛余也何以應命、希世聰寤爽朗、穎出不群、卅歲已有能詩聲、大上皇、愛公警敏、便殿賜坐、相國公、屢延之東閣、寵賚隆至、以至於四方士夫、相與莫不願觀其後姿而咨其雅詠、振動其聲耀若是盛矣、顧

長享二年六月二十六日

三二三

龍派雪巢集
ニ序ス

長享二年六月二十六日

三二四

余疏賤、方懼之不暇、何以應命乎、雖然公之所索、不可默止、乃留之數日、玩其詞旨、藻繪融液、一究於鍛鍊之工、而春容激昂、則幾於古作者之風矣、何其姿貞婉妙、而才氣老蒼如此哉、固非天地之精、鍾靈產秀、安能其所為臻茲、然余於希世、猶有欲言者、古之人寓道於技、蓋輪扁庖丁是也、所謂生靈本有之妙、佛祖單傳之祕、發見於日用事業間、因而詩外無禪、夕外無詩、惟神而明之存乎其人、希世曷焉、異時蜚騰天朝未艾也、余固未暇、希世賀且將法社中興賀也、亦不益感哉、右批者若干字、姑以塞命云、

是歲至日前一日

龍派書于江村客舍

方秀ノ序

雪巢集序

才也者未成器之名也、才良則器亦美、而才不良則器亦不美焉、余觀彥希世詩集一編、其才固足以驚世、而器之成與不成、則顧其學與不學何如耳、唐王勃季甫十三歲、為滕王閣序、閻伯嶼巽然撫掌嘆曰、奇哉天才也、余乃於希世亦云、

應永戊戌蜡月十一日

天龍岐陽叟方秀序

得巖ノ序

雪巢集序

(細川清元)聽松閣下、以希世壬寅藁一百首見示、需之評點、今茲才半歲餘耳、此外必有不登藁者、何其多哉、名章俊語、篇々皆然、連珠疊璧、拙目輒可定其價乎、然嚴命弗得而拒、頗加批改、豈謂至當、近世劉會孟、采少陵・東坡・昌谷(李長吉)・簡齋全集、或批或點、會孟豈出于杜・蘇之上耶、但述管見而已、觀者毋諂焉、

閏十月初三日

敬即道人岩謹志

雪巢集

盛作一通、諷玩終日、手之不釋、來命難拒、少加批點、亦傾倒至也、即茲奉還、蓋至寶非婁人氏可久留者、續有編集、不吝見示、則老卿慰藉、莫大於此、祝々、

蕉雪老納白

〔蔭涼軒日錄〕

長享二年八月廿一日、天快晴、○中往靈泉問正○中和尚不例、○中壁掛聽松院希聖畫像、有贊云、一步闢一步、脚下盡乾坤、蹈斷草鞋耳、元來不出門、正宗筆之、同有跋語、正宗云、遣此像於聽松、請贊者久、不遂其志、遷化之后返之、然間不獲

長享二年六月二十六日

三一五

畫像

贊ハ龍統ノ筆

靈彥十三歲
ノ時ノ詩

長享二年六月二十六日

三一六

止、書此一偈、吾師瑞岩曾話云、昔江湖諸名緇、各作罷參之頌、希聖亦作之、時十三歲也、只這一偈、甲諸偈、能誦持之云々、吾自幼年識此頌、以故書之云々、以之見之、希聖和尚者、希世之才也、彌可貴也、

〔村菴稿〕

下 小魯洙首座描予幻影安置聽松請贊

村夫子老凍僵、有年無德、八十龍鐘、儻或不假巨鼇量屬餘力、難以一臂扶起寂寥孤宗、而况一條拄杖子不在、焉得施與奪作略、一箇竹篋子亦無、寧爲驗背觸機鋒、所以、靠倒破木床上、等閑叉手當胸、咄哉々々、寒山子太饒舌、孰其爲之先容、因甚癡道、近聽聲愈好、微風吹幽松、

畫像自贊

鍊船打就久矣、不要磁石指南、呵々乾陪奉漢、今日看風便帆、

桂悟ノ求メ
ニ依ル

堆雲（桂悟）了翁大長老、偶有村叟畫像、雖微贊詞、而無可贊、聊信口自評而已、文明（十八年）丙午仲夏念八、村菴靈彥書、時年八十有四、

畫像自贊 鳳藏主求

智鳳ノ求メ
ニ依ル

大寶兩鑑、乃師師師、傳是不傳々、雪裏芭蕉（玉維）摩詰畫、用非無用々、炎天梅藁簡齋詩、

嘆、無用不傳眞妙處、南陽祕在鳳凰兒、

梅翁ノ求メ
ニ依ル

畫像自贊 梅翁億首座求

隨萋藪漢、空腹高心、入吾陋室者阿誰、有清風有明月、置我（億）微軀者那處、不江湖不山林、耐耐多年有千莖白髮、叮嚀此地無二兩黃金、幸然種得梅千億、八十五翁歡喜深、

畫像 昭首座請贊

穆庵ノ求メ
ニ依ル

穆菴昭首座、繪予陋貌、且求自贊、安置于丹陽岩栖寺、在昔、大鑑（正澄）住建長、請大林爲紀綱、即告衆曰、出于佛海（心月）・法海（靜照）之後、而稱僧海者、大林寔其人也、厥孫穆庵、與予久相從、如同門舊、于今四十餘年矣、故拙贊以隨其求云、

岩栖水清便是許由、掛木一瓢飲、聽松風好豈非寒山、落韻三百篇、無自無佗、大千世界、作今作古、同一山川、但穆菴有僧海孫故態、與村菴同禪居祖舊緣、爲我寫眞存厚意、千年常住又千年、

〔蔭涼軒日錄〕

長享三年六月廿二日、不參、天快晴、○中略來廿六日、聽松院齋、孝首座報之、

長享二年六月二十六日

三一七

一周忌

穆庵靈彥ト
同門ノ如シ

長享二年六月二十六日

三一八

廿六日、天快晴、○中早旦小補江遣人、聽松院可同途云々、自當院門外同途、先往仙館、小補來、同途而問琴叔、次瑞雲、聽松先祠前燒香三拜、半齋、孝首座燒香、維那育土司、主位鹿苑月翁、賓位仙館蘭坡、主對大昌天隱、賓對右馬頭殿、齋十一菜三汁麵果、茶了歸、

三周忌
齋會人員百
十六人

延德二年六月廿三日、不參、天快晴、齋前來廿六日聽松院齋請帳回之、百七十六人内、東堂廿二員、西堂十四員、平僧百四十員、給仕十五員、智鳳首座回之、不面之、廿六日、不參、天快晴、彦希世大祥忌齋會在聽松、愚依不例辭之、傳語小補、

〔補庵京華後集〕

戊戌 宗山字說

萬松宗山美少年、乃本朝宗室伏見李部親王（貞常親王）々子、而今天子其從兄弟也、風塵表物、神仙中人、凡稠廣之中、不問氏族、知其爲龍種也、天資聰敏、々而好學、唔咿之聲、不絕口矣、下筆鸞立、成章鳳騰、雖使汝陽王復生、不敢多讓矣、幼歲投萬松大和尚室、以歸釋氏、奉父王命也、其尊號者、岩栖希世師所稱也、○下

靈彦萬松軒
等貴ニ宗山
ノ號ヲ上ル

〔村菴稿〕

中 賀瑞朝童受業有序、

典厯源公有幼子、小名鈴松、年甫八歲、雖非其所生、而與所生相同、初自胎孕時、

瑞朝ノ受業
ヲ賀ス

相約以爲吾子、既生而美如玉雪、公之所撫愛也、今茲、令之子歸釋氏、受業于七代（禪者）帝師門下、更名曰瑞朝、又公之所願言也、景徐師來、傳源公之命、徵予一語記之、予辭之言、是史筆之所能也、非山野之所能也、且呈野詩一章、以致其賀云、
家君稱子々稱翁、養在初生襁褓中、賜紫簾前他日夏、祇今玉面小僧童、

〔翰林葫蘆文集〕

七 東啓字說 代小補

萬年有佳少年、其諱曰朝、（瑞朝）豐盈犀角、眉目畫不如、而天資聰敏、秀出於兒中者也、始在胎孕日、右典厯源府君謀曰、若是男則我子也、果如其言、自韶亂中、不離膝下、鍾愛厚甚、年甫八歲、府君歸之釋氏、而拜正覺國師塔、命某教之、今茲暮春、府君招聽松老人、看私第庭前櫻花、予赴其席、公在座焉、聽松字之、以東啓二字、○下

〔秃尾長柄帚〕

希文字說

萬年佳年少名興、就岩栖村庵翁、需立其字、輒以希文授焉、且雖欲望併述其義、而晚生後進、唯此二字爲足、如得隋卞者、然以予托於門下士之末、（龍統）介人徵其說、翁也者齡迨踰七望八、猶杜門讀書、貫徹古今、而無一毫之猜諷、以至理克服人心、故天下翕然仰之、今所立之字、非予所得而測也、○下

希文靈彦ニ
字ヲ求メ龍
統ニ字ヲ說
ムハ靈彦
ノ門生

靈彦瑞朝ニ
東啓ノ字ヲ
與フ

長享二年六月二十六日

三一九

長享二年六月二十六日

三二〇

靈彦伊勢貞宗ノ猶子宗與諸ニ字ヲ與フ弟中靈翰ノ病中靈翰ノ詩ニ和ス

靈翰ニ書ヲ與フ
靈翰ノ詩ヲ評ス

〔蔭涼軒日錄〕 延德三年五月四日、不參、天晴、○中往汲古、○中時南禪寺美少來問、則正眼院汝舟和尚小師、大利根喝食也、久聞其名、初見其面、々々太美也、小補問其字、曰大方、村庵所賜、又問其諱、曰宗諸、又問其年、曰十五歲、汲古爲猶子云々、

〔村菴稿〕 中 一日余病起、就案得兒子翰山寺遺興之詩、輒和付翰、用節字韻、

邁寺高低千萬峰、朝昏四答一樓鐘、溪邊任認隨流菜、門外宜栽夾路松、犬吠砌時緣客至、鴉歸村後少人逢、老僧病起身何似、羅漢圖中倚竹筇、

〔村菴稿〕 下 與靈翰侍者書

靈翰侍者几下、善慧歸時、傳其赴京師途中作、於其一篇中、蒨店板橋霜帶月、蓑衣箬笠雨和風、此句尤佳、用庭筠志和之詩、描出一聯佳對、語簡而意盡矣、老夫偶得此、口而不絕、傾倒之至也、矧與翰別來既數日、獨處無可伴、案上有所留詩卷、每諷玩以悵懷耳、簷滴雨聲殘雪盡、池添水色薄冰融、形容春初之物色者甚工矣、園人送菜村家近、道者栽松野寺幽、村裏野態、宛在人目前矣、一身客裏萍漂水、萬事人間葉隕霜、亂離旅寓之中、令人多感慨矣、幽人只掃莓苔徑、好客寧敲蓬蓽門、出於空谷不啻蹇然之口矣、打菴黃葉客無睡、侵砌蒼苔人不來、此蕭寂之境、少日壯懷、如何禁得矣、暑向清風來處

退、涼從積雨霽時生、語自老意、用得退之、時秋積雨霽矣、唱和投筒居易稔、來過裏飯子輿桑、用人名有來處、曾用此對者未杳矣、簾外鳥聲春百刻、欄前花影月三更、自然麗句、吟而可老矣、略舉數句、是類甚多、殆其天稟之詩材耶、非老夫譽兒之癖也、然所恨近來遊手廢學、而如自棄者何也、老夫心深憂之、而口未發之、恐其逆耳而敗意也、翰爾自今、慨然立志、而祖肩黃卷之中、唾手青灯之下、則彼蠢々流輩、皆望厓而却、勉哉々々、老夫爲愛來詩之美、愈念玉女於成者也、行李倉卒、紙短心長、不悉、文明元年八月二十五日、邨菴老夫再拜、

〔翰林葫蘆文集〕 九 就睡軒敘

龍山芳園禪師者、聽松村菴老師之寵弟也、族譜者、右京兆幕下藥師寺氏也、村菴甫三五歲、故京兆悅道公養爲子矣、公命藥師寺某育焉、所謂某者禪師之族祖父也、父某者晚年脫俗而圓方、假貌浮屠氏者也、禪師六歲、以父命見老師登童科、給侍左右者有年矣、十七披剃任客司、三十踐華區頭芳躅、僉云洞桃尚嬾矣、四十三後板秉拂、四十四領能之安國帖、寺乃其先大鑑師之甘棠也、占丈席者三年矣、解印而歸、後領北山眞如帖、于時四十七也、而後避京師亂、周遊於九州、識大內公、○中既歸則公在維邸、因請相府、降瑞鹿鈞

長享二年六月二十六日

三二一

靈細川氏ノ臣藥師寺氏ヨリ出ヅ
六歲ノ時靈彦ニ侍ス
十七歲剃髮能登安國寺眞如寺ノ公帖ヲ受ク
大內政弘靈郁ヲ圓覺寺

住持ニ推獎
ス周麟ニ所居
ヲ軒號ノ敍
ヲ求ム
軒號ハ靈彦
ヨリ受ク

室ハ明應四
年ニ廢ス

長享二年六月二十六日

三二三

帖、以推獎焉、今年耳順、退而寓居龍山聽松院、以就睡爲軒號、一日禪師携橫幅來、謂余曰、得閑大書此三大字、敍其所以於其下見賜、幸蔑以加焉、且告曰、曩時搆斗室於松下、僅容膝而已、老師適讀蘇子瞻^(賦)後赤壁賦、若有默契於中者、指就睡二字曰、爲子得軒名、從此稱所寓之室云爾、余聞之曰、蓋老師之所取、豈有他耶、凡人之處世也、皆爲耳目所驅使、其情動乎中、其動而不止、則塞乎天地、覆於日月、不可得而防焉、故吾聖人深憂之、然則爲其徒者、宜如何自處哉、曰閉視聽絕情慾者、莫如睡也、四睡于唐、當其睡也、無虎無寒拾無豐干、及其覺也、各有我他之異、于宋于五季、善睡者扶搖子也、有詩曰、紫陌縱榮爭及睡、至若子瞻之就睡也、未得其熟者乎、作赤壁賦、後人評之曰、因客吹簫、有怨慕之聲者何也、故曰未熟者、想老師所取者、字在茲、義不在茲乎、然則以何爲其義哉、向所謂閉視聽絕情慾者、莫如睡也、老師果言是乎、禪師領之、笑曰、其室已廢于乙卯之歲、今只有其名耳、余曰、軒旣不立、使余書名作敍、將安何處哉、此有一說、大鑑師年二十三、入浙至淨慈見佛心^(智慧)、正值法座寶蓋新成上堂、有不下禪床接大王之句、師進頌、首曰、虛空拽下作禪床、佛心云、虛空還拽下得麼、師應聲曰、終不向別人借手、佛心大喜矣、繇此言之、禪師以虛空爲一軒、而中置一禪床就睡者乎、余又向虛空

裏、題此三大字、以還之、其敍與不敍、尙安用余言哉、

〔五山群緇考〕

就睡軒 芳園禪師、村庵弟子、俗姓藥師寺、

〔聽松岩栖兩院開祖以來略傳記〕

一岩栖院 山城州五山之上下太平興國南禪々寺塔頭、

一聽松前任芳園靈郁禪師 希世靈彦之法嗣也、

〔鹿苑日錄〕

一 等持寺日件

長享元年八月廿一日、早晨諷經罷、即喫齋、々了乘輿、六力

昇之、往于南禪、問聽松翁、々々出迎、微恙瘦損、如不勝衣、弔小魯西堂、(靈彦)溘然翁語曰、

六歲始入我室、我此時十八九歲、未得度、岩栖院殿悅道禪門尙在、屈指六十六年于茲

矣、小魯今年七十二歲、病而躡月、十六日之曉逝矣、予慰諭翁意、(靈香)又就香首座寮、燒香

禮拜、紅燭十挺、以爲香奠、

〔村菴稿〕

上

小子科、字曰盈川、試筆賦詩、索予和、筆以與之、

竹馬追隨可惜春、踏青天氣轉清新、兒童豈信吾衰老、二十年前綠髮人、

溝中斷木豈能春、舊曆已陳無復新、花與紅顏誰易老、啼罵似問少年人、

〔秃尾長柄帚〕

慶霄字說

聽松師翁村菴、有一僧童名吉、齡不迨志學、恆侍其側、予每數日一詣、其諄々論文、疊

長享二年六月二十六日

三二三

靈泚靈彦ノ
室ニ入リテ
六十六年
病歿ス

靈彦盈川ノ
試筆ノ詩ニ
和ス

龍統ノ慶霄
字說

靈彥慶霄ノ
字ヲ與ヘ龍
統ニ字說ヲ
求ム

日野政資十
三歳ノ筆

靈彥ノ天資
不凡

長享二年六月二十六日

三二四

々論道之外無他語矣、吉吟之、弗勸趨向、諒可愛矣、一日翁指吉告予曰、命之字以慶霄、取宋謝宣遠咏史詩所云慶霄薄汾陽、解者向氏云、慶霄慶雲也、請子作說授焉、予拜曰、褻翁予何言、然優假之辱、固辭非禮也、數年之後、吉既剌染、躬衰一軸、來督其說、披而覽之、上有二大字、吾樞府外家日野從四品政資歲十三而所筆也、輒諭之曰、慶雲天之瑞也、奚其期以天瑞、不以人瑞哉、蓋天人在一心也已矣、夫心者道之本也、是故儒之道、治心修心者也、佛之道、明心悟心者也、治與修漸也、明與悟頓也、心者一也、治修明悟者、世出世之異也、得道者、皆大有慶矣、有慶者不一矣、生而有得者、老而有得者、生而得者夙植也、老而得者今修也、其修者始之以至誠、中之以不欲速、終之以不懈、茲三者備、則欲毋慶不可得也、此理之常、無足怪者、生而得者、亦益修則慶弗盡矣、乃翁村菴、生而得者耶、天資不凡、其智過人遠矣、慶之始也、如雲之發石也、父母有所見而歸之釋氏、拜斯又爲父、寶鑑爲祖、大鑑爲曾祖、亦慶也、如雲之從龍也、故摠官府細川源公悅道、養以爲子、亦復慶也、如雲之依泰山也、自齠亂中、志如成人、授書即誦、手不釋卷、至忘寒暑、七歲而能詩、飄々有披雲攬裳之氣、仙洞小松院上皇、賜讌賦詩、下筆立成、其末曰、不意青雲上、揮毫賦野詩、天顏愉然奇之、時賢丞相勝定院顯山公、座上結襪示其重之

得巖ヲ骨ト
爲シ龍派ヲ
髓ト爲ス

諸人ノ勸誘
ヲ辭シテ位
ハ侍者ニ止
ル
五山ニ住ス
ル者皆畏敬
ス

也、縉紳百辟聚觀而嘆駭焉、又顯山請洛下諸大宗匠、作罷參頌、悅道時竊令頌之曰、一步闊一步、脚下盡乾坤、踏斷草鞋耳、元來不出門、宗匠皆傳聞曰、隔生不忘也、十六七而能文、油然而作雲及物之功、蕉雪鑄誨之、(得之)豚庵濯磨之、然後以蕉雪爲骨、豚庵爲髓、詞理醇深、波瀾老成、百世可以師矣、悅道一逝、毀瘠如疾、弗與世接、閉門却掃、非德不交、所勤者唯學耳、燈繼晷以達明、未嘗一夕解衣甘寢、或其念吾學成耶否耶、則湏涕霑卷、故汗牛充棟、無不過自者、(自之)至矣盡矣、適當其遊焉息焉、則索詩探文、嘯傲乎林泉花石之間、其樂足以忘老至矣、豚菴蒞龍阜、將登居板首、辭不就、其後名宿碩德數勸、確乎位止侍者、此非雲之愛故岑也乎、蕉雪・豚菴亦逝、道喪文弊甚矣、獨鷹以歸於正、天下靡然從之、誦其名者、如家至而日告之、故雖以德爵齒陞五嶽上者、咸驩趨以異敬、然視之如孺子矣、豈世之褻淺者得見其面乎、况仁者以靜壽、今茲既八十、凡由七歲屆八十、一文一詩、片言隻字、得之者、如明月夜光、傳而聞者、如塗拾遺、此非復雲之徧雨於天下也乎、寔翁者雖生而得、猶以至誠爲始、不欲速爲中、不懈爲終、則八十乃下壽、從今歷中壽百歲、臻上壽百廿歲、亦必如斯矣、以今觀之、想前身、亦必如斯矣、丁大鑿戠化一百十五年、創塔院於龍阜、扁之曰聽松、副以丹陽官田、上以畢祖宗未究之志、下以爲子孫無疆

長享二年六月二十六日

三二五

之福、於是士無賢不肖、不謀而同曰、村菴大鑿後身也、孰以誣焉、聽松嘗悅道所號也、
 悅道之後、令子春巒（細川持之）、同芳門（待賢）、令孫仁榮（龍元）、令曾孫今之京兆公、宜哉相副（嗣之）、仰之如佛、々
 之福惠、萃于一身、故曰々慶也、時々慶也、歲々慶也、慶積有餘、而嘉氣上天、惟天不
 容僞、天受之爲雲、則天瑞即人瑞、々々即天瑞、所謂天人實在一心也已矣、京房易飛候
 有云、視西方有大雲五色、其下賢人隱也、是翁之流亞耶、謂之匹夫而能動天、所惜班氏
 漢書、沈氏宋書、徒誌其瑞而不爲世得賢之驗也、今也慶霄二字、所命所書、良可慶者、
 合儒佛爲一也、吉也、幸侍其側、竭誠勿懈、予言止此、更求翁說、

〔村菴稿〕中 爲吉侍者題梅雪齋

梅花落雪有精神、冷蕊疎枝襯玉塵、看倚欄干猶久立、此身不負作詩人、

〔補庵京華新集〕丙午 梅雪齋詩後序

言梅者多矣、而有梅、不言雪者少矣、而有梅與雪、不言詩者亦少矣、是百梅之十雪之
 詩、所以用於世也、古人曰、梅雪詩三者、皆不可無也、至論也、龍山慶霄吉侍者、乃聽
 松村庵老師膝上文度也、與予來往、非一日之雅也、今茲暮春、慶霄訪予小補、人事未畢、
 袖出一軸、自起張壁、指示謂曰、此詩我師去歲之冬、雪後梅邊、乘興賦之、因以梅雪名齋、

靈彦慶霄ノ
齋ニ題ス

景三ノ梅雪
齋序

慶霄靈彦ノ
詩ニ依リ梅
雪齋ト名ケ
景三ニ詩ヲ
求ム

出於從容也、而我無一間之屋、何地植梅也、無一株之梅、何處見雪也、有一於此、凡物寓
 之於意、樂之於道、則物之與我一也、一幅之軸我齋也、一篇之詩我梅雪也、寔不誣矣、翁
 非我師之愛客乎、請係一辭於詩後、以代我上梁銘、賜孰加焉、予曰、善、有是父有是子、
 慶霄之謂也、居、吾語汝、有宇宙來、如村菴師者、未之見也、予生衰世所不恥、得師一識、
 也願足矣、師胸涵三藏九流、眼空五湖四海、名師宿德、飫慈誨者、詞人墨士、沐餘論者、
 一經品題、華袞非榮、何其盛乎、雖居師表之尊、處極品之貴者、無所讓焉、而視其身也、一
 黑衣常僧耳、出世兩字、拋向一邊、所居之軒、青松數株、風聲雨聲、聽之不徹、扁曰聽松、
 又自號村菴、有旨哉、洛社凋零、人物稍稀、長庚殘月、向天欲曉、師獨今年八十有四、巋然
 無恙、天下幸甚、在易之謙、天道虧盈而益謙、蓋師謙其德、以益其壽焉、天之道也、予意
 師聖之和也、發而爲梅耶、溫風旒々、師聖之清也、結而爲雪耶、嚴寒凜々、梅遜雪三分
 白、雪輸梅一段香、是無他、師日用四威儀中事爾、予故曰、有宇宙來、未之見也、可徵矣、
 慶霄、自幼不離師側、出入于經史子傳、日問月學、可謂勤矣、若乃三千首之風月、一萬重
 之烟花、含蓄於師之言外、鼓舞於師之筆端者、師不能以相教、慶霄不能以相傳、予強而議
 之、愚之甚也、參詩如參禪、誠哉此言、慶霄造次必參梅詩、顛沛必參雪詩、疎影暗香、以

長享二年六月二十六日

三二八

爲公案、艱難奇麗、以爲工夫、而聖之和、々其肺肝、而聖之清、々其肌骨、片言隻字、百鍊千鍛、慶霄不翅詩熟而禪熟也必矣、其如此則慶霄乃梅也、慶霄乃雪也、慶霄詩師之詩也、慶霄齋師之齋也、一幅之軸云乎哉、一篇之詩云乎哉、慶霄勉之、嗚呼、不識梅者論柑樹、不識雪者論楊花、予論詩亦升、(死)慶霄持予此語質師、必發一咲也乎、

文明十八年歲舍丙午仲夏如意珠日、前相國橫川景三、滌筆於常德小補之室、

〔幻雲詩稿〕

乾

次龍阜吉公髫年(文明八年)丙申元旦韵村庵徒、後號慶霄

故家喬木一枝新、今日門庭凡幾人、可記蘇公初出蜀、名高嘉祐丙申春、

〔默雲詩藁〕

次某人韵青少年、岩栖子、

年少哦詩句法新、典刑似見老成人、一家和氣東風早、陰合鯉庭桃李春、

〔半陶文集〕

三

(歸田)爲慶霄侍者、志雅

勳業看鏡者、唐少陵乎、夢作白鷗者、宋少陵乎、江南野鳥云、一以貫之、異哉、

〔蔭涼軒日錄〕

文明十八年正月八日、○中(歸田)略彦龍藏主、督龍山文英年少試筆和、

村庵小師、共韵〔姚魏家、最堪誇五色花、

〔半陶文集〕

二

和龍山文英少年試筆韵村庵小師、

壽桂慶霄ノ詩ニ次韻ス

龍澤モ次韻ス

周興慶霄ノ爲メニ扇面ニ題ス

集證文英ノ試筆ニ和韻ス

周興モ和韻ス

景三ノ次韻

敬侍者

聖門今見魯東家、文學科中君獨誇、人道清標有堪比、風吹柳絮雨梨花、

〔補庵京華新集〕

文明十八年次韻文英少年試筆詩村菴希世之子、

乃翁門客出諸家、惹得虛名徒自誇、一讀君詩却三嘆、風前楊柳雨前花、

〔村菴稿〕

下 送敬上人侍親之四州序

宋嘉祐間、蘇氏(輔)少公、與長公(軾)、侍編禮、舟行自蜀至京師、時少公年僅十九歲矣、今茲吾徒敬侍者、自京師南之四州、出入反是、然侍親則同、舟行則同、年則同、其志同不同、予未之知也、曰、志則何也、予按、少公初筮仕、歐・韓・范・富諸賢在朝、衣冠文物之盛、莫加焉、韓乃太尉魏公也、少公譔長書、以爲謁見之贄、太率自言、其生既十九歲矣、家居鄉邑、耳目狹隘、交遊則不有英豪俊傑之才、登覽則不有高山大野之觀、於是慨然出遊萬里、入秦關、過漢京、瞰黃河、瞻終南・嵩華之山、仰觀天子宮闕苑囿之壯麗、而後始知天地之大也、蓋將資之薰陶漸漬、以張大胸中之有、而發揮文章之妙、若慕孟軻養氣、子長遊者、其志至大也、豈淺之爲丈夫也哉、敬也、生於京師、長於京師、少公所跂望者、朝而身歷、夕而目擊、奚以之四州而南爲、抑爲京師遊覽之美、不足視於目歟、不然、舍近取遠、人之情也、少公若生於京師、必欲觀蜀之山川、子之行也、易地皆然、能

長享二年六月二十六日

三二九

長享二年六月二十六日

三三〇

以少公之志爲志、孰言不同、徒遊覽是謀、謂之流連、君子不爲也、幸哉、家君在、教而必嚴、予不辭費、

○靈彦、眞詢ノ住南禪寺同門疏ヲ作ルコト、寛正六年七月二十二日眞詢南禪寺入寺ノ條ニ、觀世元重ノ畫像贊ヲ作ルコト、應仁元年正月二日元重卒スルノ條ニ、細川持賢ノ壽像贊ヲ作ルコト及ビ持賢第二屢詩ヲ賦スルコト、同二年十月七日持賢卒スルノ條ニ、京都ノ亂ヲ避ケテ、丹波ニ在リ、聽松寺ヲ同國野村ニ建立シテ、細川滿元ノ冥福ニ資スルコト、文明元年是歲ノ條ニ、太田道灌ノ爲ニ、龍統等ト共ニ、江戸城靜勝軒ノ記ヲ作ルコト、同八年八月是月ノ條ニ、勅命ニ依リ詩ヲ詠進スルコト、同十二年八月十四日ノ條ニ、御製ノ詩ニ和韻シ奉ルコト、同十六年正月二日大雪ノ條ニ、武田信親ノ畫像贊ヲ作ルコト、同十七年八月二十二日信親卒スルノ條ニ、慧鑑明照禪師ノ諡號ヲ賜ハルコト、延徳元年六月十三日ノ條ニ見ユ、

〔參考〕

〔印章彙纂〕

部^レ之 靈彦

印章



○竹齋讀書圖（東京國立博物館所藏）



○傳天章周文筆山水圖（瀨口宗博氏所藏）



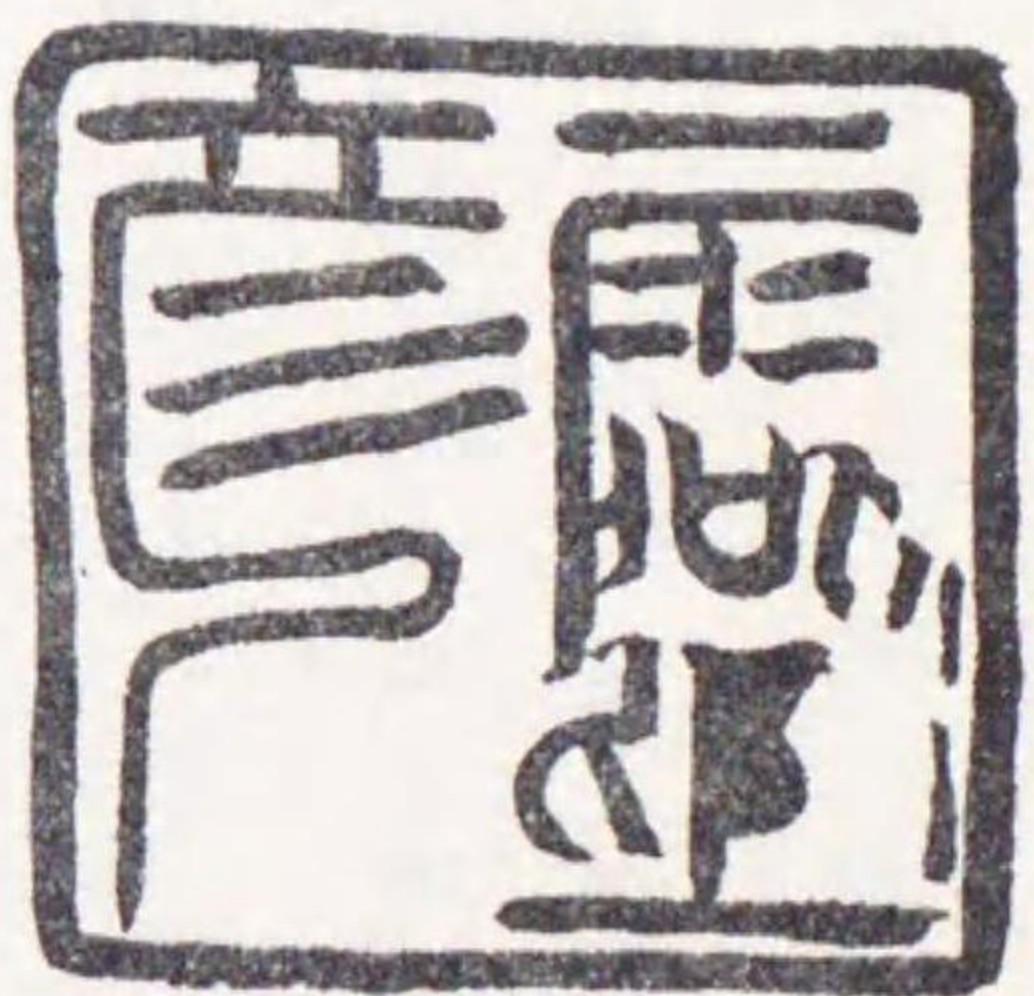
○補菴京華集新集（前田育徳會所藏）
景三相國寺入寺法語題辭

長享二年六月二十六日

三三一

長享二年六月二十六日

三三二



○雪舟等楊山水圖模本（東京國立博物館所蔵）

靈彦塔

〔雍州府志〕

十補遺 陵墓門 愛宕郡

靈彦村菴塔

（南嶽寺） 在同寺聽松院、

〔續本朝畫史〕

下

希世靈彦和尚、號村庵、斯文宣法嗣、長享二年六月廿六日寂、八十六、詩文聲于當時、或云、

作山水墨戲、未詳、或圖菅神像、贊其上、傳稱有靈應、

〔古畫備考〕

十釋門四

村菴靈彦、名希世、斯文宣法嗣、長享二年六月二十六日寂、年八十六、詩文聲于當時、或云、作山水墨戲、拾彙、或云、渡唐天神の自畫讚、夢想之依て百幅畫之、甚靈異あり、今猶存する者多し、山水自畫讚とて、菅原氏藏之、細き小立物也、村庵普像讚、五百年來一樣春、梅花不與乾坤香、□□後世稱詩神、北野曾聞菅姓人、

山水畫ヲ描クトノ説

〔續本朝通鑑〕

百七十五 後土御門天皇六

申二年

是年僧靈彦寂、

彦字希世、號村庵、

○中略

建仁僧文學、

擇禪林絕唱各十首、

（周信）

義堂・

（中世）

絶海・

（真玄）

忠・謙岩・惟肖・鄂隱・西胤・玉腕・江西・心田・瑞岩・瑞溪・東沼・九鼎・九淵・南

（原世）

（惠徳）

（兼芳）

（兼芳）

（兼芳）

（兼芳）

（兼芳）

（兼芳）

（兼芳）

（兼芳）

（兼芳）

（兼芳）

靈彦ノ寂後
禪林ノ詩衰

邦高親王觀
心尼永崇等
貴御聽聞

甘露寺親長
ニ御簾ノコ
トヲ勅問ア
ラセラル
玄周親長ニ
禁忌詞等ノ
コトヲ尋ヌ
聽聞ニ參内
ノ人々

〔祭〕

江・中恕・以村菴爲最末、凡二十人、二百首、號花上集、周興作序 行于世、村庵没後、禪林詩衰、

二十七日、未、清淨華院玄周ヲ召シテ、阿彌陀經ヲ講ゼシメラル、

〔御湯殿上日記〕

○京都御所東山御文 庫記録甲二十九所收

六月廿七日、

〔御書〕

（清淨華院玄周）

「けふより上花院あみたきやうよませらるゝ、ふしみ殿・あんせん寺・れんき・はんせ

う御まいり、」

（非高親王）

（觀心尼）

（永崇）

（等貴）

（等貴）

（等貴）

（等貴）

（等貴）

（等貴）

（等貴）

廿八日、○中略 けふもたむきあり、ふしみ殿・おか殿・れんき御まいり、

廿九日、○中略 けふもたむきあり、昨日の御人す御まいり、

〔親長卿記〕

六月廿五日、曉天雨下、自卯尅晴、早旦參内、○中略、月次御連歌ノコトニカ、御會之時直勅問、近日可有淨花院講演、可被懸御簾、非蘆簾者不可然歟、予申云、爲内儀之事、就無蘆簾、常翠簾何事候哉之由申入了、

廿六日、晴、自淨花院有使、御談儀事也、條々有被尋之旨、禁忌詞以下事也、委細報了、

廿七日、晴、晝後參内、直衣、於黒戸有御談義、阿彌陀經、奧御座敷中隔東西行被懸渡翠簾、淨

花院東間上壇、源大納言・予西間下壇祇候、權中納言 閣服、卷櫻、民部卿・右大辨宰相・

以量朝臣等又候次間、長老・伴僧等候簀子、權帥衣冠、依外様候簀子、下姿之輩候地下、

事了退出、

長享二年六月二十七日

三三三

長享二年六月二十九日

廿八日、晴、同前御談義、

〔實隆公記〕 六月廿七日、〔日誌〕天晴、○中淨花院長老於禁裏内々被講阿彌陀經、可祇候之由、民部卿相觸、依所勞之氣不參、

廿八日、庚申、天陰、○中未刻參内、常花院長老於黒戸被講彌陀經、近臣以下祇候、主上并親王御方等簾中御座、女中同被候、

廿九日、辛酉、晴、午時夕立雨、則屬晴、今日爲御談義聽聞參内、於長橋局有一盞、源亞相同在此座、

二十九日、辛酉、權大納言從二位海住山高清薨ズ、

〔後法興院政家記〕 六月廿九日、辛酉、晴、晡夕立、去夜海住山〔高納〕大納言逝去云々、去廿五日等持寺八講著座云々、纔兩三日間歡樂云々、痢病云々、言語道斷事也、無常迅速習、雖不始于今可驚々々、

兩三日間ノ
患痢病
五十四歳
嗣子ナシ

〔親長卿記〕 六月廿九日、晴、今曉海住山大納言〔高納〕逝去云々、不便々々、無子息斷絶歎、

清閑寺家幸
猶子ノ約アリ

七月二日、晴、○中略、御不豫ニ依リ、親長參内ノコ、其次條々及御閑談、海住山事不便、一跡已斷絶歎、家幸有猶子之約由被聞食候間、先一跡事可存知之由、可被仰付之由、明日可申

武家之由、被仰勸修寺大納言云々、尤可然之由申入了、

〔實隆公記〕 六月廿九日、辛酉、晴、午時夕立雨、則屬晴、○中抑海住山大納言高清卿今曉逝去云々、自去廿五日夜痢病得□減之由聞及之處、忽歸泉、無常迅速堪驚歎者也、今年□行跡雖不尋常、於事辨黑白之仁也、尤不□、

高
清ノ知行
分ヲ家幸拜
領ス

〔七月四日〕
○上さても海住事、言語道斷、如夢幻候、遺跡事等如何候らん、無常迅速雖非可驚、
當于時□入候、○中恐惶謹言、

七月四日

實隆

勸修寺殿

廿二日、甲申、陰雨、時々晴、此間日々天氣如此、○中海住山大納言遺跡、其後未弔之間、今日同弔之、

〔大乘院寺社雜事記〕 六十長享二年申七月一日癸亥小

一堀川判官爲社參罷下、色々相語、此二三日間海住山中納言逝去、子息無之、

〔公卿補任〕 參議正四位上藤高清、長祿二年五月十四日任、〔五條〕辨官如元、元藏人頭、左大辨、越後權守、七月廿日從三位、父故權大納言清房卿、母、同四年八月廿八日任權

官歴

長享二年六月二十九日

三三五

三三四

長享二年六月二十九日

三三六

勘解由小路
ト號ス

中納言、政嗣九月七日辭、同十三日任左兵衛督、寬正五年十二月二日辭之、以上同六年大藏卿、文正元年九月廿九日敍正三位、文明七年正月三日喪母、同年三月十日敍從二位、以上同十二年三月十一日任權大納言、長享二年月日薨、以上四十三、

〔諸家傳〕

七中海住山 高清、號勘解由小路、又海住山、清房卿男、母、永享七年誕生、寶德二年四月廿六日右少辨、十六歲、于時同年九月廿一日藏人、同三年八月一日正五位上、十七歲、同四年三月廿三日左少辨、十八歲、享德二年三月廿五日權右中辨、十九歲、同年七月七日從四位下、同年九月廿七日從四位上、同三年正月廿九日右中辨、同年三月廿三日右宮城使、同四年月日正四位下、康正二年正月十九日左中辨、廿二歲、同年三月廿九日藏人頭管領、同日左宮城使、同年十一月廿五日左大辨、同三年正月十日正四位上、同年三月廿九日越後權守、同日造東大寺長官、長祿二年五月十四日參議、廿四歲、左大辨、越後權守等如元、同年七月廿日從三位、同四年八月廿八日權中納言、廿六歲、同年九月七日辭、同月十三日左兵衛督、寬正五年十二月二日辭督、卅歲、同年月日大藏卿、文正元年九月廿九日正三位、卅二歲、文明七年正月三日喪母、同年三月十日從二位、四十歲、同十二年三月十七日權大納言、四十四歲、長享二年月日薨、五十四歲、

〔尊卑分脈〕

藤原氏
高藤公流

世系

頭辨 右衛門督、右兵督、參木、
清房 大辨、民部卿、權大納言、

五藏 高清 參木、左大辨、大藏卿、左兵督、權大、正二、
頭辨 長享二一薨、號勘解由小路又海住山、

〔系圖纂要〕

二十九 藤氏二十三
海住山

清房

五藏、
頭辨、母

高清 長祿二年五ノ十四三木、頭左大辨、正四上、寬正元年八ノ廿八權中納言、九ノ十三左兵衛督、五年大藏卿、文明七年三ノ十從二、十二年三ノ十一權大納言、長享二年薨、號海住山、又勘ヶ由小路、

〔斷絶諸家略傳〕

中 海住山 勸修寺家一流、又八九條、二條・勘解由小路・穗波、

清房 元氏輔、權大納言、從二位、民部卿、

高清 權大納言、從二位、號勘解由小路、又ハ、號海住山、

〔後法興院政家記〕

文明十二年五月一日、辛巳、晴陰、○中 海住山大納言 勘解由小路申改稱號云々、○中略

等來、令對面、

〔糟粕記〕

○柳原家記録十
八改元部類所收

長享二年六月二十九日

三三七

勘解由小路
ヲ海住山ト
改ム

長享二年六月二十九日

三三八

高
清
ノ
曆
記
ヲ
糟
粕
記
ト
名
ク

〔奥書〕本云、此記海住山大納言高
清卿、曆記也、被號糟粕記、余依爲知音被許一覽、仍寫留了、當日別記紛失了、

元龜三六廿一以中院羽林本寫之、

左金吾藤原山科書經

〔除目祕抄〕

○柳原家記錄
四十四所收

〔奥書〕於撰定抄者最上祕抄也、能々可祕之、爲研愚鈍爲賢利生、旁以祕抄也、尤記諸善書也、
本云、寶德三年辛未九月十五日書寫之了、已一校了、

藏人正五位上行右少辨藤原朝臣高清

高
清
筆
除
目
秘
抄

〔關白宣下次第〕

同
關
白
宣
下
次
第

〔奥書〕本云、○中略 文明十一年二月廿九日、以按察卿甘露寺親長本令書寫之訖、件本勘解小路前中納言由成高清筆也、

明應六年六月十四日以右本寫了、

權中納言藤廣光可

權大納言藤宣胤中御門

資胤中御門

〔海住山高清和歌短冊〕

○猪熊信男氏所藏

廿九日
高
清
の
歌
の
物
り
は
と
高
清

和
歌

〔筆陳〕

上ノ一
○保阪潤治氏所藏

忍逢戀

高
清

むすひをく露のかとをよすかにてなひくしのふのみたれあひつゝ

寄竹戀

高
清

ちぎりきやつらき心も色かへぬまかきの竹のへたてはてよと

〔古筆手鑑〕

海住山殿 題後花園院

紅葉盛

高
清

むらくにくれし比の色もなしくれなるふかき四方の紅葉々

〔文明易然集〕

郭熙

高
清 海住山殿、

長享二年六月二十九日

三三九

長享二年六月二十九日

三四〇

秋の山うつしと、むる筆の跡に朽ぬその名も残る紅葉は
廬山瀑 高清

音にきく人や庵をむすひけん名におふ山の高きしら糸

〔公武歌合〕

一番 湖上月

左

從二位藤原高清海住山

すハの海や浪路はれたる秋風に月のこほりをわたる船人

右方申云、無殊難、左を勝とし侍り、

右

三善清房飯尾加賀守

にほの海やしかの山風吹おちて月のみふねをよするさゝ波

左方申云、下向きなれたる心地す、○中略

九番 禁中月

左

沙彌寂譽

宮人のあふきみるより月のなもいや高からしも、敷の山

右方申云、百敷の山き、なれす、陳云、俊頼朝臣口傳抄云、百鋪山禁中なりと侍る敷、

歌合
公武歌合

判者一條兼
良

〔殿中十五番御歌合〕

長享二年六月二十九日

三四一

右 桂おる人をやてらす秋風にはる、雲井の庭の月かけ
高清卿

左方申云、無殊難、持とさため侍し、○中略

廿三番

左

清房

くれ竹のかいらぬ色にく露の光をうけてやとる月かな

右方申云、をく露の光をうけてやとると侍る月のつきにきこえ侍り、

右

高清卿

吹わくる軒端の竹をもる月や風にもきえぬ窓のともし火

左申云、月を灯にたとへむ事、あまりにや、陳云、燈にたとへむ事有何難哉、右を

勝とし侍り、○中略

都下兵亂之後、城南蟄居之間、老耄相加身如病兒、不携一卷之抄物、頗雖忘書儀之風體、
只依來意難默、猥注短慮所及、此一巻一覽後、於愚判愚詞者早被削除、豈不幸之甚哉、

(一條兼良)
南華老人 御判

〔殿中十五番御歌合〕

長享二年六月二十九日

三四二

幕府十五番
歌合
判者飛鳥井
雅親

判者前大納言入道榮雅

略

九番

左 宇治川

尙氏

見わたせのうちの河風ふきならし霧わけいつる秋のしはふね

右冬 高嶋山

權大納言高濤

なかぬ日は雪に積て棹鹿のかよふ跡見るたかしまの山

右、なかぬ日いと打出されたる、如何と聞え侍り、左、聞にくき所も侍らす、勝侍

るへきにこそ、略

〔按察使親長卿家歌合〕 文明五年十一月七日、

甘露寺親長
家歌合
判者一條兼
良

○題十首及ビ歌人左右各
十三人アリ、之ヲ略ス、

判者 一條禪閣

略

五番

左勝

右衛門督藤原季春卿

あは雪のふるともみえすあらち山やた野、末や今かすむらん

右

正三位藤原高濤卿

たちわたる霞も松の一しほに色をやわきて春日野、原

左右ともにことなる事なし、只今まで左の勝なき事、判者の誤に成ぬへけれ、人

丸の古風に優して、左の淡雪の松の一しほよりも色まされるとや申侍らん、

○コノ外、十七番・二十九番・四十一番・五十三番・七十八番・九十
番・百二番・百十四番・百二十六番ニ高濤ノ和歌アレドモ之ヲ略ス、

〔新撰菟玖波集〕 二 春連歌下

花散て宿はさひしき春の暮

あさちか庭の雨かすむをと

權大納言高濤

〔新撰菟玖波集〕 四 秋連歌上

ふるき都はみるもすさまじ

うちへらふ人へよもきふ露置て

權大納言高濤

〔新撰菟玖波集〕 十九 發句上

長享二年六月二十九日

三四三

連歌

長享二年六月二十九日

暮春のころを

くはるもはなにおほえぬ三月哉

權大納言高濤

三四四

發句

〔詩歌合〕 文明十五年正月十三日、

略○上

八番

左

春雪吹晴景更宜 上林頃刻似華時 不知黃鳥忘寒否 百轉曲新瓊樹枝

權大納言高濤

詩歌合

各申宜之由、

右

權大納言義尙

うちはふくをのか羽風も寒からし梢の雪にきゐる鶯

いひしりて優美にきこえ侍り、

略○中

二十四番

左

權大納言高濤

江柳絲々先識春 麴塵浮處綠猶新 東風他日絮飛後 可作青萍漾水濱

申宜之由、

右

前左近(滋野井)中將教國

かもめゐる入江の浪のとかにて靡く柳もねふるとそみる

となる難なし、

略○中

讀師

左權大納言高濤

右從一位(中院)通秀依有御製被用上首殿、略○中

判者 衆議

文明十五季正月十三日

○高濤、和歌ヲ詠進スルコト、文明三年十一月三十日・同四年四月二十六日・同十四年三月二十九日等ノ條ニ、御鞠ニ參仕ノコト、同四年七月五日ノ條ニ、七夕御歌合ニ參仕ノコト、同九年七月七日ノ條ニ、詩御會ニ參仕ノコト、同十二年八月六日

長享二年六月二十九日

三四五

讀師高濤

判者衆議

長享二年六月二十九日

三四六

ノ條ニ、千句御連歌ニ參仕ノコト、同十三年二月二十三日ノ條ニ、御詩歌合ニ參仕ノコト、同十四年九月二十八日ノ條ニ、後花園天皇七回聖忌法會ニ參仕ノコト、同八年十二月二十七日ノ條ニ、平野社假殿造營日時定ニ上卿勤仕ノコト、同十三年三月二十九日ノ條ニ、節會外辨勤仕ノコト、同十四年二月七日ノ條ニ、伏見宮邦高親王第ノ伊勢物語講釋ヲ聽聞ノコト、長享元年閏十一月五日ノ條ニ、幕府ノ褒貶歌合ニ參會ノコト、文明十三年十月一日・同十五年十二月三日等ノ條ニ、同千首和歌會ニ參會ノコト、同十四年八月十一日ノ條ニ、同褒貶詩歌會ニ讀師勤仕ノコト、同十五年正月十三日ノ條ニ、母ヲ喪フコト、同七年雜載疾病死亡ノ條ニ、近衛政家書寫ノ江次第ヲ校合スルコト、同十二年十月三日ノ條ニ、近衛政家ヨリ近衛東洞院敷地ヲ知行セシメラル、コト、同十三年年末雜載諸家ノ條ニ、義尚ニ和歌ヲ贈リテ扶持ヲ請フコト、同十八年十二月是月ノ條ニ見ユ、

〔參考〕

〔花押帖〕

○陽明文
庫所藏

海住山大納言高清

花押



三十日、戌、壬六月祓、

〔御湯殿上日記〕

○京都御所東山御文
庫記録甲二十九所收

六月卅日、みな月の御ゆする、御さた、大す・新す

御不豫ニヨ
リ御輪ヲ越
ヘサセラレ
ズ勝仁親王尊
敦親王越ヘ
サセラル

御まいり、かめつるちこめして御かたひらたふ、○中略、御不豫ノコトニカ、ル、御ねつきありて、御むつ

かしくて御わ御こゑなし、(勝仁親王)宮の御かた・(敦親王)二宮御かた御こゑありて、そのゝちきちやう所

にてねうはうたち御こゑあり、御ゆとのゝうへにて、御わたくしハかりそと御いわるあ

り、御所々々の御はにもいつも大すもし御まいりなれとも、そふくの御人すゆへ、しん

しやくにて、新すけ殿御こゑあらせらるゝ、

〔親長卿記〕

六月卅日、晴、内裏轉事無沙汰云々、

〔實隆公記〕

六月卅日、〔目〕□〔毛〕□〔戌〕□沐浴、終日無事、〔禁〕□〔御輪〕□事有沙汰、可令入御之由

長享二年六月三十日

三四七

治定之處、依御不例停止云々、
〔可尋記、凡臣下服者雖入輪不祓者也云々、
教秀卿、談如此、

○吉田兼俱、御祓ヲ獻ズルコト、便宜左ニ合敘ス、

〔御湯殿上日記〕

○京都御所東山御文
庫記録甲二十九所收 六月廿二日、○中 大わたりの御はらゑよし〔兼世〕田まい
らする、

○山科言國家六月祓ノコト、便宜左ニ合敘ス、

〔久守記〕

○宮内廳書
陵部所藏 六月卅日、晴、壬戌

一今夕輪御イワキ、予コシ申之、彦兵衛モウ〜ニヨリテ也、

御不豫、

〔御湯殿上日記〕

○京都御所東山御文
庫記録甲二十九所收 六月卅日、○中 夕かたほとより、ふと御もう〜
にて、たけたほういんめす、御かさけのよし申、御くすりまいらする、御ねつきありて、
御むつかしくて御わ御こゑなし、

七月一日、御もう〜けさもおなし御とをりにて、あさ御さか月まいらす、○中 しやう
花院よりをり五かう・御たる三から、たけたほういんに三かう二かつかはさる、○中
ほういんまたまいりて、御くすりかわりてまいらする、をなし御とをりのよし申、

吉田兼俱御
祓ヲ獻ス

山科言國家
六月祓

竹田昭慶ヲ
召サセラル
御風氣

昭慶ニ酒肴
ヲ賜フ

邦高親王等
貴永崇御參

義尚書狀ヲ
以テ奉伺ス

義政使ヲ以
テ奉伺ス
義尚重ネテ
奉伺ス
昭慶病ニ依
リ丹波重長
ヲ召サセラ
ル

三日、○中 ふしみ殿・れんき・はんせう御もう〜き〜まいらせられて御まいり、

四日、○中 けふの事も昨日にかく、うつ〜なし、○中 夕かたほういんまいりて、御み
やくとりまいらする、一昨日より御風又入たるよし申て、御くすりかへてまいらする、

五日、○中 ほういん御みやくにら、

六日、けふも御みやくにら、むろまち殿より御ふみにて、御もう〜の御〔おほ〕つかな
さ御申あり、おひたたしきはいら、

七日、○中 夕かたほとに、ほういん御みやくにら、御けんのよし申、

十三日、○中 昨日の御かせひきに、けふもまた御ねつきあり、たけ田くわんらくとてし
こうせず、御くすりまいらする、

十四日、

〔預書〕「ひんかし山殿よりはすら、御もう〜いかゝのよしも御申、」

十七日、○中 むろまち殿より夜に入て、御おほつかなき御ふみにて又御申、

十八日、ほういんくわんらくとてまいらす、しけな〔丹波〕かめして御みやくのやう御たつねあ
り、御ねつきはさりたるよし申、御くすりかへてら、

長享二年六月三十日

雨ふる、

十九日、御くすり又かはりてらる、

廿五日、○中略 けふの御連歌に御いてあり、されとも御くるしからず御さか月らる、○月次連歌御會ノコト、正月二十、五日ノ條ニ見ユ、

八月六日、御もうくのち御つめいしめて御きりあり、御さか月そとらる、

七日、御ゆかけ御さたあり、御さか月らる、めてたし、(庭田雅行)源大納言しこう、御たるまいらるゝ、ひんかし山とのより御しやうしんのおり十かうらる、○中略 けふの御ゆにつきて、

たけたに千疋のおりかみたふ、上らふ御まいりあり、
十二日、御くしそと御けつりあり、御くしなかないし殿、いわち□のちいしめてらる、こ御所にて、御さか月らる、

〔後法興院政家記〕 七月十二日、甲戌、晴、○中略 今月始比主上御不豫、○中略 當時流布御風氣云々、○惡疫流行ノコト、七月二十日ノ條ニ見ユ、

〔親長卿記〕 六月廿日、晴、○中略 後聞、吉田(兼世)二位亮閣之時、無相違之由申入之間、有御行水之處、御不例候間被略云々、

七月二日、晴、傳聞、主上自一昨日以外御惱、流布事云々、即顛倒衣裳參内、可參常御

御不豫ノ後
初メテ御爪
ヲ剪ラセラ
ル
御湯掛ノ御
祝
義政折ヲ獻
ズ
昭慶ニ千疋
ノ折紙ヲ賜
フ
御梳髮
流布ノ御風
氣

御行水ヲ略
サセララル
甘露寺親長
ヲ召サセラ
ル

三條西實隆
ヲ召サセラ
ル

常在光寺未
ダ建立ノ儀
ナシ

所云々、仍參簾臺、御平臥、昨日雖爲散々之儀、今日聊御減氣云々、

廿四日、晴、被下勾當内侍奉書、明日御月次、雖爲御無力可有出御、

〔實隆公記〕 七月八日、庚午、○中略 □番第一所役也、仍早朝參内、參常御所庇、暫

□快御座心苦御體也、

十三日、乙亥、晴、今日當番也、一身參仕、主上御不例今日又有御再發之氣云々、所驚存也、入夜依召參三間庇、暫祇候、御病體御心苦敷者也、

○義熙、義尙、五山ノ僧ニ命ジ、御不豫平癒ヲ祈ラシムルコト、七月十九日ノ條ニ見ユ、

義政、山城常在光寺・西芳寺・林光院ヲシテ、各寺全盛時ノ寺領及ビ衆僧員數ヲ注進セシム、

〔蔭涼軒日録〕 正月廿四日、天快晴、○中略、義政、等持寺ニ詣ルコト、相公曰、昔等持院殿自關東御上洛時、先御坐于常在光寺、次御坐于柳原、次御坐于當寺云々、愚白、常在光寺于今無建立儀、彼衆僧衆書記云、老僧一人于今在之、江州田上有寺領、當年若入手可立一字歟、相公曰、以前看彼在所、諸位牌等皆棄擲在之、寺家報疆所々難看分云々、

長享二年六月三十日

三五二

六月晦日、天快晴、○中遂南禪方丈、茶話次、對住持云、(全前)今朝謁東府、被仰出子細者、常在光寺・西芳寺・林光院此三ヶ所諸庄園全盛之時、土貢并衆僧之數、委敷書之可進上之由、可相命之由被仰出、懇々書立之、早々可給、可供台覽、住持印文和返答云、吾先師住常在日、吾爲侍衣數年居之、其後又移首座寮半年在此、以故彼寺產事委曲識之、書立以可進上云々、○中及歸以丹公、公帖四通贈鹿苑院、○中又林光院領所々書立、同衆僧員書立早々可有進上之由白之、

七月朔、癸不參、天快晴、○中西芳寺出官來、愚面之、傳昨日被仰出之旨、蓋寺家全盛之時、寺產所々土貢并衆僧以下在寺家上下之衆書立以可進云々、○中自常在光寺々領所々并衆僧數等、如全盛時書立之、使者僧持來、

常在光寺
領目錄

賀州二ヶ村 八百斛、百五十貫文、

丹後國大石上下村 三百五十石、百五十貫文、

近江國田上杣庄 二百石、十貫文、

丹波國市原村 七十五石、十貫文、

備中國田上庄 十貫文、

九條唐橋慈恩寺分 三石一斗、

中御門東洞院南西頰地子分 六貫文、

四條坊門朱雀地子分 二貫百文、

以上千四百二十八石一斗、

已上三百三十八貫百文、

此内諸下行引之、

衆僧三十人 行者七人 力者七人 一役七人 總計五十七員

五日、不參、天快晴、○中

常在光寺領所々土貢目錄

一加賀國二ヶ村 八百斛、
百五十貫文、

一丹後國大石上下村 三百五十斛、
百五十貫文、

一近江國田上杣庄 二百斛、
十貫文、

一丹波國市原村 七十五斛、
十貫文、

一備中國田上庄 十貫、

同衆僧等員
數

長享二年六月三十日

三五三

長享二年六月三十日

三五四

- 一九條唐橋慈恩寺分 三斛一斗、
 - 一中御門東洞院南西頰 六貫文、地子分、
 - 一四條坊門朱雀 二貫百文、地子分、
 - 已上千四百二十八石一斗、
 - 已上三百三十八貫百文、
- 此內國下行・荒不作・守護役・臨時課役・旱水損等在之、
常在光寺 衆僧三十人 行者七人 力者七人 一役七人 已上五十七人 佛眞十六分
諸役者免十三分 已上八十六員

西芳寺領
目錄

西芳寺領所々目錄

- 美濃國米田庄内比久見郷 捌拾貫三百六十一文、
- 同國梁瀬郷内樂田村南方 參拾玖貫五百八十七文、
- 同國柿野郷 伍拾六貫二百六十二文、
- 近江國柏木ノ内酒人郷 佰七拾斛、

- 武藏國小澤郷金程村 久敷不知行之間不存之、
- 丹波國勝林寺嶋田地川成、同國今林庄内行定名・守里名同上、兩所、一斛五斗、
- 備後國草村國衙并地頭職 伍拾貫文、
- 但馬國太田庄内中山須地坂門新 貳拾柒貫文、
- 阿波國名西庄内守清名 拾貫文、
- 攝津國安威庄 參拾柒貫文、
- 駿河國阿野庄内東原村 貳拾貫文、
- 播磨國伊和東郷地頭職 陸拾四貫九百九十四文、
- 丹後國小河村并成富保 陸拾貫文、
- 加賀國倉月庄内諸職名田 貳佰貫文、
- 同國安主名 貳拾參貫文、
- 和泉國下條郷地頭職 陸拾參貫八百六十九文、
- 伊勢國宿野御厨 陸貫文、
- 山城國圓願寺安依名植松并散在 伍拾捌斛七斗四升一合、

長享二年六月三十日

三五五

長享二年六月三十日

三五六

洛中屋地并寺邊 參拾參貫七百十八文、
同波多野方地子 拾貫文、

已上米貳佰參拾斛貳斗四升壹合、

錢柒佰捌拾壹貫八百十文、

西芳寺定案佛餉八分、 衆僧二十二員、

行者六人 力者十三人 一役七人 已上五十六分

同衆僧等員數

林光院寺領目錄

林光院領所々目錄

一尾張國犬山郷年貢錢 伍百四拾貫文、

一加賀國橫北郷年貢錢 貳百貫文、此内百貫文安樂光院本役遣之、請取在之、同米三百斛、

一美濃國鵜飼庄年貢錢 佰貫文、

一播磨國々分寺年貢錢 三拾貫文、

一安藝國治多年貢錢 伍拾貫文、

一但馬國矢根年貢錢 三拾貫文、

一近江國尊勝寺年貢米 五拾斛、
一攝津國米谷村年貢錢 三拾貫文、
一東洞院屋地子 拾貫文、夏冬分、
已上米三百五拾斛、

錢九百九拾貫文、

長享貳年七月二日

院主瑞智 在判

同定衆員數

林光院定衆之吏

一僧拾八員 加堂僧六員、 一行堂三員 加聽叫、

一力者拾壹員 加御分、

已上

長享貳年七月二日

院主瑞智 在判

八日、天快晴、○中 午時謁東府、常在光寺領所々土貢目錄并衆僧員・行力等員、皆全盛之時分書之可進上之命先日有之、西芳寺・林光寺〔院〕三ヶ寺同前、今日以三ヶ寺書立供台

長享二年六月三十日

三五七

長享二年六月三十日

三五八

覽、見留御前、

義尙、歌合ヲ行フ、

〔常德院集〕

(長享二年)

六月つくる日歌合し侍りしに、名所夏祓、判者

しかのうらや春のおもかけ立浪の白ゆふ花(義尙)にあさのゆふして

路納涼

夏ふかき山ちの夕日色くれて秋にすゝしきならの下かけ

欲迎秋近

今もさくまかきの萩のさよ更て一はのそはむ秋の風かは

寄風戀

うらめしや恨やりてもふくかせのつてをいかにとゝはゝこそあれ

寄草戀

しはしとて結ふ契りの枯行に秋まつ草よしけらすも哉

天

わか心くるらしと思道よりそ天津みそらもきよくてらせす

自ラ判者ト
爲ル
義尙ノ和歌

詠草ノ包紙
ニ和歌ヲ書
キテ冬良ニ
返ス

冬良ノ返歌

聖護院道興
取次ク

義尙政元ノ
ズ遮ルヲ知ラ

甲

四方にみつ星のやとりに雲の腰はやふき歸し空もはれなむ

是月、義尙、一條兼良ノ詠草ヲ、同冬良ニ借覽ス、

〔常德院集〕

(長享二年六月)

(一條兼良)

その比、後成恩寺殿の詠草をみて、

(一條冬良)

内大臣に返しつかはすとて、つゝみ

紙に書付て侍し、

さくもゝのこと葉の花のかゝみにもたつをもかけの水くきの跡

彼作者桃花也、故如此、

返し

君かいまみかきそへすの塵つもることのはなの鏡ならまし

義尙、大内政弘ヲシテ、上洛セシメントス、細川政元、之ヲ遮ル、

〔大乘院寺社雜事記〕

六十

八月廿日、

一杉次郎左衛門尉龍興院ニ相語云々、(致也)大内上洛事、御内書聖護院准后ニ被申之、(道興)自細川

方聖護院殿方事相支申間、御内書于今不下國、京都ニ在之、六月以來事也、(存)杉不知所

分也、内々聖護院殿ニ尋申入子細在之云々、(義尙)江州ニハ此子細於無御存知而、可罷上旨

長享二年六月是月

三五九

反音ハ然ル
ベカラズト
難ズル者ア
リ

御待歟云々、
義尙、名ヲ義熙ト改ム、

〔實隆公記〕

五月十二日、乙亥、霽、○中

大外記〔中略〕師富朝臣來、相談云、先日二階堂〔殿行〕以折

番示云、室町殿御名字、反音不可然之由難申者在之、所存如何之由申之間、誠不可然歟
之由申之了、其字注等語之、今引字書載左、

義尙

仰、韵會反云々、

軻、韵鏡反如此、此字在廣韵、不載韵會歟、

韻會、去聲嘯笑韵、

輶〔博雅〕輶也、一曰小車也、又輶輿也、漢淮南王安諫擊固越書輿輶

而險嶺、注臣瓚曰、今竹輿音橋、增韵去聲通用有韻、

輶、下平蕭韵、

竹輿〔漢〕嚴助傳輿輶而險嶺、服虔曰、隘路車也、薛瓚

曰、今竹輿車、音如橋梁之橋、又笑、韻、〔毛詩〕增韵

軻字之注尺非駟馬高蓋之車、大將軍執天下柄之人御名字不可然歟之儀也、予同心也、
六月廿三日、乙卯、雨降、○中室町殿袖中抄〔中〕廿册、被進上之、被副〔中〕御内書、則令奏達

了、○實隆、義尙ノ命ニ依リ、袖中抄ヲ書寫シテ、義尙ニ進ムルコト、三月二十一日ノ條ニ見ユ、抑御改名之由一昨日聞之、今日御内書則義熙、
御草名也、

九月〔廿日〕□□、庚辰、天晴、早〔朝〕□□進發、先下著比叡坂本謁亞相、則乘舟下著蓮臺寺、直垂等

聊著改之參將軍御陣、今日任槐參賀也、○中略、義熙、内大臣ニ任ゼラル、コトニカ、ル、九月十七日ノ條ニ收ム、抑御太刀二腰、各

進上之、是御改名〔中〕□□同時申之也、

〔後法興院政家記〕 九月廿日、〔庚辰〕天晴、風吹、早旦下向江州、爲參賀室町殿也、○中

義熙、内大臣ニ任ゼラル、コトニカ、ル、九月十七日ノ條ニ收ム、○中又室町殿改名事、各別ニ進太刀、金、

〔親長卿記〕 九月廿日、晴、傳聞、○中先日御改名義熙、今日各進上御太刀云々、

〔久守記〕 ○宮内廳書 九月廿七日、天晴、〔丁亥〕

一本所御陣より御歸、目出度、御太刀二腰御入候也、御昇進・御カイ名御禮也、申次安

東右馬佐也、

〔大乘院寺社雜事記〕 〔六十〕 七月三日、

一室町殿御改名云々、義熙、〔本名〕義尙、

九月廿四日、

延臣僧侶義
熙ニ參賀シ
太刀ヲ進ム

近衛政家

山科言國

長享二年六月是月

三六二

一石左衛門・春辰・梅千代罷下、〔簡〕勾御所御禮在之、内大臣分・御改名分御太刀二振進之、此門跡兩所より進之、

〔政覺大僧正記〕十五 七月朔日、癸亥、天晴、

一堀川判官夏弘、下向、○中略

一夏弘語云、大樹義熙ト御改名云々、義尙本名也、

九月廿四日、甲申、

一石左衛門・春辰・梅千代罷下、鉤御所御禮去廿日在之、内大臣分・御改名分御太刀二

振進之、兩所ヨリ進之、○中略御改名事義熙云々、

〔蔭涼軒日録〕

九月廿三日、不參、天晴、早旦書疏之御銘、○中略、義熙誕生疏ノコトニカ、ル、十一月二十三日ノ條ニ

收、以上十九ヶ所、此内於鉤之御所一疏御自筆被遊御銘、開之見則慶雲院疏也、○中略御誕

生御祈禱自今日初、御名乘義熙於疏中讀之、

〔室町家傳〕

常徳院殿義尙改熙、長享二年月日改名熙、

〔足利家官位記〕

常徳院殿義尙后改義熙、又爲御改名内々及御談合、然而依珍事不及沙汰、長享二年月日御改名、義熙、

長尾房清、禁制ヲ下野鑿阿寺ニ掲グ、

〔鑿阿寺文書〕

○三下野

きんせい

右鑿阿寺々中其外の事、夜の五以後七以前、音せてとをる人體あらひ、惡儻として可致其沙汰、若急用たらひ、ちやうちん・たいまつを以て往還すへし、若此制止をそむく族あらひ、權門勢家おきらひす可有其成敗之狀如件、

長享二年六月 日

〔長尾〕平房清(花押)